(一)輪　如來の法輪を轉ずる義なり

頌に曰く

諸佛金剛灌頂儀　　汝已如法灌頂竟　　爲成如來體性故　　汝應受此金剛杵朱。音讀なり。裏

略出經を引て曰く、汝已に灌頂して金剛尊主を獲得し竟んぬ。此縛曰羅常に汝が心中に住して、三摩地身となる云云

密明に曰く　唵縛曰羅二合引地鉢底二怛怛縛引二合避詵去者彌、三底瑟侘、二合戮曰羅、二合三摩耶、二合薩怛鑁

○次に金剛杵を收め取り、弟子の本名の上に於て金剛の字を加へて、名となして之を呼び、應に此の眞言を誦すべし。　押。弟子の實名の上に金剛佛子の四字を加へて之を呼ぶ、而して後に眞言を誦するなり　唵、縛曰羅、二合薩怛縛二合避詵去者彌、二戮曰羅二合曩麼、引避囉紇帝系、戮曰羅、二合曩麼引

○次に篦を以て兩眼を拂へよ、覽字を以て朱。歸命の句を加ふ、以下同じ金篦を加持す、又覽字を觀じて兩眼の中に於て無智の膜を淨めよ、偈に曰く

佛子、佛汝が爲めに　無智の膜を抉除すること　猶し世の醫王の　善く金篦を用ふるが如し

汝金剛の眼を開いて　法の實相を見ることを得ん。

○次に(一)輪を以て受者の跏上に置け、二足間云云吽字を以て金輪を加持せよ。

(一)商佉　暗字三反加持し受者に渡し頂戴させ右の手にて右の口に當つる樣にして吹く勢を作せと申し渡す受者吹く勢をなす間に大阿偈を讀み聞かす。

(二)鏡　心上に滿字を觀じて妄執の垢を除くと觀じ功能を讀み聞かす。

(三)師を恭敬す　新阿闍梨を恭敬する意をなす大阿は此の文は唱へずして觀ずるなり。

(四)壇　壇前云云受者大壇の正面に合掌して三揖す、大阿白蓋を以て受者を覆ひ禮に隨て蓋を上下す。

○次に(一)商佉を以て右の手に授け、暗字を以て法螺を加持せよ、偈に曰く

汝今より以後　諸佛の法輪を轉じ　無上の法螺を吹いて　心を一切處に遍せしめよ

當さに疑悋の心を離れて　勝行の道を開示し　一切時處に於て　能く諸佛の恩を報ずべし。

○次に(二)鏡を授けて見せしめ、滿字を以て明鏡を加持せよ、又滿字を心上に觀じて妄執の垢を除け、告げて曰く

一切諸法の性は　垢淨不可得なり　實に非ず亦た虛に非ず　皆因緣より現ず

當さに知るべし諸法は　自性所依なし　汝は今眞の佛子　廣く衆生を利すべし

(三)師弟子に於て當さに恭敬を生ずべし、此の人は能く諸佛の種を紹ぐが故に。朱。以下教授作法

○次に大阿闍梨、白傘蓋を執て受者の頂に覆ふて三匝大壇を遶る、即ち(四)壇前に留めて佛を禮せしむ、其の蓋身の上下に隨ふ。　○次に曼荼羅の前に立對して、弟子に告げて曰く、佛子汝今已に阿闍梨位を成就し竟んぬ、諸佛並に金剛薩埵等の諸の眞言

主、一切の天神護法、既に共に佛子を知り給ひぬ云云　○次に共に小壇所に還り著く、先づ新阿闍梨をして西の座に著かしむ、即ち大阿闍梨諸尊に白さく、今某等に灌頂を與へ竟んぬ、諸尊を附屬して明藏を持せしむ、此の語を作し已て當さに傘蓋を放つべし朱。以上教授　○次に大阿闍梨東の座に著く。　○次に閼伽の印眞言を行じて、閼伽香水を供す。　○(一)次に八供の、印言を行じて、塗香●花●焚香●飲食●燈明を供す、種種の香花を以て供養することは、此の受者佛位に坐する故なり云云　○次に大阿闍梨、念珠を取て羯磨會大日の眞言を誦すること百遍　○次に後供を行ずべし。　○次に(二)印可を授く偈に曰く密印を授くべし　灌頂を授與し竟んぬ　佛子佛位に昇れり　皆諸尊　及び三密の明藏を附屬すと。

○次に寶冠を脫すべし。　○次に讃の聲を止む。　○次に赤傘蓋を以て、新阿闍梨の上に覆ひ、八祖大師を巡禮し了て出堂。　○次に大阿闍梨、返りて大壇に著き後供を獻ず、以後の作法例の如し。　○次に大阿闍梨、新阿闍梨を率ゐて護摩堂に著す息災護摩、滅業障法なり、作法別紙にあり

三寶院權僧正御作なり。

(一)次に八供云云　三摩耶會の印に羯磨會の明なり。

(二)印可を授く偈に曰く　大阿闍梨率都婆印を結び受者に結ばせ、三密命を授く、次で偈を返授く、偈を讀み聞かす。

本次第は金剛界と大同なり、又國譯密教事相第一に委細なるが故に頭註は大略す。

(一)次に正面云云　五瓶を渡し了りて教授大阿闍梨の氣色を窺ひ受者引入の夜の初夜の通香所は含香を受け、含香を與へ酒水を竪に含ませ、許りを含ませ、酒水を竪に香を許り三度なし、大阿闍梨の音を聞き、式文を懷中し、酒水を横に覆面を加持す、一切乃至五眼の文を三申聞かせ、次に三昧耶印を結び、唵摩耶の明の文を三返口寫す。

(二)次に壇前云云　教授三摩耶の印を握り、內に二中の頭を入る。大阿闍梨の印を召して內に明一反招ぐ。

(三)次に即ち云云　反眞言三切に三反口寫しにさせて受者を唱へさすること也

○胎藏界

○先づ大阿闍梨入堂して禮盤に著す。　○次に供養法例の如し。　朱。以下教授作法○次に正念誦畢て、座を起ちて五瓶を一一取り、各〻三匝壇を廻り、即ち小壇の机に置く、本法に違せず中瓶を中央に置き、丑寅角の瓶を東に置き、辰巳の瓶を南に置き、未申の瓶を西に置き、戌亥の瓶を北に置く、皆花を拔いて各〻本處に置く。　○(一)次に正面の戶を開て出居す、香水を加持して新阿闍梨を召して、塗香を以て手に塗らしめ、香水を灑いて門內に入れて、覆面を以て之を覆ひ朱、不動明を以て之を加持す告げて曰く、一切諸の惡趣の門を閉ぢ、能く淸淨の五眼を開かん。　○三昧耶の印を結んで、三摩耶薩怛鑁の明を口授す三返即ち忍願二度を竪て丶針になす。　○(二)次に壇前に引入して、香象を越過して香氣に薰せしめよ、明に曰く　曩莫三曼多沒馱南阿、一薩縛怛羅鉢羅底訶諦、二怛他蘖黨矩奢、三冒地浭哩也、鉢哩布羅迦、四弱吽鑁斛、娑婆賀　○次に受者壇前に立ち、白花を以て其の針の上に挿む、師應さに告げて曰く、佛子今已に如來眷屬の中に入つて、當さに如來の一切の悉地を得べし、未入壇の者に此の事を說く莫れ、其の罪重し。　○(三)次に即ち三たび此の密語を授けて曰く　唵三昧耶薩怛鑁、鉢羅底

車、縛曰羅穀

誦し了て投花の、花の落つる所に隨て其の尊を知らしめよ。○次に覆面を脱がしめ了て告げて曰く、金剛薩埵、汝が身を攝受して速に悉地を成じて五種の眼を開かん云云

○次に投ずる所の花を取て眞言を誦して曰く　唵鉢羅底、仡哩賀拏、怛羅係給、薩怛縛、摩訶摩擺

誦し了て取る所の花を、彼の受者の頂に安くこと三度、大力の菩薩我が身を攝受し給ふと想へ。　○次に受者をして護身せしめよ。　○次に四禮せしめよ四つながら金剛合掌、明妣に禮常の如し　○(一)次に受者を引て小壇の前に到り、左の足に花門を蹈み、右の足に花臺を蹈んで臺上に坐せしむ、大阿闍梨東の座に著き、新阿闍梨西の座に著く。　○次に吉慶讃を唱へよ催すべし　○次に五股を取て首を加持す吽を以て加持す　○次に(二)五瓶の水を以て、次第に受者の頂に灑ぐ中より之を始む　○遍照尊　金剛外縛して忍願直く竪て、上の節を屈め進力を拄へて、各〻中指の背に著けて頂に置け、眞言に曰く　唵薩縛怛他蘖戴、濕縛哩耶、毘曬迦吽

○阿閦佛　金剛縛して忍願を竪てゝ針の如くして額に當つ、明に曰く　唵縛曰羅、

(一)次に受者云云　大阿闍梨座して法具の筥より散杖を取り出し中瓶より次第に指す、初夜の通りなり。

(二)五瓶の水中瓶に白色阿字を觀ず、受者大阿の心月輪にも丸字を觀ず、是に就て五點と無點の兩方あり、今は無點の阿字を宜しとす五瓶の次第命剛界の如し。

薩怛縛、毘詵遮給吽

○寶生尊　金剛縛して忍願屈して寶形の如くして、頂の右に當つ、明に曰く　唵縛曰羅、囉怛曩、毘詵遮給、怛洛

○無量壽佛　金剛縛して忍願少しく舒べて蓮葉の如くして、頂の後に當つ、明に曰く　唵縛曰羅、鉢娜麼、毘詵遮給、紇哩

○不空尊　金剛縛して忍願掌に入れて面を合せ、壇惠禪智各〻相ひ拄へて頂の左に置け、明に曰く　唵縛曰羅、羯磨、毘詵遮給、惡

○次に(一)寶冠を被らしむ。○次に(二)四佛加持常の如し、受者作すべし　○次に五佛灌頂常の如し　○次に四佛繫鬘常の如し　○次に新阿闍梨大日尊となると想へ、頂上に暗字あり、心中に阿字あり、具には百光遍照の如し。　○次に如來身會、三十餘の印眞言を行ずべし、但し一一受者に備へしむと想ふべし。

○次に扇を以て受者の身並に四邊を扇ぐべし同前　○次に白拂を以て受者の身を掃ふべし押。慈救三　○次に塗香を以て受者の胸に塗れ。　○次に五股を以て偈並に明を誦して、受者の兩手に授く朱。兩手を開く頌に曰く

諸佛金剛灌頂儀　汝已如法灌頂竟　爲成如來體性故　汝應受此金剛杵

(一)寶冠受者の首を前の方へ傾けさせ被らしむ。

(二)四佛加持大阿闍梨に命じて結ばしむ、大阿は法界定印にて次の新阿闍梨觀に住す受者の如來身會の印明の終るまで此の趣きを觀想するなり。

密明に曰く　　唵縛曰羅、地鉢底、怛怛縛、避詵者彌、底瑟佗、韈曰羅、三摩耶、
薩怛鑁

○次に金剛杵を收め取り、弟子の本名の上に於て、金剛の字を加へて之を呼び、此の眞言を誦して曰く　唵一縛曰羅、薩怛縛、避詵者彌二韈曰羅曩麼、避嚧紇帝係、韈曰羅曩麼

○次に金篦を以て兩眼を拂ひ、覽字を以て篦を加持し、又覽字を觀じて兩眼の中に於て、無智の膜を淨む、偈に曰く

佛子、佛汝が爲めに　無智の膜を抉除すること　猶し世の醫王の　善く金篦を用ふるが如し

汝金剛の眼を開いて　法の實相を見ることを得ん。

○次に(二)鏡を授けて見せしめ、滿字を以て明鏡を加持す、又滿字を心上に觀じて妄執の垢を除く、告げて曰く

一切諸法の性は　垢淨不可得なり　實に非ず亦虛に非ず　皆因緣より現ず
當さに知るべし諸法は　自性所依なし　汝は今眞の佛子　應さに廣く衆生を

(二)鏡　鏡と輪と商佉と金胎にて前後することは金剛界は敎王經の說に依て輪、商佉、鏡となし、胎藏は大日經の說に由りて今の如し。

利すべし。

師弟子に於て當さに恭敬を生ずべし、此の人は能く諸佛の種を紹ぐが故に云云。

○次に輪を以て受者の跏上(二足の間云云)に置き吽の字を以て金輪を加持す。

○次に商佉を以て右の手に授け、暗字を以て法螺を加持す、偈に曰く

汝今より以後　諸佛の法輪を轉じ　無上の法螺を吹て　心を一切處に遍せしめよ
當さに疑悔の心を離れて　勝行の道を開示し　一切時處に於て　能く諸佛の恩を報ずべし。

○次に大阿闍梨(朱。以下敎授)、白傘蓋を執て受者の頂に覆ふて、三匝大壇を遶る、即ち壇前に留て佛を禮せしむ、其の蓋身の上下に隨ふ。　○次に曼荼羅の前に立對して、爲めに三摩耶を說く、佛子汝今已に阿闍梨位を成就し竟んぬ、諸佛金剛薩埵等の諸の眞言主、一切の天神護法、既に共に佛子を知りたまひぬ云云。　○次に共に小壇所に還り著く、先づ新阿闍梨をして東の座に著かしめ、卽ち大阿闍梨諸尊に白さく、今某等に灌頂を與へ竟んぬ、諸尊を付屬して明藏を持せしむ、此の語を作し已て傘蓋を放つ

(一)次に道具上古は此の處に於て五股寶冠等の御道具を付囑するも今時は此の義なし。

(二)明並に偈今は偈次に明に偈を授く作法は先づ大阿五股を持し此の金剛杵を次に唵薩縛云を唱へ次に云反を唱ふ此の云一眞言を受者唱ふるなり、此の阿唱ふるなり、此の五股偈眞言を誦して者は合掌して大頭受の間に挿みて三度頂戴す、授ること一度なり、次に汝一切衆生に於て云云汝を讀み閉かせて五股を取り返す。

べし朱。以上教授　○次に大阿闍梨西の座に著く。　○次に閼伽の印眞言を行じて、閼伽香水を供す。　○次に五供の印言を行じて塗香、花、焚香、飲食、燈明を供す、種種の花香を以て供養するは、此の受者は佛位に坐する故に云云。　○次に大阿闍梨、念珠を取て胎藏大日の眞言を誦す百返　○次に後供を行ずべし。　○(一)次に道具を授く。　○次に殊に五股を授く或は獨股を授く大阿闍梨杵を執て(二)明並に偈を誦して、之を授與して告げて曰く弟子此の杵を受けて頂上に安ず

此の金剛杵は　諸佛の體性なり　金剛薩埵　手に執る所の者なり

汝禁戒を護て　常に當さに受持すべし。

弟子受け了て此の決定要誓の密語を授け、其をして此の密語を誦せしむ。唵一薩縛(サタ)怛他(タ)蘖多(ギヤタ)、悉地縛(シツチバザラ)曰羅(サン)、三摩耶(サンマヤ)、底瑟他(チシユタ)二翳沙怛縛(エイサトバ)三駄羅耶彌(ダラヤミ)、四縛曰羅薩怛縛(バザラサトバ)、五吽(キキキキキ)吽吽吽吽　誦し了て弟子に告げて云く、汝一切衆生に於て、常に慈愍哀矜(コウ)を生じて示し誨(ケシ)へて厭離を生ずること莫れ、又頌に曰く

此等の三昧耶は　是れ諸佛の所說なり　守り持して善く愛護すること　當さに身命を保つ如くすべし。

(一)次に印信上古は此に印信を渡す、只今は後日に渡す。

(二)密印外五股を結び受者にも結ばせ(印)(信)(灌)(頂)の五字の明三返口寫にして三度。今は讃の終り次第なり。

(三)押止めず

(四)次に袈裟云云　大阿下禮盤に着く、教誡の座に着く、教誡は此の灌頂は秘密肝心の大事なり兩部傳法無事に成就し殊に冥加の至り、天氣なる能く悉地の吉瑞なり、信心を專らとなし佛恩を報ずべしと。

○次に受者、此の如くの敎を受けて、師の足を頂禮して言して曰く、大師の敎の如く我れ誓て修行して、佛恩及び大師の恩に報い奉り、敢て師の命に背かず、亦た敎理に違せざらん云云。

○次に(一)印信此の時にあるべし然して(二)密印を授くべし外五　灌頂を授與し竟んぬ　佛子佛位に昇れり　皆諸尊　及び三密の明藏を付屬す。

○次に寶冠を脫すべし。　○次に讃の聲を止む。(三)押。止めず。　○次に受者堂內の座に著く。　○次に大阿闍梨、大壇に返へり著て後供を獻ず、以後の作法例の如し。

○(四)次に袈裟を脫して授けて著せしめ、其の本袈裟を以て大阿闍梨著す云云但し便宜に隨ふべし一圖に非るのみ朱。以下效授　○次に赤傘蓋を以て新阿闍梨の上に覆ひ、八大師を巡禮し了て出堂、乘畢の儀式、大阿闍梨入堂儀式の如し云云。

汝獲無等利　位同於大我　一切諸如來

此敎菩薩衆　皆已攝受汝　成辨於大事

三寶院權僧正御作なり。

○誦經導師作法　○鎭守讀經導師作法上の如し　○中間護摩次第別にあり。

本式は以上の金胎兩式に準ずるが故に頭註之を略す、本式は般若寺觀賢の作製なり。

○國譯結緣灌頂三昧耶戒作法（金剛界）

○先づ阿闍梨、持金剛衆、乞戒、讃衆等、同じく會して大馬道に集まる、即ち讃衆左右に立列す（四十人なり（異本三十）螺鈸の人を先となす）　○次に乞戒師中間に立つ（香爐を持す）　○次に持幡童二人左右に立つ。　○次に阿闍梨畳に乗る。　○十弟子各〻物を持して左右に立列す。

○次に威儀の僧俗立列す。　○次に立列の後、堂達の僧等、道具の筥を開封すべきの由を申ぶ、即ち封を開いて五股を取て阿闍梨に奉る、自餘の道具は、持金剛衆に傳へ取らしむ。　○次に讃衆讃（四智讃）を誦すること三度、誦し了るの後ち螺鈸を打（つ）く、灌頂堂を差して進み行いて、禮堂に立列すること常の如し。　○次に阿闍梨禮堂の東の砌に至り、即ち畳より下りて南の壇上より進み行く、持幡童二人同じく進み行いて、高座の前机に當て左右に之を立つ。即ち阿闍梨佛前に至て禮拜す。　○次に高座に登る、即ち持幡の童、机の左右に幡を立て置きて退去す。　○次に乞戒師禮盤の下に立つ、但し持金剛衆高座を廻ること三匝、其後鉢の音止むと同時に著座す、十弟子威儀僧等高座の下（モト）に坐す、次に著座の後職衆總禮。　○次に阿闍梨護身結界、香水を加持して自身及び大衆等を灑ぎ淨む。　○次に振鈴（常の如し）　○次に乞戒師（金一打）　禮佛の頌を

唱ふ。　○次に唄（云何唄）　○次に散花（毘盧遮那）　○次に乞戒師（金一打）　表白、神分並に傳戒勸請等。　○次に阿闍梨表白（香爐を取り金一打）

敬て金剛界の曼荼羅聖衆、並に三寶の境界に白さく、夫れ以れば、得難く遇ひ難き者は三密の教、解（さ）とり難く入り難き者は兩部の界なり、而るに某甲、忝くも龍象の末に列つて、誤て師子の座に登る、爰に金剛の弟子、深く三菩提の心を發して、三昧耶の戒を受けんと請ふ、今某甲、慵愚の堪へざることを耻づると雖も、蓋んぞ先賢の傳ふる所を授けざらん、仰ぎ願くは、理智の法身必ず照明を及ぼし、海會の聖衆定めて哀愍を垂れたまへ、敬て白す。

○次に身口意を淨めん。淨三業の眞言　唵娑縛（二合）婆縛秫駄引薩縛達摩、（二合）娑縛婆縛秫度憾

○次に聖衆を禮拜したてまつる。普禮の眞言　唵薩縛怛他蘖多、幡那滿娜曩迦嚕弭

○次に五佛を禮す（照曰く、本式博士に載すと雖も、醍醐流唱へ難し、故に宜しく南山進流博士を用ふべし）

曩謨、微瑟駄、達麼駄都、摩訶吠盧遮那、薩怛他蘖都

曩謨阿利耶、阿乞芻毘也、薩怛他蘖都

曩謨阿利耶、囉怛(ラタン)曩、努波縛(ハンパ)、薩怛他蘖都

曩謨阿利耶、路計入縛羅、囉惹(ラランジャ)、薩怛他蘖都

曩謨阿利耶、阿目佉悉底、薩怛他蘖都

曩謨縛曰羅馱都、薩縛沒馱南、薩怛他蘖都

曩謨摩訶佉魯拏(ギャロン)、誐羅婆虎左、薩縛沒馱南、薩怛他蘖都

○夫れ佛性三昧耶戒に入らんと欲はゞ、先づ須らく無上菩提の心を發して大菩薩の戒を受け、身器清淨にして然して後に傳法の明藏を受くべし、略して十種の門あり。

一には歸命　二には運心供養　三には懺悔　四には歸依　五には發菩提心

六には遮難　七には請師　八には羯磨授戒　九には四重を說く　十には十重を說く。

第一歸命　弟子某甲

十方三世の佛　諸大菩薩諸の聖衆を歸命し上る

大導師となつて我等をして　諸の惡趣を離れしめて涅槃を示したまへ

是の故に我今、心を至して禮し上る

歸命の眞言に曰く　唵引曩莫薩縛怛他蘖多、迦野弭(ビ)乞質多、縛曰羅二合滿娜(ビ)南迦魯弭

○第二運心供養　弟子某甲

今十方世界の中の　有らゆる一切微妙の供

香花幡蓋諸の莊嚴に於て　心を運んで兩部界の

微塵數量の諸尊等に供養し上る　哀愍攝受して大願を成ぜしめたまへ

普供養の眞言に曰く　唵誐誐曩三婆縛、跋折羅二合斛

○第三懺悔　弟子某甲

無始生死流轉の中に　具さに極重無盡の罪を造れり

親(そのあた)り十方現在の佛に對して　悉く皆懺悔して復た作さじ

出罪の眞言に曰く　唵薩縛幡波、薩怖二合吒、娜訶曩、縛曰羅野、娑縛賀引

○第四歸依　弟子某甲

始め今身より來際を盡すまで　三身福田の界に歸依し

方廣大乘の法に歸依し　不退の菩薩僧に歸依す

唯願くは十方一切の佛　我等が歸依の心を證知したまへ

歸依の眞言に曰く　唵薩縛沒馱冒地、薩怛鑁、二合設羅(シヤラ)敕(ダン)蘖車弭、縛曰羅二合達麼(キリタ)頡利二合

○第五發菩提心　弟子某甲

衆生無邊なり誓願して度せん　福智無邊なり誓願して集めん

法門無邊なり誓願して覺らん　如來無邊なり誓願して仕へん

菩提無上なり誓願して證せん。

菩提心の眞言に曰く　唵冒地唧多、母怛波多夜弭

○第六遮難を問ふ　若し七遮の罪を犯すること有らん者は、戒を與授すべからず、應さに敎へて懺悔せしむべし、復た七日二七日、乃至七七日、復た一年に至るまで懇に懺悔を致すべし云云。所謂る七遮とは、父を殺し(しい)、母を殺し、佛身より血を出し、阿羅漢を殺し、和尚を殺し、阿闍梨を殺し、和合僧を破する是れなり、汝等是の如きの七遮を犯せざらんや否や。答ふ犯せず朱(待)　此の次に乞戒師、大衆を率ゐて懺悔す

次に一度立居す
次に大阿出音
香爐を取る

○第七に戒師を請せん　弟子某甲

奉請摩醯首羅天宮　摩訶毘盧遮那如來　爲受佛性戒和尚　唯願慈悲

爲我作受佛性戒和尚　我依和尚故　得受佛性戒　慈愍故三說

○次に羯磨阿闍梨を請せん　弟子某甲

奉請清涼山中　文殊師利菩薩摩訶薩　爲羯磨阿闍梨　唯願慈悲

爲我作羯磨阿闍梨　我依阿闍梨故　得受佛性戒　慈愍故三說

○次に敎授阿闍梨を請せん　弟子某甲

奉請兜率天宮　慈氏菩薩摩訶薩　爲敎授阿闍梨　唯願慈悲

爲我作敎授阿闍梨　我依阿闍梨故　得受佛性戒　慈愍故三說

○次に證戒阿闍梨を請せん　弟子某甲

奉請十方世界中　三世一切諸如來　爲證戒阿闍梨　唯願慈悲

爲我作證戒阿闍梨　我依阿闍梨故　得受佛性戒　慈愍故三說

○次に同學伴侶を請せん　弟子某甲

奉請十方淨刹中　金剛薩埵諸大菩薩　爲同學伴侶　唯願慈悲

爲我作同學伴侶　我依伴侶故　得受佛性戒　慈愍故三說

○第八に羯磨香爐を取る　諸の佛子等に、羯磨受戒を與へんこと、今正しく是れ時なり、

心を至して當さに啓白を聽くべし、茲葛稽首和南　敬て兩部界會、及び十方三世の諸佛、諸大菩薩摩訶薩、一切賢聖、並に護法天等に白しく言さく、願くは咸く之を證明したまへ。夫れ以れば娑婆世界南贍部州、日本國中山城國の葛野郡、左京九條の一坊に一つの伽藍あり名を東寺と號す、則ち先帝の　御願なり、弘法大師、彼の時詔命を奉じて此の一寺を以て眞言處となして、坤の角に灌頂の壇場を立て、永代の教迹を留めたまへり。毎年晩秋九月中旬、晝は佛性三昧耶戒を授け、夜は結緣灌頂の密法を傳ふ、　御願の奥旨今に嚴重なり、本誓弘願猶以て顯然たり、佛子等、例に任せ常に習ふて菩提心を發し、三聚淨戒を受けんと求む、三菩提の因、自他共に五智惠の果を生じ、親疎同じく證せん、何に況んや聖朝の寶祚定めて龍花を期し、天下太平にして時堯舜に同じからん。抑〻三聚淨戒とは、謂はゆる攝律儀戒、攝善法戒、饒益有情戒なり、佛子等受戒の後、未來際を盡すまで更に退轉せざれ、心を至して頂禮せよ三說

○第九に四重禁戒を說かん香爐を置き如意を取る　○第一、正法を捨てゝ、邪行を起す者は、是れ第一の波羅夷なり、犯することを得ざれ、能く持つや否、答ふ能く持つ。　○第二、菩提心を捨離する者は是れ第二の波羅夷なり、犯することを得ざれ、能く持つや否、答ふ能く持つ。　○第三、一切の法に於て怪惑する者は、是れ第三の波羅夷なり、犯することを得ざれ、能く持つや否、答ふ能く持つ。　○第四、一切衆生に於て不饒益の行を作す者は是れ第四の波羅夷なり、犯することを得ざれ、能く持つや否、答ふ能く持つ。

○第十に十重戒の相を說かん。　○一には菩提心を退すべからず成佛を妨ぐるが故に。　○二には三寶を捨離し外道に歸依すべからず、是れ邪法なるが故に。　○三には三寶及び三乘の敎典を毀謗すべからず、佛性に背くが故に。　○四には甚深の大乘經典に通解せざる處に於て、疑惑を生ずべからず、凡夫の境に非るが故に。　○五には、若し衆生有て、已に菩提心を發さん者には、小乘の法を說くべからず、菩提心を退せしめ二乘に趣向し、三寶の種を斷ずるが故に。　○六には未だ菩提心を發さゞる者には、是の如くの法を說くべからず、彼をして二乘の心を發さしめ、本願に違するが故に。　○七には、小乘の人及び邪見の人に對して、輙く深妙の大乘を說くべからず、恐くは彼れ謗を生じて大殃を獲るが故に。　○八には諸の邪見等の法を發起すべからず、善根を斷ぜしむるが故に。　○九には、外道の前に於て、自

ら我れ無上菩提の妙戒を具すと說くべからず、彼をして瞋恨の心を生ぜしめ、二ながら俱に損あるが故に。　○十には、但し一切衆生に於て損害する所あり、及び利益なきことをば皆なすべからず、利他の法及び慈悲心に於て、相ひ違背するが故に。

○今此の授くる所の戒は、始め一切智より生じ、終り薩般若海に趣くまで窮盡あることなし、今戒を授くること已に竟んぬ、將に法寶を紹がんこと、佛の在世と更に異ることなけん、即ち是れ眞の佛子なり、當さに佛位を補ふべし、是れ則ち最上最尊無比無等の戒なり、速疾に罪障を滅し頓に菩提を證するの門なり。

○次に白佛名　南無歸命頂禮　佛性三昧耶戒　生生世世値遇頂戴　聖朝安穩增長寶壽。　南無聖朝安穩增長寶壽　伽藍安穩興隆密教　天下安穩萬民豐樂　大悲護念成御願若し乞誓無くんば、例の願向、朱(待)　○次に乞戒師隨喜乞誓隨喜隨喜生生世世　三摩耶戒堅持莫犯(押)　○次に乞戒師、座を起て禮盤を取り去け、楊枝を打つ常の如し　○次に十弟子禮盤の上にて齒木を行す此の一行異本になし　○次に說戒畢て金剛の弟子各〻尊卑に隨ひ次てに依て而も坐す、清淨恭敬不散亂の心を以て合掌して住す、即ち敎へて香水を嗽ましむ。　○次に阿闍梨、其の線索を加して其の左の臂に繫く、或は塗香を以てし、或は心念の密語を以て弟子を護持せよ、密語に曰く　唵引一摩訶、引韈曰羅二合迦去韈遮、縛曰哩二合矩盧韈曰羅、韈曰羅二合薩引

○次に塗香を加持して、諸弟子の掌中に塗れ、眞言に曰く　唵引韈曰羅、二合獻弟虛即ち告げて曰く、願くは汝等、悉く一切如來、戒定慧解脫解脫知見の香を具せよ。

○次に白花鬘を加持して弟子に授與す、眞言に曰く　唵引韈曰羅、二合補閉瑟二合唵告げて曰く、願くは汝等、一切如來の、三十二大丈夫の相海を得しめん。

○次に香爐を加持して、弟子の雙手に薰せよ、眞言に曰く　唵引韈曰羅、二合杜閉噁告げて曰く、願くは汝等、一切如來の、無盡大悲滋潤の妙色を得しめん。

○次に燈明を加持して、弟子をして視せしむ、眞言に曰く　唵引韈曰羅、二合路計引儞翼告げて曰く、願くは汝等、一切如來、等虛空界の智慧の光明を得しめん。

○次に一切の煩惱を摧破する、諸佛の甚深金剛の眞言を以てし、或は部心の眞言に曰く　唵引爾曩爾迦半音

○烏曇阿說他木を加持せよ、長け十指量、香水を以て洗ひ、塗香を用て薰ぜよ、花を根に纏へ、以て一は一切諸佛に奉獻し、自餘は行者に與へよ、不動の明を以て加持する

こと一百八返、亦た如來微唉の密語を用て之を加持せよ、眞言に曰く　唵引縛曰羅二合賀娑賀娑。　此の密語は能く煩惱隨煩惱を破す、之を結誦すること七返、觀の羽を以て金剛拳に作して、然して後に楊枝を嚼め。即ち齒木を授けて面を東に向ひ敎へて小頭を嚼ましむ、曰く右の牙を以てなり。即ち一切の煩惱業障等を嚼み摧くと想へ、横に定の掌を舒べて枝頭の下を承けて、物を承くるの狀の如くせよ、即ち香水を以て嚼める所を洗ひ了れ、其の枝を把るの法は、慧の水火を以て横に枝の中を握り、風地を屈め水火の根に著け、空掌中に横たへ水火の甲を押し、獨股杵を持する如くせよ、東に向ひ或は北に向ふて蹲踞して之を投げよ、嚼める頭外に向へば不成就なり、また内ならば成就なり、若し遠く却て來らば久しからずして成就す、また東方は上、西は中、南は下、四方多くは是れ彼の部を知るなり、花を投ぐるも多くは是れ彼の部の方なるが故に。　○次に修多羅を結んで、當さに等持の臂に繫くべし五佛を以て五色を加持する等　○次に金剛水を授與す。　唵引縛曰羅二合那誐吒　作法了て退出すること入る時の如し云云

嘉禎元歲乙未十月四日三寶院根本の御本を以て書寫點交し了る

東寺沙門　心海

報恩院相承の的本を以て法壽庵生空をして之を模せしめ、予朱墨點し博士等之に贊し校訂し了る

元祿十四辛巳六月

報恩院末資僧正寛順

胎藏界は傳授を要せず、所以は何ん、胎藏作法は全然金界作法の如し、但だ彼此の尊號を異とするのみ、謂く金界は五佛、胎藏は九尊なり、是の故に別授を要せざるなり（洞口）此の本には憲深、寛順、有雅等諸師の奥書あり。

傳法灌頂金剛界式に由るが故に頭註を略す。

○國譯結緣灌頂三摩耶戒作法 胎藏界

○結緣灌頂初夜作法 金剛界 有雅撰

○道場周備の後、職衆内陣の座に著す。　○次に壇行事、案内を大阿闍梨に申す。　○次に大阿座を起て禮盤の下（モト）に進み寄り、香爐を取て三禮し了て禮盤に登る。　○次に大阿、前方便了て金二打表白神分五悔等　○次に前供養、讃三段。　○次に普供三力の後金一打　○次に職衆、佛眼の呪を念ず微音

○次に大阿行法序あり次第別にあり　○次に振鈴　○次に職衆、大日の眞言を念ず。

○次に大阿、散念誦佛眼の呪畢て、大日眞言の時、禮盤を下り平座に著く居笪之を移し置く香爐笪は元より之を置く　○次に壇行事、承仕を召して、大壇の上の佛具等を後戸（ウシロ）の机に移し置くべし。　○次に五瓶立花を拔いて後戸の机に移し置く。　並に五股杵を、小壇の脇机に移し置く。　○次に薄穗の箒を、大壇の東西の端に之を置く。　○次に投花の折櫃を、左の脇机の灑水塗香の跡に置く。　○次に尊號の座二帖之を敷く。　○次に記錄の座一帖之を敷く燈臺、硯、紙等之を設く　○次に承事、事整ふるの由を壇行事に申す、行事所作の人に向ふて氣色

せしむ。　○次に含香灑水の役人、座を起て外陣の座に著く此の座元より之を設く　○次に小阿闍梨、座を起て倚子に著す。　○次に尊號の二人、東西の座に著す。　○次に記錄の二人著座。　○次に敎授の一臘座を起て、内陣の正面より、少し明り障子を開いて一生不犯の比丘を請す先づ含香の役者塗香を授け、次に灑水の役者香水を受者の頂に灑ぐ。　○次に敎授印明を授く。

○次に覆面此の間に受者の實名を問ふ　○次に敎授受者の印の端を取て、香象を越えしめ内陣に引入す識は此の時記錄の前に到り受者の名字を告示して後、大壇に到るなり。　○次に大壇の前に到り立つ、敎授投花を取て、受者の印の端に之を挿ましむ。　○次に下臘の記錄稱して曰く伊勢。　○次に受者投花。　○次に尊號、得佛の名號を稱す、若し得佛大日の時は、敎授讃を催す。

○次に記錄之を記す。　○次に又敎授花を取て、受者の印に挿む、諸神、帝皇、並に自分を打たしむる事先の如し。　○次に敎授覆面を取り去る。　○次に受者禮拜三度。　○次に小壇に到て、受者をして蓮臺に登らしむ。　○次に受者著座。　○次に小阿、印明を授くるの作法序あり。　○次に敎授受者を引いて巡繞す。或は此の時西方の祖師之を禮し、先に記錄の前に到て受者の名字を示ず、記錄之を記す。　○次に敎授受者を引いて、龍猛●龍智より巡繞して、祖師悉く之を禮せしむ。　○次に正面引入の所より之を出さしむ。次次四輩の受者、

引入の儀之に準ずべし。　○次に別人の敎授、座を起て各各に受者を引入せしめ、人別に覆面して印明を授くる等の儀上の如し（投花の前後記錄の許に到る、兩說之れあり、共に之を用ふ。）　○次に受者悉く盡き畢るの後、正面の戸を閉づ。　○次に小阿以下の役者、各〻本座に還著す。

○次に大壇以下、承仕元の如く之を料理す（此の時佛布施を脇机に置く）　○次に大阿座を起て禮盤に登る（此の時居筥等、又元の如く之を返し置く）　○次に一字の金一打（諸衆呪を念ず）　○次に後供養等常の如し。　○次に後鈴。　○次に讃三段。　○次に普供、三力、祈願等。　○次に廻向（金一打香爐を取る）

○次に下座回向方便を出す（常の如し）　○次に回向方便了て金一打　○次に大阿下禮盤、香爐を取り三禮了て平座に著く。　○次に職衆退散。　○次に大阿出堂、供奉の人等上堂の如し。

以上

下に出す所は所望除災等の四種五種の法に隨て修すべき肝要の章法を擧げて示すなり。

（一）天變　此は星の行度を失し惡星出で並びに日月蝕等の怪異惣じて世間の變化之れある時に修する法也。

國譯諸尊要鈔

○所望　五大虛空藏　多羅尊　愛染王　千手　大威德　金剛藥叉　金剛童子　北斗　聖天

○除災　藥師　尊勝　聖觀音　千手　準提　北斗　炎魔天

○滅罪　阿彌陀　阿閦　尊勝　光明眞言　隨求　虛空藏　馬頭　法花　寶樓閣　滅惡趣

○延命　藥師　延命　準提　北斗　炎魔天　孔雀經　法花經　壽命經

○產生　藥師　金輪　隨求　一字文殊　千手　多羅尊　烏芻沙摩　金剛童子　訶利帝　一髻文殊（異本に之れなし）

○惡夢　大威德　八字文殊　訶利帝

○呪詛　轉法輪　六字經（異本には六字文殊になす）　大威德

○怨家　大威德　金翅鳥王

○（一）天變　孔雀經　仁王經　大佛頂　愛染王　一字金輪　尊星王　熾盛光（異本に之れなし）

八字文殊　五大虚空藏　北斗

以上(一)師主の口傳等に依りて之を注す、秘説なり以上又の御本には護摩次第の奥にあり。

(一)師主　實運を指す。

此鈔は勝倶胝院實運僧都諸尊法を、寛明子授く、筆記寛命僧都の口説を諸尊要鈔と明す、其の之を、而して不幸短命の故に實運を稱ずる廟の本尊を通ずる三宝院權僧正實運の覺鑁の左大臣兄弟即堀川の息勝覺の初卿の子なり正諸傳受の嫡流の口決を記さる

運僧都の諸尊法を、寛命に授説を筆要鈔記す、明子寛明、其の口説を諸尊要鈔と明す、之を、而して不幸短命の故に實運を稱ずる廟の本尊を通ずる三宝院權僧正實運の覺鑁の左大臣兄弟即堀川の息勝覺の初卿の子なり正諸傳受の嫡流の口決を記さる

國譯諸尊要鈔目次

卷第一　○釋迦　○阿彌陀　○阿閦　○藥師　○延命　○多羅菩薩　○普賢延命

卷第二　○孔雀經法

卷第三　○仁王經

卷第四　○心經法　○理趣經法　○寶樓閣法　○六字經法　○法花法

卷第五　○愛染王　○大勝金剛　○五大虚空藏　○泥塔供養　○大佛頂　○光明眞言法　○無垢淨光

卷第六　○一髻文殊　○五字文殊　○六字文殊　○八字文殊　○一字金輪　○佛眼　○尊勝

卷第七　○六觀音

卷第八　○不空羂索　○葉衣　○白衣　○大白衣　○多羅菩薩　○毘倶胝　○滅惡趣　○圓滿金剛

卷第九　○五大尊

卷第十　○北斗　○妙見　○五十天供　○神供　○施餓鬼法

卷第十一　○琰魔天　○帝釋　○地天　○毘沙門　○最勝太子　○訶利帝　○呪賊經　○寶藏天女　○大黑天　○襄倶利童子　○摩利支　○水天

卷第十三　○太元　○聖天　○十二天　○焰摩天

卷第十四　○護摩雜要

卷第十五　○如法尊勝　○轉法輪　○地鎭　○鎭壇　○後七日　○晦御念誦　○加持香水　○寶生尊　○吉祥天　○駄都　○寶珠　○避蛇（別にあり）

○奥砂子（別にあり）

以上

(一)大日　此の釋迦は金剛界に在りては不空成就佛と云ふ而るに今胎の大日を以て部主となす事は八相の化儀の道理、胎藏の第三重の釋迦の義に應ずる所由なり

(二)阿彌陀　此の法は心覺の加へ玉ふ法なりと。

(三)摩　三形の蓮と獨股とは之れ定慧不二理智不二なり。

(四)觀音　正觀音

國譯諸尊要鈔

國譯諸尊要鈔卷一

○○釋迦　○種子　ㄅ　○三摩　鉢（諸師皆之を用ふ）　○部主　(一)大日胎　○諸尊　三十七尊　○根本印（定惠各〻五輪を舒べ、空火相捻す。左心の前に仰て右を覆せ右を上にして相著くること勿れ。）

曩莫三曼多沒駄南、婆、薩縛吃哩捨、涅素娜曩薩縛達麽、縛始多鉢羅鉢多、誐誐曩、三摩三摩、娑縛賀

○如來慈護眞言　唵沒駄昧底里、縛曰羅囉乞叉憾、莎訶

師主曰く、犯土の處には、必ず之を誦すべし、又は文殊慈護と名くと文

○勸請　一代教主釋迦尊、普賢文殊諸薩埵　○禮佛　南無釋迦牟尼薩怛他蘖多

○發願　寂靜金剛　○正念誦　大呪。　或は小呪。　曩莫三曼多沒駄南、婆、莎訶

○○(二)阿彌陀　○種子　𑖮　○(三)三摩、開敷蓮花、獨股を以て其莖と爲す。

○部主　大日胎或は(四)觀音。　○諸尊　三十七尊。　○根本印言　外縛、中指蓮葉の如し　唵阿密栗多、帝勢迦羅吽

(一)或は云云或本の注なり意は元本にはなしと見たり。

(二)觀自在王の根本呪を指す、彼觀自在王の名言にあらず又御加持の呪にあらず。

(三)眞言 ゟロケイジンバラアランジャ衆なり。

(四)象となる阿閦藥師同體の習なり。

(五)金剛杵 今は五股なり。

(六)諸師云云 此の道場觀は上古の阿閦と藥師と同體の習なり、通りなり、座は象、種は蓮、三は金剛杵此の義なり。

(七)師說 明海なり、此は阿閦藥師別體の習なり、祚壹寺の藥師消災請來の軌樣なり、醍醐秘事とは之を用ゆ、法界定印の藥壺と觀ず。

(八)寶山の印 內

(一)或は前の印に大呪を用ふ。又は定印。(以上は或本の注なり。)又佛母、或は佛眼の印、眞言の大小は常の如し。

○勸請 極樂教主彌陀尊、蓮花部中諸聖衆 ○發願 淸淨金剛 ○正念誦

(二)觀自在王の呪 ○禮佛 南無阿利野、彌陀婆野薩怛他誐多 ○伴僧大呪 ○御加持。金剛界羯磨會無量壽の(三)眞言之を用ふ。

○阿閦滅罪 ○種子 ㄅ ○三摩 五股 ○部主 大日金 ○根本印 金剛外縛。忍願直く立て針の如し。眞言 唵惡屈鶩二合毘野二合吽 ○正念誦 大呪異本

○藥師除病。產生。延命。 「壇の上に哦字あり變じて(四)象と成る、象の上に紇哩字あり蓮花臺と成る、臺の上に阿字有り月輪と成る、月輪の上に吽字有り(五)金剛杵と成る、金剛杵變じて藥師如來と成る、光明具足相好圓滿せり、日光月光十二神將、護法の聖衆、前後に圍繞せり。」(六)諸師之れに同じ。 金剛杵とは或は三股又又は五股。或は獨股。(七)師說に曰く。種子ㄅ。三摩壺。十二上願の壺と名づく、是れ秘事なり。異本に之れなし。 大谷の傳。種鞞。三壺。(朱)又說。吽三股。又の說は阿。三。五股。

○(八)寶山の印 唵戶盧戶盧(ラニコロコロ)戰拏利摩登(センダリマトギ)祇、莎呵(ソハカ)。羯磨會阿閦の印言常の如し。又の御本には

縛して二大並べたてたる印なり、寶山は須彌山の形なり。

(一)師主曰く、此法界定印は釋迦寶鉢の印なり、此印とち藥師の藥壺の形、壺中に十二大願の藥を入るゝなり。

之れなし」此一行又の御本には、理趣房傳の次行に有り。理趣房の傳に曰く、種は吽、三は壺、印は寶山の印なり。

諸師の說に曰く、種は吽、三は壺、印は法界定印なり。(一)師主曰く、此の印は秘なり。 又の說に曰く、種は鞞、三は獨股、印は鉢、言は唵戶盧戶盧(ラニコロコロ)等なり。」或傳に曰く、種は吽、三は五股。又の說に曰く、種は阿、三は五股。

○部主 大日 ○諸尊八大菩薩觀音左、勢至右。彌勒、文殊。藥王、藥上。無盡意。法檀花。 又の說。三十七尊。師主曰く、寶山の印に唵戶盧等。 ○法界定印此の印の上に藥壺を觀ず。此藥を以て施主及び一切衆生の惡業煩惱の病を治す眞言は大呪或は小呪秘々。

○大呪常の如し。心呪に曰く 唵鞞殺逝鞞殺逝異本には此所に鞞逝社の三字有り。三沒羯帝、娑婆訶 ○鉢の印 大呪。又は戶盧戶盧を用ふ。師說に曰く、法界定印。心呪又は大呪を用ふ秘印なり。異本に在り。此事端書と同觀念なり。云云 ○內五股の印大呪秘々 或傳に曰く、佛頂の印之を用ふ。云云 ○根本印 寶山の印異本に之れ有り。 平救の傳に曰く、寶山の印に戶盧戶盧を用ふ。此印は消災儀軌の說なり。 ○日光菩薩印言 薩印言金剛縛して、二大指直く立て、二食指中節を屈して、而も端を相拄ふ。餘の六指散し舒べ、外に向て三たび旋轉せよ。唵褒儞庾多(ロボウニユタ) ○月光菩薩印言 右の手拳に作り腰に置け左の手大指小指相捻して花を執る如くして臂を立て外に向ふ「想へ掌中に伏兎あり」 唵贊捺羅鉢羅婆野(ラハラバヤ)、娑縛賀(ソワカ) ○十二藥叉印 十二皆之を用ふ。右の手拳に作り人指を屈して鉤の如くす、眞言常の如し。 ○勸請印眞言 佛部の印を用ふ。 二輪之に向て(異には)之を外に作る。 之を招け。唵爾曩爾迦翳醯曳咖、婆誐縛妬引瑟捉舍、娑婆二合賀 ○正念

(一)五色の線　今は用ひず。
(二)水陸云云　此れ除病延命の故に毎日放つ。
(三)密號　醍醐方には發願に密號を用ふることなし、勸修寺方には此の密號を用ふ。
(四)多羅菩薩　此の菩薩下の第八卷にも出づ、此には讀み渡すのみなり

誦小呪或は心呪　○伴僧　大呪　○御加持　大呪　○梵號　南無阿梨野、佩殺紫野(ナモアリヤ、バイセイジヤグロ)嚩吠、女里也、薩他多蘖多(バイ、ジヨリヤ、サタタギヤタ)　○密號　不動金剛　○勸請句　十二上願薄伽梵、日光月光諸菩薩。　○發願句(本章界會。十二上願。醫王善逝。醫王薄伽。日光。月光。十二神將。兩部界會。禮佛は梵號なり。師主曰く、七佛の梵號を唱ふべし。(異本))　壇場を建立し本尊を安置し新に藥師經一卷を寫して壇中に置け。(本願。或は隨願七佛等)五色の幡を造りて五方に懸けよ高さ四十九尺。七層の車輪燈を造りて四十九燈を燃せ。香●花●飲食●力に隨ひて所辨せよ。(一)五色の線を以て四十九結して病人の項に繫け。所修の間毎日四十九頭を放生せよ。(二)水陸の有情。七口の僧を請せよ。(一人は阿闍梨。二人は讀經。四人は眞言を念ず。)

○延命　○種子　○三摩　甲冑　○根本印　二手拳に作りて仰けて、二頭指相ひ鉤して心に當つ。　○諸尊　三十七尊　○禮佛の句　曩謨縛曰羅喩曬、娑婆呵　○眞言　唵縛曰羅喩曬、娑婆呵　○部主　大日(胎藏)

○禮佛　曩謨阿利耶多羅。　○發願　悲生金剛　○正念誦(大呪)　○御加持　○伴僧(同上)　○

字輪觀(阿等)

○普賢延命法(右方。薩王愛喜。寶光幢咲。鉤索。左方。法利因語。業護牙拳。鎖鈴。)　四頭の像(異には)像を(一)二十臂。(異說)　○種子　○三甲冑　○又の說　三甲冑。(二)大御室傳に曰く。　○惡　○三摩五股　○部主　大日　○諸尊。三十七尊　印言(常の如し。)　○勸請の句　普賢延命大悲尊、金剛部中諸聖衆。　○梵號　曩謨縛曰羅謨迦、三摩耶摩怛縛。　○密號　眞實金剛　○御加持眞言(本呪)　○字輪觀　阿等　師說に曰く、大樂不空身は即ち普賢延命と一佛なり、仍て迦字を種子とすべきなり。(三)金剛智三藏曰く、金剛壽命薩埵智身とは、五智聚集して而も大樂金剛薩埵となる。四波羅蜜十六大菩薩を以て而も二十臂となす。(四)五分法身を以て而も寶冠と爲す。內の四供を而も(五)禪悅と爲す。外の四供を而も法喜と爲す。四攝の方便三世の諸佛を而も毛孔となす。(六)額以上は過去の千佛、心以上は現在の千佛、心以下は未來の千佛なり。是を以て三世常住金剛壽命薩埵智身と號す。文　(七)大壇の上に白蓋を張り、蓋の四角に幡各〻二流を懸けよ。(合して八流。黃色。)　護摩壇の樣は、黃土を以て塗り方形に作れ、其の上に甲冑の形を畫け。口傳に云く、四十九

(一)二十臂　道場觀の所用にして金剛智の口傳なり。
(二)大御室　性信親王なり。
(三)金剛智三藏　貞觀寺の師說なり
(四)五分法身　五智の如來なり章勝五二卷の軌に五輪即是れ五智便ち五分法身を成すと。
(五)禪悅　禪悅は理、次の法喜は智、理智の二門なり。
(六)額以上云云　金剛智口決通りなり。
(七)大壇云云　是は大法修行の軌則なり。

燈の事。輪燈一基に七層あり、層毎に各〻七燈を燃す、七七四十九燈なり。高さ六尺許りなり。文口決に云く。乳木は長さ十指穀木、桑木、骨叟草、烏瓜、瓜根の莖なり、又はシバの子之を用ふ。文口傳に曰く。胎藏の大樂不空は卽ち是れ延命菩薩なり、象或は三頭或は四頭なり、但し四頭は說所を見ず。師傳なり。文其(一)相承は、惠果。大師。眞雅。源仁。益信。亭子院法帝。寬空。寬朝。濟信なり。此法は月の一日八日十五日に之を修すべし。金剛菩薩の軌に曰く。(二)三七僧を請じて各〻四十九卷を讀ましむべし」金剛智の譯經なり。此眞言を念誦して十萬返を滿つれば卽ち壽命增長を獲」○尊形(三)經に曰く、先づ須く普賢菩薩を彩畫すべし。(四)滿月童子の形の如し。五佛の頭冠。左の手に金剛杵を持し、左の手に金剛鈴契を持す、鬘繰緩く帶びたり、千葉の寶花に坐す、花の下に白象王あり、象に三頭あり、鼻を以て獨股杵を卷く各〻六牙を具す、其の象の四足に一の大金剛輪を踏む、輪の下に五千の群象あり、各〻其輪を負ふ。菩薩の身に於て百の寶光を放つ、光の外に白月輪を畫き衆彩莊嚴せり。文(五)口決に曰く、此尊の遍身黃金色にして五智の寶冠を著す、二十臂を具足して、而も十六尊並に四攝の三摩耶標幟を執持せり。○讃　唵縛曰羅、二合羅細(ヤイ)堅因勇合の義。摩訶燥企(ソウヒ)耶大安樂の義。縛曰羅二合喻帥(ユヤイ)摩

(一)相承此の法の相傳生起血脈の事。亭子院とは寬平法皇の事。
(二)三七僧阿闍梨一人、伴僧二十人此の法は大法の故なり。
(三)經菩賢延命經。
(四)滿月童子圓滿端正の義。
(五)口決此方に用ふる尊形なり。

訶(ユヤイ)喻帥壽命の義。縛曰羅毘喻摩訶毘耶不老不死の義。唵砧(トン)欲、襃謨素都帝、(異)縛曰羅二合惹儞多、摩訶惹儞底(チ)延命

御本に曰く建保六年二月十二日遍知院に於て御本を以て書き了る。　金剛佛子憲一生年二十又七

以上卷一

國譯諸尊要鈔卷二

○孔雀經法

○御加持常の如し。初夜後夜上番十人引率するなり。但し後夜には發願之れなし。

○(二)下番發願の句　至心發願　轉讀經王　功德威力　倍增法樂　護持某甲聖王國主國母御產平安　色力增長　玉體安穩　增長寶壽　恒受快樂　無邊御願　決定圓滿　決定成就　院內安穩　諸人快樂　及以法界　平等利益

○次に五大願　衆生無邊等常の如し　○次に金打(下番は經を始む)　○(三)下番廻向の句　所修功德　廻向護持國王國母聖王御產平安　玉體安穩　增長寶壽色力增長　恒受快樂　無邊御願　決定圓滿　廻向院內　廻向諸人　廻向天下　廻向大菩提　○勸請の句大孔雀明王慈悲尊七佛慈氏賢聖衆

此法大法なれば番僧二十人なり、天變怪異御產虐病等の御祈之を修す本法には本尊圖立に十二天及び護摩壇の圖之れあり、此に略す。
(一)下番云云是は下番の上鷹唱ふるなり。
(二)下番云云是は上番の一鷹唱ふ

(一)三寶院　三寶院大僧正定海なり

(二)孔雀經法　是は孔雀の卷とて秘鈔にては傳授なし、秘事は故なり、秘鈔中には一卷別にあれども除く。

(三)金輪王　此の明は釋迦と同體と習ふ故に釋迦金輪を用ふ。

(四)迅速の印　是は手印にはあらず三摩耶形の事なり蓮花の上の瓶なり

(五)掌心　兩手の掌を合し左右を上下にして順逆に轉ず。

(六)舍利　舍の種子といふこと也。

(七)目蓮　目の種子。

(八)須菩提　五百生の間龍主に居る故に新雨には必ず之を供す。云云

○御加持の呪　摩喩羅枳覽底、娑縛賀。　(一)三寶院の傳なり。大或は經の奥の陀羅尼。仁和寺の說。

○(二)孔雀經法

○種子　ॐ　○三摩耶　尾の上に半月形を安く。　○部主　(三)金輪小野　或は無能勝醍醐の傳。　○普通　引○七佛の種阿○三摩耶五股　○印　金剛合掌　○眞言

歸命、薩縛沒駄冒地薩怛縛紇里捺野儞也吠奢儞曩莫薩縛尾泥、娑縛賀　私に曰く。

此の眞言を一切佛心と名く。師曰く、多寶の眞言なり。」

○慈氏の種は引。三摩耶は蓮花の上に(四)迅速の印。　印。金剛合掌して(五)掌心を旋轉す心の前に相著け。眞言　歸命、一引摩訶瑜引誐瑜擬宜以の反し寧瑜誐洗縛利欠惹利計、娑縛賀　○阿の種はॐ。三は梵篋、印は梵篋なり。眞言　歸命、一係賭鉢羅二合底也二微戛多羯磨涅入闍多三吽　○梵號　阿曩多　○密號　集法金剛　○(六)舍の種は若金剛　○(七)目の種はॐ。三は梵篋。印は梵篋。眞言は聲聞の呪なり。　○梵號　舍利弗怛羅　○密號　般梵號　夢拏誐羅也野拏　○密號　妙用金剛　○(八)須菩提の種はॐ。三は梵篋。印

(一)口傳　此の印本說は內縛して孔雀の形とす、口傳とは外縛にして檀惠禪智立て合はす者羽印也、六指外へ拂ふは一切災難を拂ふ、明三變に三度なり、內へ召くは一切の吉祥の事を召集するなり口傳といひ秘口と云ふは此の義也。

(二)師主の秘說　明海なり或傳とは醍醐の傳也。

(三)東に向ひ　增益の法なるが故に

(四)一二三七日　此は一七日二七日乃至三七日なり。

(五)法務傳　寬信法務。

(六)師主　明海。

は梵篋。言は聲聞の呪なり。　○梵號　須菩提　○密號　無相金剛　○形像　左に袈裟の角を執り、右は與願、赤蓮花に坐す、比丘形なり。四大聲聞皆同形なり。但し目蓮は右の手拳に作り舒べて赤蓮花に坐す。○印觀念あり(一)口傳なり。外縛して檀惠禪智を立て合せ、餘の六指翥べし。厄難を拂ふ印なり。羽打と名く。(二)師主の秘說。或傳に曰く。外縛は善無畏傳なり。云云　○言常の如し。口傳に曰く。眞言の末に彼呪を加ふべし。　一、火天。常の如し。二に部主。三に本尊。中央本尊七佛をば、右に廻て之を供す勸請の印言は大鉤召なり。　四に諸尊三十七尊。師傳吉說。　或說は七佛。五に世天。常の如し。　○御加持の呪は、經の怛儞也他野縛底駄顎等なり。　○又本尊呪。禮佛の時は、七佛の名號を稱す可し。云云　○五種香中央に沈香を燒く。東方、白膠香。南方、紫鑛。南方には芥子に鹽を和す。師傳に曰く。紫鑛の代に湯黃を用ふ。西方、蘇を以て安息香に和す　北方薰陸香。又曰く。若し紫鑛なき時には。鹽を香に交へて之を燒く。云云　持者は(三)東に向ひ、三五七人聲を斷せず。(四)一二三七日一切の災禍悉く皆殄滅す。不至の心を除く。云云

(五)法務傳に云く。半月を安くに二義あり。一には半滿月等莊嚴と爲すの意なり。二には法の七日成就の義を顯すなり。(六)師主の口傳。　又同傳に曰く。若し略する時は、中方の香は只前の香にひねりつきて燒く樣有り」云云　但し二種の香を、火舍一口にひねりつきてするなり。諸天供物の上には鑁字を觀じ置く。護摩の時は花座を用ふ。聲聞等又同

し。

大壇の中央には經箱之を置く。方瓶に孔雀の尾三筋之を(一)並べ立つ。(二)落駄の血を以て紫鑛を作る。但し師主の說は未だ其說委細ならず。之を習へ。云云

○字輪觀常の如し　阿等　○大谷覺俊阿闍梨の傳に曰く、種子瑜。三摩。尾。部主金輪。勃嚕唵　○印　蓮花三摩耶。又五種の印有り。之を尋ぬべし師主の說なり。不審なりと仰せらる。　○梵號　阿利耶摩訶瑜(異本には㕣に作る。)　○密號　佛母金剛　或說は護世金剛

以上勸修寺法務の傳也。師主之を受く。

○種子鑁。三半月。印常の如し。異には常を先に作る。　部主無能勝　○七佛種阿。三、五股　印言別に在り

○慈　種、瑜。　三、迅疾印。　印言別に在り　○緣　種、縛。　三、錫杖　○聲　種、係　三、梵篋　印言別に在り　南方　燒の替に　湯黃を用ふ。　東方　燒の替りに　百和香を用ふ。　紫黃なき時は、芥子に鹽を春き和合して之を用ふ。　禮佛の時は先づ須菩提の句。

以上(三)千心に之れ有り。

○緣の印言　內縛、火輪を立てゝ峰を圓かに合はす。　歸命、縛娑縛賀　○聲の印言

(一)並べ立つ　並立つにあらず、三本共に立つるといふことなり。
(二)落駄の血　下品の馬にして荷物を負ふ馬なり。
(三)千心　仁海のこと。

梵篋の印　歸命、係賭鉢羅二合底也合野尾蘖多羯磨涅惹多吽

以上裏書なり。

今此の法には、阿波羅爾多明王の印明を以て、別結界と爲す。口傳

○印言　內縛、二中指を立てゝ頭を拄ふ。唵護嚕護嚕戰拏引里摩蹬儗娑縛賀　醍醐の流は、大壇の左に護摩壇。次に十二天。次に聖天壇なり。但し處の便宜に依るべし。勸流は大壇の右方に、次第に之を立つ。文

以上卷二

國譯諸尊要鈔卷三

○シャナウアランジヤソタラン　息災に之を行ず。

○天蓋は青色、若くは空色。

本鈔に天蓋を闕して幡の下に左の注あり、曰く

東　丑の方は肉色の幡　寅の方は白色の幡　辰の方は紅色の幡　巳の方は黑色の幡

西　未の方は烟色の幡　申の方は赤色の幡　戌の方は水又は青。又は綠色の幡　亥の方は黃色の幡

今懸くる所の幡は(一)前の大僧正の說なり。仍て醍醐流は近來は此の如く爲す。

此の梵語は仁王經の梵名。

(一)前の大僧正　定海。

○大壇の樣日中に佛供。大八杯。小八杯合して十六杯なり。菓等各〻二杯合して十六杯なり。後夜には弱八杯なり。　○護摩壇佛供等大壇に同じ。　○十二天壇佛供等常の如し。聖天壇は日中に之を修す。（以上諸壇の圖の許にあり）佛供十三杯。花瓶は之を立てず十二天壇は初夜一時なり。　○聖天壇

○本尊　五大尊　不動を本と爲す。　不動尊索を持せず、十二輻の輪を持す、此れ敎令輪の故なり。四大明王も亦敎令輪身なり。次の如く之を觀じ廻すべし。

或說は般若菩薩を以て本尊と爲す」此の傳之を用ふ可らず。彼の菩薩は是れ正法輪なり。文正法輪をば此法の本尊と爲すべからざるか。

○(一)五大尊種子三形　中央不動　ह　瑟瑟の座　十二輻の輪　東方降三　त्रि　瑟瑟の座　五股杵　南方軍荼　ह्रि　瑟瑟の座　寶珠　西方大威　त्रि　瑟瑟の座　劍或は鈎　北方金剛　ह्रि　瑟瑟の座　牙

○般若菩薩眞言　○梵篋の印　印言俱に胎藏の如し。以上裏書　○大理趣房傳に曰く。

ह्रि　त्रि　○或傳に曰く。不動を本尊と爲す。

(二)三味耶形は前の如し　○種子憾○三劍○印獨股○言○部主般若菩薩　○本尊段。本尊中央。餘の四大尊は四方に之を安す。○諸尊三十七尊。

त्रि　ह्रि

○上番廻向醍醐　所修功德　廻向三寶境界　廻向天衆地類　所修功德　廻向國母仙院玉體安穩　增長寶壽　恒受快樂　無邊御願　決定圓滿　廻向諸官　廻向院內安穩　諸人快樂　廻向天下　廻施法界　廻向無上大菩提

○(一)下番發願醍醐　神供は下番の中の上薦之を勤仕す。

至心發願　轉讀般若　功德威力　天衆地類　倍增威光　國母安穩　增長寶壽　院內安穩　諸人快樂　乃至法界　平等利益。　大阿闍梨は、特別に平袈裟之を著す。

○護摩壇作法　大阿闍梨正念誦の程、護摩師伴僧の座を起て壇場に進む。先づ普禮着座。次に塗香。次に淨三業。次に三部被甲。次に二器の香水。或說は覽字觀。次に大金剛輪印言。次に羯磨加持。次に部主の印言。次に本尊の印言。次に入護摩。次に退下して本座に著く。開白の時は表白等常の如し、但し三力偈の後ち金一度之を打つ。次に(二)讀經。次次の時は大阿闍梨神分の時に望んで先づ金一打。爾の時に上番伴僧の中に廻向するなり。(三)下座の廻向畢て後に大阿闍梨金二丁神分等常の如し。時畢て後に金二度之を打つ。下番の上薦發願(四)四弘。傍注に云ふ五大願乎。其後大阿闍梨金一打して退出す。每時大阿闍梨念誦畢りて護摩の後、後供以前に下座に於て讀經。經畢りて禮盤に著す。後

(一)下番發願　阿闍梨行法了りて下禮盤の時、金二丁、其時下番の上薦發願を出す、五大願了りて金一丁下番讀經す、阿闍梨並に上番退出す。

(二)讀經　大阿にあらず番僧なり。

(三)下座　伴僧。

(四)四弘　五大願なり。

(一)正念誦　振鈴より進み趣くなり
(二)曼荼羅　仁王曼荼羅なり。
(三)圖　圖の下に三説の圖あり、私に之を略す。
(四)醍醐　以下の文は圖後に記せる文なり。
(五)四流　此の次に第二説の圖を示せるも私に之を略す。
(六)上の醍醐　以下の文は圖後に記せり。
(七)云云　以下に第三説の圖を出せるも私に之を略す
(八)師主云云　圖後に此の文を示せり。

供等常の如し。大阿闍梨(一)正念誦の程に、護摩壇の阿闍梨進み昇る。其次に餘の小壇同く進趣して之を行ず。大壇に(二)曼荼羅之を懸るなり。護摩壇、十二天、聖壇之れ有り。大阿闍梨正念誦並に散念誦畢りて、禮盤より座を下り讀經一部畢りて、禮盤に返り著き、大金剛輪眞言七返、次に一字の金之を打つ。次に字輪觀。次に理供養。次に事供養、等の作法常の如く之を行すべきのみ。

大僧正定海　仁王經法勤修の時、八色の幡八流懸け様の(三)圖

(四)醍醐流には近來此圖を用ふ。師主此定めに之を懸けらる。

八色の幡二十四流懸け様の圖。義範僧都の傳。白色の幡二流。正東紅色の幡四流。東南黑色の幡二流南烟色の幡四流。西南赤色の幡二流。正南水色の幡四流。西北黃色の幡二流。正北肉色の幡(五)四流。東北

(六)上の醍醐圓光院の幡の懸け様も亦此の如し。遍知院僧都の懸けしめ給ふ所なり。但し又此の如く懸く可きか。本方に違せず。理性房三密房、本方に違す可らざる由俱に示めさる。(七)云云

(八)師主の御本を以て書し畢て、私に經文を見るに相違せず。

(一)外五股　仁王經一部始終此の一印の中にあり、此れ五の印なり五鈷即ち五智なり。智は般若なり。
(二)根本の印　仁王陀羅尼の印なり

○八色の幡。四經說の幡竿は端し直く及び長し、各〻八方に於て處を去ること遠からず、法の如く安置す。東に白幡を著く。東南紅幡。正南黑幡。西南烟色幡。西方赤幡。西北青幡。正北黃幡。東北赤白幡。

是の如く八色方に隨ひて竿の頭の上に置き、鴆鵲鵄の尾を結び繼け、極めて端正ならしむ。

勸修寺傳に曰く。天蓋並に八色の幡等は之を用ひず。自餘の作法は上に同じ。

○正念誦の眞言は經の呪之を用ふ。　○本尊加持慈救呪　○加持物一字の明　○(一)外五股慈救呪　○(二)根本印梵網の印　○御加持の眞言に用ふ。」云云

師主の物語に曰く。法務の說に曰く。前の大僧正は仁王經の奧の陀羅尼を以て、御

○勸請の句法務傳　本尊界會「此四字無聲に之を唱ふ般若持主」　五大明王諸忿怒。　御加持發願の時も、本尊の句は聲無くして之を唱ふ。云云　謂く本尊界會般若菩薩五大明王等なり、護摩壇の作法も上に同じ。此事、端有り依て重重無用乎。

(一)本尊五大尊此の法は初出ると同じくして少しも替らず、故に之を除く、但し永久二年已下は重出ならず。

○仁王經

(一)本尊五大尊等。

○伴僧二十口。但し永久二年院の御修法は、十二口なり。上下番あり。不斷讀經は孔雀經法の如し。○御加持には不動の呪を用ふ。○部主段降三世○本尊段不動○諸尊段四大明王

○勸請の時。大鉤召を用ふるは小野の說にして秘秘」種子三昧耶形前の如し。以上裏書。○正念誦眞言此れは醍醐の傳にして至極甚深なり。是れ修習般若波羅蜜多菩薩の眞言なり。

曩謨婆哦縛帝波羅壤波羅蜜多曳唵紇里地室利輸嚕多尾惹曳娑縛賀○字輪觀阿縛羅訶佉○五大尊の印言は各別に之を結ぶ。次に經臺の印。經の呪次に梵篋の印言常の如し。若し略する時は修習般若菩薩の眞言を用ふ。○火天○部主大日○本尊不動○諸尊四天○世天常の如し以上醍醐の傳甚深甚深秘中の秘なり。經の呪。阿羅嬭、迦羅嬭、阿羅拏、迦羅嬭、摩訶波羅壤、波羅密帝、娑縛賀。以上裏書仁和寺の傳に曰く。以下。或本には支度卷數の奥にあり。中方般若。種吽。三、十二輻の輪。印、經臺の印。眞言唵地室里輸嚕多尾惹曳娑縛賀東、惡。三、五股。南、怛洛。三、金剛寶。西、滿。三、劍。北、憾。三、牙。護摩の時本尊段は般若波羅蜜多菩薩、諸尊段は四大力、等云云般若菩薩は是れ不動なり。或說は五大菩薩を本尊と爲す。云云

仁和寺一說

注進　仁王經御修法　七箇日支度の事

合

種子　一大壇所　蘇　蜜　名香沈

五香　沈　白檀　薫陸　安息　甘松

五藥　荳蔻　桂心　遠志　白朮　甘草

五穀　稻穀　胡麻　大麥　小麥　菉豆

壇。一面脇机。二前燈臺。四本禮盤一脚半疊有り壇敷布。一端大幕。一帳經机。廿前人切燈臺。十本。不斷經の料。

壇供米。八斛御明油。一斗七升五合。七升は御明料。一斗五合は不斷經。並に房油等の料。阿闍梨。伴僧。廿口承仕。三人駈仕。六人見丁。二人淨衣。白色

一護摩壇　壇。一面脇机。二前燈臺。四本禮盤一脚。半疊有り。壇敷布。一端壇供米。八石御明油七升

一聖天壇　壇。一面。尺二寸。三脇机。一前燈臺。二本半疊。一枚壇敷布。一端壇供米。三石五斗御明油。七升

一十二天　壇。一面。尺二寸。三脇机。一前燈臺。二本半疊。一枚壇敷布。一端蠟燭布。一端壇供米。一石四斗

御明油。三升五合一敷設供所雜具等常の如し。

右注進すること件の如し

康治二年九月十五日行事大法師嚴實阿闍梨權大僧都法眼和尚位。

仁王經御修法所此一行異本になし。

奉供　大壇供。護摩供。聖天供。十二天供。諸神供。

奉讀　仁王般若經。　奉念　佛眼。　大日。仁王般若陀羅尼。般若菩薩。不動明王。降三世。軍荼利。大威德。金剛藥叉。護摩。一字金輪。

右奉爲　國母殿下御息災安穩增長寶壽天變怪異消除解脫御願圓滿。九月二十日より始め今月に迄る。三七箇日夜の間、殊に精誠を致し修し奉ること件の如し。　康治二年十月十一日阿闍梨權大僧都法眼和尚位寛信

○請雨經別に在り　○止風雨經法別に在り。　○迦樓羅法別に在り　御本に曰く。建保六年二月二十五日遍知院に於て御本を以て書き了る　金剛佛子憲—生年廿七

以上卷三

國譯諸尊要鈔卷四

◎心經法

○本尊般若菩薩　○部主不動　○諸尊三十七尊　○印言常の如し。

◎理趣經法

○本尊金剛薩埵○種子吽○三五股○部主大日○諸尊三十七尊○印內五股○眞言常の如し。

曩謨三曼多縛曰羅赦戰拏摩訶盧灑拏吽娑縛賀　○梵號　阿利耶縛曰羅薩怛縛　○密號　眞如金剛

師主の口授に曰く。振鈴の次に段段の印、一一に之を結ぶべし。文

形像は肉色。左の手拳に作り左の胸に當つ。傍注に曰く。胸は腰か。右の手心に當て、五股を持して赤蓮花に坐す。

◎寶樓閣法

○本尊釋迦○種子ॐ縛入　○三摩鉢○印、智吉祥○言、寶樓閣大呪　○部主、胎藏大日○諸尊三十七尊　○梵號　曩謨釋迦牟尼（セイキャボウチ）　○密號　靜金剛

◎六字經法

○種子　行不可得　○三、弓　○尊像右第一の手は印。左第二は戟。右は刀。左第三は月。右は日。　○印　○觀宿大像の說に曰

く。二大指を以て中指の頭を捻し、定の掌を仰けて惠の掌に覆ふ。惠の頭指を以て定の大中の間に入れ、定の小指を以て惠の大中の間に入れ、惠の小指を以て定の無名指の頭を捻し、惠の無名指を以て定の頭指を捻す。

此印を以て根本の印と爲す。或說は觀音の印、又は陰陽反閉の印なり。○又の印内縛二中指相立て、二頭指を屈して中指の上節を捻す。二大指並べ立つ眞言常の如し。

あり七輪有り。

○金輪 ぁ 如來形黃色。法界定印の上に(一)輪光

○六觀音

ぁ變じて獨股杵と爲る。杵變じて聖觀世音菩薩と爲る。○根本印 二手外縛、頭指

蓮花 唵阿嚕迦力迦娑縛賀 ぁ八葉の蓮花變じて千手千眼觀世音自在菩薩と成る。

○八葉印 唵縛曰羅達麽吉里 ぁ變じて寶形と成る、寶形變じて如意輪觀自在菩薩

と成る。三種の印眞言あり。

ぁ變じて軍持と成る、軍持變じて十一面觀自在菩薩と成る。合掌 唵嚕慶入縛羅吉里

ぁ變じて甲冑と成る、甲冑變じて準提觀自在菩薩と成る。印 二手合掌して二地二水掌に交へ入れ、二風を屈して二火の背に著け、二空風の側に著く。 曩謨颯多南三藐三沒駄倶胝南怛儞也他唵者禮哆禮準提娑縛賀 ぁ 印言

常の如し ○禮佛の句 南無六字章句觀世音 ○勸請の句 六字章句觀世音 六大八大諸觀音 ○觀

宿僧都の圖

(一)輪光 本尊の身の光の月輪形の内に本尊の御首の上に輪形の一つ兩方の左右に各三つ宛合して七輪なり、一輪は金輪なり、殘りの六輪は六觀音也、此の六觀音の尊より輻輪も開けたり、故に惡家摧破の功能あり

○明仙僧都傳

或本には此月輪の邊に人形六人あり。所謂る貫布。須比賀津等の呪咀。云云

不動降三世

○支度 蘇蜜 名香安息香 五香 龍腦 鬱金 白檀 丁字 沈香。

五寶 金 銀 眞珠 琥珀 瑟瑟。

五藥 赤箭 人參 伏苓 石菖蒲 牛黃。 五穀 稻穀 大麥 小麥 菉豆 油麻

小燈臺。伴僧の座讀經の料其數人數に隨ふべし。 弓一張佛の右に之を立つ。 矢十二隻。六隻は弓に副へて佛前に之を立つ、二隻は鳥居の料、四隻は橛の料なり。

以上は例の弓箭なり。大刀一腰。佛の左に之を立つ。桑の弓七張。蘆の箭四十九隻。弓一張に各矢七隻を具して爐邊に置き廻はす。或は此弓箭は支度に載せず。葦七束。箭並に乳木等の料なり。百八並に二十一の乳木は、皆葦を以て箭の形を造り、紙を以て羽と爲す。白練絲一兩。結線の料。紙五帖。三類形。矢羽等の料。三類形とは天狐は鳥、地狐は狐。人形は常の如し。各々紙を以て之を彫る。淨衣鈍色

以上委しく子細に注す、支度には此注あるべからず。書き樣別紙に在り。

○(一)壇の樣四角の槪は矢を以て之を立つ。例の槪を用ゐず。左右の鳥居も亦矢を用ふ。云云

嚴覺、院の御修法に奉仕す。承仕前に行て物の丶具を備ふ。佛前の大弓此圖の定めに之を張り立つ。其時、院承仕に仰せられて曰く、弓弦をはづして立つ可し、故僧正もさぞせしと。云云

○護摩作法調伏に之を行ず。餘家の說は或は息災に之を修す。然る可らざる由。僧正之を示し給ふ。○初火天段常の如し。○次に部主段聖觀音專ら之を用ふ、或は金輪、或は馬頭。○次に本尊段六字天。○次に諸尊段六觀音、曼荼羅の如し。或は六觀音を以て本尊と爲る時は、諸尊段に五大尊を用ふ。又は三十七尊と云云。○次に世天段常の如し。○後火天段之を加修す常の如し。○次に三類形を燒く。護摩畢て未だ鈴杵を置かざる以前に之を燒くなり。先づ人形を燒き、次に天狐次に地狐なり。箸に挿んて爐の火に燒く。器本と三類形を入るる器なり。を以て其灰を受けて蓋を覆ふて件の灰を散せしめず。七日了て後、結線に相具して檀越に送りて之を服せしめよ。是れ怨

(一)壇の樣本所に壇圖二說を出すも今は略す。但し圖の始に下の文あり。

敵を服する意なり。湯を以て之を服せしめよ。酒を以て之を服すべからず。○次に蘆の箭桑の弓を以て六方を射拂へよ。東西南北上下其次第なり。上方の矢は天井に之を射立てよ。結線の法了りて護摩の間、伴僧一口を以て結線せしむ。一時に一筋を以て百八返之を結す。三時に三箭。凡そ七日の間二十一筋なり。本書に曰く三尺五寸を法と爲す。若し不足ならば四五尺も亦得、長日修するときは七日に一筋之を結ぶべし。云云解結の法有り、悉地成就の後之を解く。但し故僧正仁海僧都成尊俱に俱に之を行せられず。伴僧の時の間は讀經。護摩の末に各〻六觀音の眞言を滿ぜしむ。云云師主の御本を以て之を書す。法務の本なり。師主の口傳に曰く、伴僧分て讀經料四人。有人語りて曰く、宗意律師曰く、護摩終りて鈴等未だ本所に置かざる中間に、右の脇机に小土器に入れ置ける三類形を取りて金剛盤の上に置き、先づ不動の慈救呪を以て一百八返誦しかく。次に六足尊の呪を以て一百八返誦しかく。然して後降三世の眞言を誦し、獨股を以て二十一返加持す。其後爐の緣の上に三類形を置て佉知佉知の眞言を誦して之を燒く。この間觀じて曰く、想へ一切衆生は作業に依りて輪廻す。此業を淨除して解脫灌頂の(二)名を得。

○○法花法(一)境場莊嚴の樣は(二)儀軌を見るべし。此注異本になし。

(一)名を得此の次に三類形の圖あり今は之を略す。(二)儀軌法華觀習の儀軌なり。

○種子 ぁ　○三昧耶　五輪塔

極く深秘の說に曰く、胎藏の大日を本尊と爲す。八大菩薩は卽ち八葉九尊なり。

○部主　不動　○諸尊段　八大菩薩。曼荼羅內の塔は、是れ法界宮中の一大塔なり。

師主の口傳に曰く、是れ小野の究竟秘秘の說なり文

○部主　不動　○諸尊　三十七尊　○梵號○密號○御加持には不動の慈救呪を用ふべし。此れ辨事の故に。　○正念誦眞言　曩莫薩縛怛他引蘗帝引毘庾二合尾濕縛二合目契毘藥二合薩栗縛二合他引阿阿暗惡惡、莎賀　○印　智拳印　若し求法の志切なるものあらば、金剛界大日の印は、此の智拳印に一字の明之を授くべし。」師主の說。　(一)二佛共成して毘盧遮那と名づく。故に二佛なりと雖も卽ち是れ一佛なり。法身の佛なる故に一切の諸佛皆是れ大日如來なり。　○眞言　唵縛日羅馱都鑁　是の故に金輪の軌不空譯に曰く、十方刹土中　唯有一佛乘　如來之頂法　等持諸佛禮　是故名智拳」云云　故に金剛界の大日を以て此法の本尊と爲す。

○塔印極く深秘なり。或は率塔婆の印を用ふ。極く深秘の說に曰く、塔印の內に二の世尊を觀ず。右は釋迦左は多寶なり。卽ち二佛同座して妙法蓮花經を演說し給ふと觀念す。

師主口傳に曰く、甚秘甚秘の印は是れ法界大塔なり。釋迦は胎の大日、多寶は金の

(一)二佛　釋迦多寶なり。

大日なり。

○眞言　歸命、阿阿暗惡惡　前の四字次での如く開示悟入、又は因行證入の義、第五の惡字は是れ方便善巧智圓滿の義なり。故に此五字の眞言を以て至極の究竟と爲す。經文に曰く、定惠力の莊嚴、此を以て衆生を度す。文故に本尊は金剛界大日、眞言は卽ち胎藏なり。定惠を以て兩界に配當す。又妙法蓮花經の題目は、卽ち胎藏八葉九尊なり。

○香藥用の事。菟樓婆香とは。草香なり、之を煎て鉢に入れて壇上に佛ふ。

勸修寺法務の說に云く、或人曰く、御加持には金剛界大日の眞言を用ふ。」有人は普賢の眞言を用ふと。」有人は自我偈を用ふと。」云云

此法は息災の傳授了りて散念誦の時、經王を讀誦すべし。文　○禮佛の句　曩謨、毘盧遮那、薩怛他蘗多。　御本に曰く建保六年二月十八日遍知院に於て御本を以て書き了る。金剛佛子憲——生年廿七

以上卷四

國譯諸尊要鈔卷五

○愛染王敬愛。天變。所望此明王は蓮花部の部主と爲し、金剛部の(一)父母と爲す。　○種子　ぁ　○三摩。五股箭勸修寺法務の說。　○又說

(一)父母は部母なり、晉假借なり、此の法は肝要なり、此の尊は金剛部蓮華部を兼ねたる尊なり。

(一)又曰く　此は瑜祇經の說なり。
(二)諸尊云云　三十七尊は四種五種に通ず、此の十七尊は敬愛に限るなり。
(三)普供養　此の普供養は諸尊段の冊七尊を供養する明なり、大鈎召の印に普供養の明と云ふにはあらず、供養の眞言は三十七尊の普供養の事なりと云ふ事なり。
(四)十七尊云云　本鈔に坐位の圖を出すも今は之を略す。
(五)根本の印　弓箭の印。
(六)法身の印　此の印は定慧和合して即ち理智不二なれば法身の印と名く。
(七)小呪　五字の呪なり。
(八)五種相應印　內五股二大を立て交へよ。
(九)愛菩薩　外縛二風立交はす、弓箭の印。
(一〇)範俊の傳醍醐には之を用ゐず。
(一一)權僧正　勝覺也。
(一二)平等王　此尊は慈悲深重にして平等に衆生を利益するが故に平等王といふ平等王の呪は眞言とは五字の呪なり。
(一三)一字づゝ　此の眞言を五種に分れば一字の呪と時ふ、五字連ぬる時も一字の呪といふ、は瑜祇經說なり、此の一字に叱悉地を加ふ此れ口傳なり。
(一)愛染王曼荼羅　其の圖を略す、其の圖の後に下の如く記す。
(二)師傳　一印三明の事をいふ。

○(一)又曰く　○三摩。箭說祕祕　○(二)諸尊。十七尊說祕　○勸請印　大鈎召の印　○眞言　摩訶素誐、縛曰羅薩怛縛、素羅多薩怛縛、弱吽鑁斛　普通三十七尊。　○大鈎召印眞言(三)普供養の明　○(四)十七尊の坐位。　○(五)根本の印　二手內縛。二中指を立て合せ、右左を押し叉ふ。又弓箭の印と名づく。惠運の傳に曰く、左を上に之を叉ふ。祕祕說なり。(六)法身の印と名づく。　○眞言　唵摩訶羅誐縛曰羅烏瑟抳嚩、縛曰羅薩怛縛、弱吽鑁斛　○又の印　外五股の印に(七)小呪を用ふ」口傳に曰く。外の三障を除く。　○眞言に曰く　吽摘枳吽短弱　○又の印　內五股の印に「心呪を用ふ」。口傳に曰く內の三障を除く。　○眞言に曰く　吽悉地　○(八)五種相應印。內縛五股の印を以て本と爲す云云。眞觀寺僧正眞雅の御傳祕祕。　內五股は息災。先きの印二風火に著くるを增益と爲す。先の印二風三角に作るは調伏。先の印二風蓮花に作るは敬愛。先の印二風鈎するは鈎召なり。高野の經藏に其書あり。文　眞言は五種の印に、吽摘枳吽弱を用ふ。云云　口傳に曰く、金剛界三摩耶會(九)愛菩薩の印言之を用ふ。文(一〇)範俊の傳に曰く、唵摩訶羅誐にて二手金剛掌。縛曰羅烏瑟抳嚩にて、內に相叉へて縛ル爲す。縛曰羅薩怛縛にて、忍願を直く立て針の如くす。弱吽鑁斛にて相交へて染を成す。是を根本の印と名く。文　(一一)權僧正の傳に曰く、五種相應の印には、通じて(一二)平等王の眞言を用ふ。但し件の眞言の五字を各〻(一三)一字づゝ之を加へ置く秘事なり。文

○息災の印には　唵吽、吽悉地、娑縛賀　○增益の印には　唵摘、吽悉地、娑縛賀　○敬愛の印には　唵枳、吽悉地、娑縛賀　○調伏の印には　唵吽、吽悉地、娑縛賀　○鈎召の印には　唵弱、吽悉地、娑縛賀

○勸請句　金剛愛染大明王、三十七尊諸薩埵　○禮佛の句　南無縛曰羅羅誐囉地薩怛縛摩訶薩埵縛。　○發願の句　愛染明王　○正念誦　大呪。或は平等王の眞言　○御加持並に伴僧は大呪　○加持物の呪は平等王の眞言を用ふ。又は吽悉地を用ふ。

○字輪觀　師主の口傳之を受く。

○(一)愛染王曼荼羅　異本に之れなし。

今此の曼荼羅は大師歸朝のとき御所持なり。云云　醍醐にて或人の本を以て、師主書かしめ給ふ。師主曰く、一說には彼手は所求の事を表すなり。」云云　委細の口傳之れあり。吽悉地の眞言は卽ち成就金剛薩埵一字心大勝心相應の眞言と名く。印外五(二)師傳なり。　大御室、彼の手を海僧正に問はしめ御す。僧正注進せしめ給ふ。イとは人王肉心の肝なり、生氣を奪はしめざるなり。王とは黃なり。又或說に曰く、左第三の手に人王を持す文延壽命卽ち此の意なり。寂圓入道勸修寺嚴覺僧都に傳へて曰く、人王は六粒あり。」師

子冠口傳に曰く、那麽（此には人と云ふ。）檀越の姓名なり。」

委細の口傳之れ有り。

愛染王とは即ち愛菩薩の所變なり。云云 安然瑜祇經の記に明かに此義を釋せり。金剛王の儀軌是れ愛染王の儀軌にして、例の金剛王には非ず。云云 師主の口傳に云く、東の四菩薩は即ち愛染王なり、座の下の寶瓶は地天の三摩耶形なり、地天と觀ずべし。云云 紅のうすやうを以て八葉蓮花に之を造り、其上に五寶を置く、其上にをしの

劒羽（ケンウ）二を重て置く。又同薄様を以て小呪を書して、娑縛賀の上に姓名を加へ、並に所求の事之を覆ふべし。其様に曰く、吽摘枳吽弱、並に所求の事、娑縛賀。此の如く之を書して之を覆ふなり。敬愛法の時は尤も之を用ふ、秘密の説なり。但し護摩の時、箱に入れて壇中に之を置く。又た人形を尤も之に用ふ。堅木を以て造るべし。櫻の木尤も（一）吉なり。

前大僧正（法務定海）參議伊通（コレミチ）に語りて曰く、諸尊の部主は即ち修瑜伽者の心なり、是れ小野僧

（一）吉なり此の夫に人形杵の圖あれども之を略す。但し人形杵は模の木を以て之を作る

正の手跡にあり。云云 師主勸修寺法務の説に曰く、白河院御年二十五の時、義範僧都に仰せられて曰く、今年は極めて重厄の年なり、若し今年を過ぎなば今且く世に有るべし、壽命を延ぶべき法は如何。僧都奏して曰く、悉地成就の法を行せしむべし、宣旨ぉはしまして曰く、何れか悉地成就の法ぞや。僧都奏して曰く愛染王の法是れなり。宣旨に曰く極めて貴き事かな。」云云師主曰く、或説には内五股の印は、（上求菩提）外五股の印は（下化衆生）又曰く彼手は（二）所求の事を表す。事に隨て持せしむ。又曰く、赤色の紙等に所求の事を書して持せしめ之を行すべし。又曰く、紅の薄様を以てし、若くは紙を赤色に染めて八葉の蓮花を造りて本尊壇に之を燒くこと百八枚なり。但し白檀香をすつて之を燒く。是れ義律師の傳なり。若し國王愛をも此の如くせよ、赤色の紙二帖許り入用。」云云

（一）所求の事是も梵字にて書くなり宜しとす、息災なら鳥底迦、增益は補瑟底迦等なり

（二）大勝金剛三種共に金剛部の通用なり。

○○（二）大勝金剛敬愛

○種子 ふ ○三摩 五股（大日所變十二臂なり。） ○部主 愛染王 ○諸尊 三十七尊 ○印 内縛して、忍願を堅てゝ劒形の如くす（最勝轉輪の印と名づく。） 師説には智拳印を用ふ。（秘秘）

○眞言 唵摩訶縛（バソ）曰路（ロ）烏瑟尼沙、吽怛洛頡哩惡吽、娑婆訶 ○勸請 本尊聖者大勝尊、蓮花部中諸聖衆 ○禮佛の句 ○發願の句 大勝金剛 ○正念誦 ○御

(一)経に曰く　瑜祇経なり。

(二)金剛最勝心　此の眞言のことなり。

加持　○伴僧以上各々本呪　○字輪觀　阿等　(一)経に曰く、

十方淨妙の國　三世及び三界　最尊にして獨り無比なり（異には勝に作る）　此の大轉輪王は
能く諸の佛頂を摧き　能く諸の等覺を攝して　親近し眷屬と爲す　速に大
悉地を成す
若し末法世の人　長へに此眞言を誦すれば　刀兵も害すること能はず　水火
も焚漂すること能はず
蓮花金剛手　翼從し而も侍衛す　若し一百八（異には返に造る）を誦すれば　能く百劫罪を滅す
若し一千返を誦すれば　能く意願を滿することを成す　若し一落叉を誦すれば
大金剛身を得
若し一俱胝を誦すれば　遍照尊と成ることを得　千佛來りて共に護る　決定
して疑あることなし
我今に更に印と　(二)金剛最勝心とを說かん　内に十度を竪て縛し　忍願屈して
頂の如し
是を根本心　最勝轉輪の印と名づく　若し常に此印を結べば　金剛薩埵尊

(一)妙吉祥　文殊なり。

(二)三摩寳珠　本所に寳珠の圖あれども之を略す。

(三)部主　今五大虛空藏は明星天子の一圓明の中の功德なり、爾るに諸曜宿は金輪の毛孔より生ずる故に金輪を部主となす。

(四)又の印　此印は三摩寳珠の印なり、文殊の印にも此の印を用るは同體の故なり。

蓮花摩尼主　毘首羯磨尊　一切の諸の聖尊　咸く來りて覆護を增す
此人金剛の如し　諸惡壞する能はず　此身光聚の如し　能く三界の冥を破す
此人蓮花の如し　諸塵染する能はず　此身羯磨の如し　大に諸の佛事を作す
身は遍照尊の如し　諸佛捨つること能はず　身は(一)妙吉祥の如し　能く無盡
の惠を成す
身は金剛輪の如し　能く理趣輪を轉ず　此眞言印を持すれば　能く是の如き
の事を成ず
もし淨處に依觸し　但し最勝の印を結び　及び根本心を誦すれば　一切爲さ
ずと云ふことなし
作すに隨ひて皆成就す　一切の願皆滿す」

○五大虛空藏息災。增益。天變。所願。辨事馬頭

○種子　ぁ ぁ ぁ ぁ ぁ　○(二)三摩寳珠　○(三)部主　金輪又は佛眼

○諸尊。三十七尊皆寳部の三摩地に入り、各々虛空藏の印を持す。一切義成就輪、五部富貴吉祥の法なり。　○印。內五股印五峯皆寳珠と成ると想へ。但し二中指寳形に作せ。云云秘秘の說なり眞言　唵縛曰羅、囉怛曩（アカタンナウ）、鑁吽怛洛頡哩惡、娑婆訶　○(四)又の印　瑜祇經の

(一)八天　八方天の印言なり。

(二)先師云云　寛信法務なり、明海の詞なり、大僧正の伴僧も本呪を用ゐる樣に仰せらるゝは宜しからず。

如く(一)八天の印之を用ふべし。師主極く深秘して曰く、外五股の印眞言三寶院の傳秘中の秘說なり。五部肝心之れに在り。唵縛曰羅囉怛曩、阿阿暗惡噁、娑婆賀　口授に曰く、振鈴の後、五種の印並に甚深の印之を結ぶべし。」云云　○勸請　本尊五大虛空藏、七曜星宿諸眷屬。　○禮佛の句　南無法界虛空藏三返　南無金剛虛空藏　南無寶光虛空藏　南無蓮花虛空藏　南無業用虛空藏　南無金剛界一切諸佛　○發願の句本尊聖者。五大虛空。七曜星宿。諸眷屬等。兩部界會。諸尊聖衆。　○正念誦眞言　唵縛曰羅囉怛曩、鑁吽怛洛紇哩惡、娑縛賀　○御加持呪胎藏次第虛空藏の眞言なり。師主美福門院の爲めに勤修の時之を用ふ。助修八口　歸命南引一伊、阿迦奢三曼多弩蘖多尼質怛藍、縛羅二合達羅、娑縛賀　○伴僧の呪は次ぎ上の眞言之を用ふべし。三寶院前の大僧正定海勤修の時は、御加持並に伴僧は本呪なり。」(二)先師は此說を用ゐず。御加持には、歸命、鑁吽怛洛紇哩惡、莎賀を用ふべしと。」秘秘の說なり。　○字輪觀。阿縛羅訶佉の字義を順逆に常の如く之を觀ずるを尤も吉と爲す。云云　字輪觀より出でて後、先づ大日加持、次に本尊加持、佛眼、金輪、孔雀明王等の印言之を用ふべし。

今此法は息災增益の二種に通じて之を修すべし。除災の爲めには息災を修し、壽福の爲めには增益を修す可きなり。普通に行する時には助修六口、淨衣は白黃、或は八口

(一)秘中深秘　金門鳥敏法とは大師御作と云ふも實は大江匡房の作り文字にして辛酉の年の秘號なり此の年は災疫飢饉兵等の三災重り上古の法を行ずるなり

護摩許り之を修すべし。是れ仁海僧正の樣にして、小壇なく護摩壇許り。云云　一の圓明の中に鑁吽怛洛頡哩惡の五種を觀想すべし。三昧耶形は瑜祇經の說の如し。壇の中央に小塔を安置し、佛舍利五粒を籠め奉れ、或は一粒是れ卽ち虛空藏三摩耶身如意寶珠の故なり。護摩の時は五段に之を行す。謂く火天。部主。金輪佛眼本尊。五大虛空藏諸尊。三十七尊世天段なり。世天段には火天位に枸を增加して供すべし。十二天、諸宿曜等、三十六禽、七星等、同じく加へて之を供すべし。

虛空藏結とは虛空藏結の意なり。黃色の糸六尺許を以て時別に三十六結。三時に一百八結結線して施主の身に懸けしむべし。左に緒を合せて一返一結、百返百結、千返千結して施主の許に送るべし。師主曰く近來は之を用ゐず。結線の呪には歸命鑁吽怛洛頡哩惡、娑縛賀を用ふべし。或る次第の中に又結線の呪あり。云云

口傳に曰く、(一)秘中深秘、金門鳥敏法とは件の年に此法を修せらる。仍て此の如く之を書す。施主の姓名、並に祈願の意趣を靑紙黃紙等に書注して、舍利塔の內、或は下に之を安置すべし、是れ極秘事なり。三十六禽の呪を加へ誦すべし。但し本說なきか。

金剛界成身會を以て之を行す可きなり。五字轉じて五佛と成る。次に五佛を轉じて五

(一)合掌云云金剛合掌、次の南方は三風寶、西方は二風蓮葉、北方は金剛合掌をいふ、中央は文の如し。

(二)大威德五大尊中の大威德にあらず。此の文の次に三種の曼荼羅の圖あれども之を略す。

菩薩と成す。振鈴の後、五大虛空藏の印明各別に之を用ふ。

東方。(一)合掌　唵縛日羅吽」南方。寶印　唵縛曰羅、囉怛曩怛洛」西方。蓮印　唵縛曰羅、達麽頡哩」北方。金掌の印　唵縛曰羅羯磨惡」中央。金掌。二風を以て二空の甲を押す。唵縛曰羅、鑁」次に八天の印之を用ふべし。如來拳印を結びて「觀せよ。己身の前に於て無盡の乳海有り、海の中に大寶蓮花王を出生す。金剛を莖と爲し量法界に同じ。上に七寶珍妙の樓閣有り。花香雲海伎樂歌讃あり、摩尼を燈と爲す。樓閣の中に大圓明の月輪あり、自身の量に等し。一圓の中に於て更に分ちて五と爲す。中の圓明に於て鑁字有り、法界虛空藏と爲る。白色にして左の手に鉤を執り右の手に寶を持す。前の圓明の中に吽字有り金剛虛空藏と爲る。黃色にして左に鉤を持し、右に寶金剛を執る。右の圓明の中に怛洛字有り、寶光虛空藏と成る。青色にして左に鉤を執り右に三辨寶を持して、大光明を放つ。後ろの圓明の中に於て頡哩字有り蓮花虛空藏と成る。紅色にして左に鉤を持し、右に大紅蓮花を持す。左の圓明の中に阿字有り、業用虛空藏と成る。黑紫色にして左に鉤を持し右に寶羯磨を持す、此菩薩首に五佛の寶冠を戴き、衣服瓔珞皆本色に依りて各〻結跏趺坐す。一曼荼多羅の內の(二)大威德の諸尊圍繞恭敬せり。」

(一)壇の上に頡哩字有り、大蓮花王と成る、法界に遍ず。其の上に惡字あり、寶宮殿と成る。高廣にして中邊なし。無數の莊嚴其內に充滿せり。其の中央に七つの師子座あり。其上に白蓮花王あり。其上に惡字あり、變じて金輪寶と成る。變じて攝佛頂輪王の身即ち大日なり。と成る。如來形にして紫麽金色大丈夫の相なり。法界定印に住す。其上に八輻の花輪を持す。其の上に右に旋て八色の輪を現ず。第一の赤色の輪には光聚佛頂あり。左の手に蓮花を持し上に佛頂有り。第二の黃色の輪に發生佛頂あり、黃色の蓮花を持す。第三の白色の輪に白傘佛頂あり、白傘を持す。第四の雜色の輪に勝佛頂あり、利劍を持す。第五の紅色の輪に除蓋障あり紅蓮を持す上に鉤を安す。第六の青色の輪に黃色佛頂あり三股杵を持す。第七の綠色の輪に最勝佛頂あり金輪を持す。第八の紫色の輪に無邊音聲佛頂あり白螺を持す。八兢沙俱胝の諸佛圍繞し玉ふ。其の外女寶、馬寶、主藏、神寶、輪寶、象寶、珠寶、兵寶四面に圍繞せり。」是の如く觀じて例の如く七處を加持す。師主曰く、大佛頂は是れ諸佛頂の惣名なり。攝一切佛頂輪王を本と爲す今は之を用ふ。」或說に曰く、八大佛頂を大佛頂と云ふ。」或說に曰く、五佛頂を大佛頂と云ふ、是れ眞

(一)此の壇の道場の所持の花輪は本尊の中に八佛頂をず、實には白蓮花王の上に大花輪あり、輪の臍に八輻の大佛頂あり、此の八輻の間に八の大輪頂をを有す。定印の上の所持とす。故に其の旨を顯す。

◎大佛頂法 息災 增益

雅の傳なり。」小野の秘密鈔にあり。靈巖の傳は白傘蓋を以て摩訶頂と爲す。壇に十六の鏡を置く。」師主曰く不審。大理趣房曰く、金輪を以て摩訶頂と爲す。文　此の傳の意は、種子、勃嚕唵。三金輪なり。人多くは此說を用ふ。大敎院も亦之を用ふ。

○印　智拳印。大師御傳。　○部主。阿彌陀頡哩　○三。蓮花。獨股杵を莖と爲す。師說に曰く、胎藏大日を本尊と爲す。種子、惡。三、八輻輪。部主阿彌陀。三昧耶先の如し。　○諸尊　八大佛頂　智拳印　眞言(一)小呪　○印言　外五　大佛頂小呪

○率塔婆眞言口傳小呪に曰く　醍醐の傳。曩謨引娑哆二合他引誐跢耶、蘇誐跢引耶、囉訶二合帝、引三去藐三去沒馱引耶、悉殿都曼怛羅二合跋娜、引娑縛二合引訶　○同小呪勸修寺の傳。怛儞也二合他、唵阿曩嚧引阿曩引嚧、尾舍娜尾舍娜、滿馱滿馱滿引馱儞、滿馱儞、吠引羅縛曰羅、二合播引捉泮吒吽引赦嗽二合泮吒、娑縛二合引訶　○同小呪加持物に之を用ふ。(二)唵摩捉縛曰羅吽師主の傳に曰く、歸命、惡、娑縛賀　時の間伴僧は陀羅尼を誦す。御加持の呪は小呪を用ふ。　○勸請の句　金輪佛頂轉輪王、八大佛頂諸轉輪　○禮佛の句　登勝法の如し。

○讃四智　○本尊讃に曰く　曩謨、薩縛枳然野、一摩妬悉尼、二薩縛惹誐地三弩悉尼、四野捨悉尼寧、五方補縛弩迦曼多謎七三摩沙他八尾地野知波九捨迦羅摩利寧十

(一)小呪　大佛頂の小呪なり。

(二)唵摩捉云云　此は寶樓閣の小呪なり。

曩謨率都帝十但羅他利捨迦羅縛里地、曩謨率都帝　○字輪觀　阿縛羅訶佉本說に曰く、唵含藏一切佛。帝一切法如如。儒一切法生滅。羅一切法生垢。只一切法義諦。差一切法遷變。迦羅一切法業因。縛一切法言解。地一切法眞如」

本尊の印言の次に、或は八大佛頂を用ふべし。

○八大菩薩。(一)八大明王印言。但し時に隨ふべし。八大佛頂印言胎藏の如し。　○八大菩薩印言胎藏諸菩薩の印言、普印なり。石山內供の傳に曰く、八大明王は一切持金剛の印言にして、卽ち金剛部三昧耶の印なり。」　○(二)攝一切佛頂曼荼羅高野の本。

師主仰せられて曰く、右の曼陀羅の圖は、大妙金剛甘露軍荼利經の說に依る歟。但し彼の經に中央の尊を說て曰く、爾の時世尊身に攝一切佛頂輪王の相を現作す。手に八輻の金輪を持して、七寶の師子座に處す。云云　是れ法界定印の上に金輪を持するか。若し爾らば惡字なるべし。今圖は中央に鑁字を安す如何、之を思ふべし。又彼の經には一身四面を言はずして智拳印に住することいかん。石山內供大佛頂の圖に曰く、中央攝一切佛頂輪王は、手に八輻輪を持す、種子は惡字なり。文　尊勝儀軌不空の譯、並に善無畏の譯俱に中央の佛頂は西に向く。今經の所說何ぞ東に向ふる乎。答ふ、先德の

(一)八大明王　薄次第に委し。

(二)攝一切佛頂云云　今は之を略す

曰く、此法の部主は阿彌陀なり。」云云 之を以て之を思へば、此の法は敬愛に修すべき乎、仍て彼の經中央の尊東方に向ふるは即ち此の意乎。但し先德此法を增益或は息災に之を行するは尊勝の法に相濫する乎。八佛頂を安することは尊勝の法に同じと雖も、其行法は同なる可からざる乎。內供の圖又た光聚を以て中央に安す。前へ東方畢ぬ。

○八大明王印言

○第一大唉明王。右の空、地を押して肘を申べ立て左の拳空風を捻ず。 眞言に曰く 唵縛曰羅、吒賀沙耶吽發吒

○第二步擲明王。右の手三股の印外に向へ、左の手拳にして肘を上ぐ。 眞言に曰く 唵紇哩吽、矩縛餅、勃嚕餅、素嚕餅、惹嚕餅。

○第三降三世明王。二羽臂を交へ、金剛拳にして檀惠相ひ鉤し、進力を立てよ。 蘇婆儞蘇婆吽、縛曰羅吽發吒

○第四大威德明王內縛。二中指を立て合はす根本印常の如し。 眞言に曰く 唵吽惡吽

○第五不動明王。鞘の印常の如し 眞言に曰く 阿左羅羯拏、戰拏娑駄耶吽發吒

○第六無能勝明王。右の手空風を捻して心に安く。左の手肘を立て、五輪外に向ひ立てよ。 眞言 唵戶嚕戶嚕戰拏哩、摩登疑、娑婆二合賀

○第七(一)馬頭明王。二手三補吒に作り、二風指を屈して甲を合はせ、空指の根の下を去ること稍々一麥許り相著けず。二空並べ立て稍々其甲の頭を仰ぐ即ち是れなり。 眞言に曰く 唵縛曰羅二合斫紇羅二合吽

○第八大輪明王。小金剛輪の印なり。 眞言に曰く 唵縛曰羅二合斫紇羅二合吽

○八大佛頂異名 ○最勝金輪撰諸輪王。 ○無邊聲無邊妙聲遍照。 ○光聚神通放光。 ○發生廣大轉輪。高佛頂破魔 ○白傘蓋異相奇特。 ○勝佛無比 ○尊勝除障。捨除。降魔。摧碎。 ○廣生極廣。最高。難觀。辨事。黃色

○八大佛頂。八大菩薩。八大明王の事。小野略頌

最勝觀音馬頭尊 無邊慈氏大輪尊 光聚虛空大唉尊 廣大普賢步擲尊

白傘金剛降三世 勝佛文殊大威德 尊勝除蓋不動尊 極廣地藏無能勝

師主曰く、大妙金剛大甘露軍荼利焰鬘熾盛佛頂經運錄に、分明に八大菩薩、八大明王を現作するを說くは異論ある可らず。但し八大佛頂と八大菩薩同體の本說は何處なる乎。答ふ、即ち彼經に先づ八大佛頂を說き、次に八大菩薩を說く。知んぬ、是れ同なり。但し其佛頂と其菩薩と同なることは彼經に分明ならざる乎。然りと雖も尊勝一卷の儀軌不空譯。には、中央の佛の右邊に觀自在菩薩を安し、次第に右に廻て地藏菩薩を第八と爲す。又三卷の儀軌善無畏の譯。には、中央の佛の右邊に最勝佛頂を安し、次第に右に廻りて廣生佛頂を第八と爲す。」明かに知りぬ、最勝佛頂は即ち觀自在、乃至廣生佛頂は卽

(一)馬頭明王印此印常の十八道の馬頭の印に異れども是も馬口の印なり、其の甲の頭を仰ぐる間は問けることなり。

ち地藏なり。○五佛頂とは五佛頂及び胎藏軌に出づ。輪。蓋。高。光。勝なり。金輪。要略儀軌に、之を以て五指と爲す。各大指を輪と爲す。○八大佛頂は常の如し○十佛頂とは、八大佛頂に攝一切佛頂及び普通佛頂を加ふる乎。○三佛頂とは胎藏の軌並に大日經に出づ。發生。廣聲。無邊音聲なり。

◎光明眞言法

○本尊　胎藏大日　○種子。𑖩　○三昧。塔　○部主。阿彌陀印言は、金剛界三昧耶會。○諸尊。三十七尊　○印　外五。密印　○眞言帝の如し　師主の說に曰く、普通の說には金剛界大日を以て本尊と爲す。印言は常の如し。但し此傳秘說なり。文

○加持物の呪　曩莫三曼多沒馱南、阿、娑婆賀　○蟻子丸の事。蟻塚の土を取りて藥種に之を用ふ。此れ相應物なり。秘厚造紙上に曰く、摩醯首羅大自在天神通化生伎藝天女」念誦法に曰く、怨家有りては朱砂を以て用ひて名形を書して、左の脚の下に於て踏めば自ら來る。夫婦相ひ背くものは、其の名を書して知らしめずして左の足に之を踏めば即ち愛す。一切の貴人愛して宮に入る。文

◎無垢淨光陀羅尼法明閑く。

○本尊阿彌陀○部主觀音○諸尊三十七尊　御本に曰く建保六年二月十五日遍知院に於て御本を以て書き了る。　金剛佛子憲——生年廿七

國譯諸尊要鈔卷六

◎一髻文殊(一)產生。左の手に青蓮花を執り、花の上に如意寶珠有り。右の手下に向ひて垂れ下せよ。五輪を滿願の印に作す。(二)明の說　○部主。馬頭　○諸尊八大童子。○種子。𑖩　○三摩。青蓮花の上に如意寶珠。　○部主。馬頭　○諸尊八大童子。

又は三十七尊　○印　(三)八葉蓮花の印　○心眞言　唵娑麽那始里吽、娑縛賀

○隨心眞言　唵阿捨麽顎吽、娑縛賀　○小呪　唵叱洛叫焰、娑縛賀　○勸請　本尊聖者一髻文殊、蓮花部中諸聖衆。　○禮佛　曩莫阿梨也曼殊師利異本　○發願の句

一髻文殊　○正念誦眞言小呪を用ゆ。　○御加持心眞言　○伴僧上の如し　○字輪觀　阿等

◎五字文殊(四)右の手に智劍を持し、左の手に青蓮花を執る。花の上に般若梵筴あり、首に五髻あり、下に光形あり、劍に火炎あり。　○種子。𑖩　○三摩智劍

○部主。馬頭　○諸尊。八大童子　○印　外縛して忍願申べて劍形の如し。

○言　唵縛佉砌那　○根本印。虛心合掌して二火水を押す。風を屈して空の甲を捻す。○言　唵阿羅波者曩　○勸請　本尊界會五字文殊、蓮花部中諸聖衆　○禮佛　南無阿利也曼殊師利　○發願　五字文殊　○正念誦眞言。本呪　○御加持並に伴僧上の如し　○(五)又の說虛心合して、二大指を掌に入れて二頭指を以て節の上に立つ。是れ傳法の印なり。　眞言　唵縛曰羅底乞臾

(一)產生云云此の註は道場觀にして本尊の形像なり　(二)明の說是れ一心覺の言なり、覺文殊を產生に用ふるは明海のみと云ふ義の故に此の處に後人の加ふる故に點を掛け置くなり。　(三)八葉此の上に寶を觀ず、此れ即ち本尊加持の印なり。　(四)右の手云云道場觀にして形像なり。　(五)又の說虛空眼の印に同ず。

拏地瑟姹二合婆縛二合鞞、莎賀

◎六字文殊

○種子 ḋ ○三摩 梵篋 ○部主。馬頭 ○諸尊。八大童子。又は三十七尊

○印 ○言 唵縛曰羅底里瑟拏淡、婆縛訶 ○勸請 本尊聖者六字文殊、蓮花部中諸聖衆 ○禮佛の句 南無阿利也曼殊師利 ○發願の句 六字文殊此句異本になし。

○御加持。本呪 ○伴僧上に同じ ○字輪觀 阿等

◎八字文殊息災。天變。惡夢。

○種子。ㄔ○三摩。師子頭。梵篋。三股。又は青蓮花の上に五股、又は青蓮花の上に梵篋、其上に五股 口傳に曰く、三實 ḋ 三チシリ 三梵 ○部主 馬頭小野秘說 金輪。大威德。○諸尊。八大童子總種子は丑。三摩は三股。各別の種子は別にあり。鉤召の印を用ふ。秘說に曰く天變の時之を用ふ、九曜七星之を用ふ。左右縛は太古の傳なり。 又の說には三十七尊 ○印。五股印(一)秘秘 (二)八葉の印○(三)又の印二手內縛して、禪智並べ立て獅子の口を開くが如し。此印に口傳あり。(四)事に隨ひて同じからず秘事なり。之を注せざるに仍て口に之を授くべし。 ○又の印 合掌して、左右の風空開く。法務御房の秘事なり。眞言は破諸曜宿の明を用ふ。○又の印 金剛外縛して、忍願を立てゝ劍形の如くす。心額喉頂を印せよ。眞言に曰く 唵惡尾羅吽欠者嚩。小野究竟秘說に曰く、普通の說は妙吉祥破諸宿曜の印明を用ふ。極秘說には件の印

(一)秘々持物なり。此は所持物なり。(二)八葉の印八葉は文殊の八智を表し八童子を現ず(三)又の印此の印內縛して二大を並べ立つるに兩方なり、二大立つると又二風に付くるとなり、今は二大を立つるなり。(四)事に隨て云云獅子の口を以て食する所は事に隨て不同なり或は天變を食し、又は惡夢を食し、不吉祥を食する等事に依りて別なり

を以て、本尊の八字眞言を用ふ法務の傳なり。 ○梵號 南無阿利也曼殊師利 ○勸請 八字文殊大聖尊、蓮花部中諸聖衆 ○密號 般若金剛。又は吉祥金剛 ○正念誦本呪 ○伴僧御加持上に同じ。 ○字輪觀。阿等 師說に曰く、散念誦には八大童子の眞言、各〻百返之を滿加す。又馬頭の眞言百返」云云 振鈴の後八大童子の印明之を用ふべし。胎藏次第に之れ有り。次に理供養、次に事供養常の如し。醍醐(一)聖賢遮梨の傳は、字輪觀の後に八大童子の印明を用ふ。○次本尊加持 ○次に正念誦 ○八大童子。各別種子。三昧耶形。請召 三幢北 計設 三梵東北 救護 三棒東 烏波 三劍東南 光網 三羂索南 地惠 三風幢西南 無垢光 三未開敷蓮西 不思議 三未敷蓮西北

以上各〻師子に乘りて、三摩耶形を執持す。首髻八智尊とは八字文殊なり。此菩薩の頂に八髻有り、一一の上に皆佛身有り、此の八佛は即ち文殊の八智なり。眞言の八字を以て即ち其の八佛の種子と爲す、故に八髻の上に次第に八字の眞言を安くべきなり。八字文殊の首しに八髻有り。髻の下每とに佛像有り。持物は青蓮の上に五股杵あり。劍には火炎なし。文 花座の印をば八師子の座と之を觀ずべし。鎭法別に在り。

◎一字金輪息災。產生。所望。天變。仁海曰く、大日金輪は法身、(三)釋迦は應身にして我れは化身なり。云云

(一)聖賢金剛王院の三密房聖賢なり。

(二)釋迦云云大日金輪釋迦金輪の中に釋迦金輪は應身、或は化身なり、共に釋迦なりといふ。

○種子ॐ○三摩十二輻輪 或は鍐十二輻輪。師主の秘說なり、小野の傳(異本) ○部主 佛眼。孔雀明王。秘秘の說。○諸尊 三十七尊○根本印(一)此印は摩訶の印、所謂如來頂なり、適〻繩に之を結作せば、卽ち本尊に同じ。 先づ合掌して、左右の二無名指●二小指を以て、右左を押して相叉へて掌に入れ、二中指直く竪てゝ第一の節を屈し、頭指相拄へて劍形の如くし、二大指並べ立て、二頭指平に兩節の頭(ハシ)を屈して、二頭指の甲上に相拄へよ。文 大日劍印、並に同用法に出づ、眞言に曰く、師說秘秘の說なり。曩莫三曼多沒馱南唵。若し新請所求の一切の事有らば、此に於て應に孔雀明王の呪を加誦せよ。云云 勃嚕唵(ボロム)。師主曰く、加用の眞言の事は究竟の秘事なり。安祥寺錄に、金輪王佛頂略念誦法、通一切佛頂は同用法、亦大日劍印等に此文有り。云云 (二)三寶院權僧正の傳には智拳印を用ふ。義範僧都の傳なり。眞言 曩莫三曼多沒馱南、唵、勃嚕唵(ボロム) 勸修寺法務の傳秘印師主之を受く。 二手外縛して、二中指立て合せ、端し劍形の如くして、二頭屈して二中指の背に付く。

私に曰く、金剛界五佛灌頂の中の、遍照尊の印なり。眞言も亦上の如し。大敎院僧都の傳も智拳印を用ふ。

○勸請の句 一字金輪轉輪尊、八大佛頂諸轉輪 ○禮佛の句 曩謨曳佉乞叉羅三寶院の傳。

○又の說 南無一字金輪轉輪王勸修寺の傳。 ○正念誦 本呪加用の眞言。 ○御加持。本呪權僧正の傳、圓宗寺御修法の時、之を用ひらる。 ○伴僧上に同じ ○又の說は辨事佛頂の眞言を用ふ、五佛頂經に出でたり。師主の傳小野 曩莫三滿多沒馱南、唵吒嚕(ダロ)二合滿馱(マンダ)、娑婆賀

○字輪觀。阿等。金を打て後の眞言三寶院權僧正の傳に曰く、金剛界大日眞言。「小野の說は師主の傳、今の說は法務の傳なり。」 曩莫薩縛沒馱冒地薩怛縛南、引阿尾羅吽欠師主曰く、金輪佛頂は八大菩薩の中には六觀音なり。又は八大明王中には馬頭なり。」若し然らば觀音並に馬頭を以て金輪佛頂と爲す意なき乎、いかん。以上異本 權僧正の傳に曰く 唵縛曰羅馱都鑁

四輪王の中には金輪殊勝なり、故に此尊を解して金輪王と云ふ。又國王を之に寄せて祈り奉るに金輪聖王と稱す。」 光明輪雲海とは金輪王なり。 ○七寶とは輪寶。象寶。馬寶。珠寶。女寶。主藏臣寶。主兵臣寶なり。

○佛眼息災

○種子。ॐ大理趣房寂圓の說。○三摩。佛頂眼師主の秘說なり。 ○又の說ॐ石山內供又は大敎院の傳なり。以上六字異本になし。○又の說ॐ私に曰く、三寶院珠。秘說○部主。金輪釋迦 秘說に曰く大日 ○諸尊 三十七尊。八大菩薩。八大明王。秘事には北斗七星供の鉤召の印には八大菩薩八大明王の眞言。云云 ○世天段常の如し。 ○印 根本の印常の如く(一)大呪を用ふ。瑜祇經の說。 口傳に曰く先づ右の目左の目、右の肩左の肩、次に眉の間よりたてざまに、眉の間をかみざまに之を拭へよ。想へ五眼を成すと。又印を以て兼て眼の明を誦して、右に旋らして面を拭ふこと三返。一切の見る者皆悉く

(一)此の印は云云此は同用法といふ書の頌文なり、不空の譯。同用法とは悉くは一字金輪同用法といふ禪林寺の請來。

(二)三寶院云云勝覺なり。

(一)大呪の時は五眼の印なり以下の小呪の印は一眼の印なり。

歡喜す。師主の口傳究竟の秘事なり。○又の印。小呪を用ふ。金剛合掌して左右の頭指を屈して甲を合せて、二大指を以て二頭指の上之を押す。密印なり。

○小呪に曰く　唵沒馱嚕遮尼、娑縛賀　○勸請の句　本尊界會佛眼尊、八大菩薩諸薩埵　又樣に曰く、佛眼佛母大覺尊、八大菩薩。金剛吉祥佛眼尊、八大菩薩。○梵號　曩謨阿利耶沒馱嚕遮尼　○密號

殊勝金剛　○正念誦眞言大呪又は小呪○加持物小呪○御加持眞言は本尊の呪○伴僧上に同し。

○字輪觀　阿等○諸尊段供物の眞言には普供養の眞言、又は八大菩薩八大明王の眞言之を用ふるなり。口傳に曰く、八大菩薩の印言には、胎藏諸菩薩の印言之を用ふ。八大明王の印言には、胎藏の一切持金剛の印言之を用ふ。金剛部三昧耶の印なり。○本尊加持には金輪の印言。大呪の印。小呪の印。八大菩薩。八大明王。以上の五印は本尊加持の所に之を用ふ。師主の口傳之を受け奉る。

の口傳に曰く、振鈴の前に金剛界大日の眞言を誦し、振鈴の後には本尊の呪を用ふ。秘說

普通には前後共に佛眼の眞言を誦す。」云云　或本に尊像の身は白色にして五智の冠を著し法界定印に住し、白蓮花に坐す。云云　圖に曰く、肉色定印にして蓮花に坐す。文

○尊勝　增益。息災。除病。滅罪。一卷の軌に曰く本尊の像を東の壁に安す。」文　增益なり然りと雖又息災に行ずなり。

○種子ㄅ　○三鈎　○部主　寶生尊種子三摩は金剛界の如し。尊形も亦同じ。小野の說なり。○諸尊　八大佛頂　○(一)本尊印二手合掌して二頭指を屈して甲を相背け、二大指を以て二頭指を押し彈指の勢の如くす、即ち陀羅尼を誦す。此印言は一卷の軌に出す。○根本印　內縛して右の風

(一)本尊印　尊勝印なり。

を鈎す。二卷の軌に之を出たす。但し大呪を用ふ。　眞言　曩莫三曼多沒馱引南引訶啉二合尾枳羅拏半祖鄔瑟二合捉灑、娑縛二合賀此印言は胎藏に出す。或は(一)智拳印陀羅尼を用ふ。禪林寺傳に曰く、智拳印大日眞言を用ふ。文　醍醐の傳に曰く、外五股の印に、歸命阿尾羅吽欠を用ふ。」深秘の說なり。師主曰く、率都婆の印に陀羅尼を用ふ。極深秘の說。○勸請の句　尊勝佛頂轉輪王、八大佛頂諸轉輪　○禮佛の句此次第は(二)先德胎藏に依る乎。

南無怛隸嚕迦、烏瑟尼沙、薩怛他蘖多、三返　南無悉多他半怛羅、烏瑟尼沙、薩怛他蘖多、白傘　南無惹野、烏瑟尼沙、薩怛多蘖多、勝佛　南無尾惹野、烏瑟尼沙、薩怛多蘖多、最勝　南無帝儒羅施、烏瑟尼沙、薩怛他蘖多、光聚　南無尾枳羅拏半祖、烏瑟尼沙、薩怛他蘖多、尊勝　南無吒嚕吽、烏瑟尼沙、薩怛他蘖多、廣生　南無轉嚕吽、烏瑟尼沙、薩怛他蘖多、發生　南無吽惹欲、烏瑟尼沙、薩怛他蘖多、無量　南無金剛界一切諸佛菩薩摩訶薩　南無大悲胎藏界一切諸佛菩薩摩訶薩

○(三)梵號別に在り。○密號　降魔金剛　○正念誦眞言尊勝陀羅尼經疏下卷に出づ師主の說なり。　唵阿密利多、帝惹縛底、娑縛賀　○御加持眞言法務御房。此呪を以て御加持之を勸仕す師傳なり、仍て師主に之に傳ふ。　歸命、訶啉二合尾枳羅拏半祖烏瑟二合捉灑、莎訶　○伴僧は陀羅尼を念ず。　○字輪觀　阿等　○加持物の

(一)智拳印以下外五股率都婆等の印は何れなりとも其の一を用ひて宜し皆用ふるに及ばず。

(二)先德云云八佛頂の次第白傘蓋を始めとするは胎藏の軌の通りなり

(三)梵號　ビキランダハンゾウシュニシャサタヽギャタ

(一)曼荼羅圖之を今略す。

(二)東壁云云是れ此の法には局らず何の法にても掛るが宜し。

(三)五輪塔五輪は陀羅尼の三形にして大日と習ふ、此の五輪は一切の陀羅尼の體なり。

(四)故入道殿故入道とは御堂の關白道長公なり、此の人より御孝ねに由りて仁海注進し玉ふなり。

(五)青色息災に地獄道を治すして青色は蓮部に約して青蓮を尊ぶ故に、又胎藏の色は西方青色なり(六)大三股被甲の印也。

呪には正念誦の眞言を用ふ。○讃四智不動異には此に發願を出す。○(一)曼荼羅圖圖後に曰く、一二等の次第、並に所持は二卷の軌に依りて之を注す。小野僧正は、最勝を始と爲し、廣生を後と爲す。是れ右方より順に廻る次第乎。種字は內供の說に依りて之を注す、本說之を尋ぬべし。(二)東壁に陀羅尼形を畫くは、師主曰く、(三)五輪塔、祕祕の說なり。」

○後夜發願の句此發願は曼荼羅の端にあり。

至心發願	唯願大日	本尊聖者	尊勝佛頂
兩部界會	諸尊聖衆	外金剛部	護法天等
所設妙供	哀愍納受	護摩護摩	薰入薰入
增長增長	恒受恒受	無邊善願	決定圓滿
諸人諸人	天下天下	平等平等	

八大佛頂　諸大轉輪
還念本誓　降臨壇場
護持護持　消除消除
決定成就　殿內殿內

御本曰く建保六年二月十四日遍知院に於て御本を以て書了す。　金剛佛子憲——生年廿七

國譯諸尊要鈔卷七

○(四)故入道殿に六觀音像を注進する事。仁海　○ぞ　大悲觀音とは正觀音の變、地獄道を救ふ。身色(五)青色異には青白なり。左の手に青蓮花を取り右の手は施無畏なり。(六)大三股の印に本呪を用ふ。○𑖩。大悲觀音とは、一千手の變、餓鬼道を救ふ、身色黃金なり。六面慈悲の相、左の手に紅蓮花を取り、右は施無畏なり、(一)蓮花合掌。唵縛曰羅、達麼頡哩。○𑖭(ジリ)。異には𑖭。又は𑖭に作れり。　又は𑖭。師子無畏觀音とは馬頭の變、畜生道を救ふ、身赤色、右手に蓮を取る、蓮の上に梵篋あり、左は施無畏。梵篋印　唵縛曰羅佉、娑縛賀。○𑖮。大光普照觀音とは十一面の變、阿修羅道を救ふ、身肉色、右手に紅蓮花を取る、花の上に花瓶あり、瓶の口に(二)半獨股を立つるなり。左は施無畏、不動の本印異には印を形に作る。なり。唵摩訶波羅多、娑婆賀　○𑖯異には𑖯に造る。天人丈天觀音とは準提佛母の變、人道を救ふ。二小を合せ二無名內に叉へ、二中を立て二頭を中の背に付け、二大を以て二頭の側に付く。唵折隸主隸(シャレイソ)準提(ジュンデイ)、娑縛賀。身色紺青、右に青蓮を取り、左は施無畏○𑖰。大梵深遠觀音とは如意輪の變、天道を救ふ。大三股。頭指寶形の如し。唵紇哩薩、訶波羅、娑縛賀。身色白、左に蓮を持す、蓮の上に三股杵を立つ、右は施無畏。右の六觀音の形色名號此の如し、皆慈悲の相なり、大略は摩訶止觀に出づ、仔細の旨は(三)先師の傳記する所なり。

治安三年三月二十二日(四)權律師以上異本になし。

(一)蓮花合掌此は千手の印なり、此印蓮合して二中の端少し開くなり

(二)半獨股半獨股とは瓶の內へ獨股を入れたるものなり、半は瓶の中にあり、半分は出て見ゆれば是を半獨古と云ふ、半分の獨古とは云ふにはあらず。

(三)先師延命院元杲、仁海の師。

(四)權律師仁海

(一)三障、煩惱、業、苦なり。煩惱とは貪等の三惑、業とは所作の業、苦は所感の苦果をいふ。

(二)秘々四十手の持物事に故形を各々の三摩耶を觀ず、而るに通して寶珠を見れば一切の願を滿ずるに此を秘々といふ。

(三)根本印蓮花五古印と名く、又は蓮花杵の印とも九峰の印とも根本の印と同じ。

(四)師主口傳此の八葉の上に寶珠を觀ずるなり。

(五)又の印上に出す坤本印なり、明海秘藏して示し玉へり。

○聖觀音大慈地獄道の(一)三障を破す。此道は重苦なり。宜く大慈を用ふべし。息災。除病。敬愛

○種子 ぢ ○三摩蓮花 或は獨股 ○部主 馬頭小野 千手三寶院の傳。 ○諸尊 六觀音

又は三十七尊 ○根本の印二羽内に相叉へて拳に作り、蹲踞を以て外に出して直く立つ。 ○眞言 唵阿嚕力迦、娑婆訶

○祕印。二羽外縛二頭指蓮花の形の如くせよ。眞言上の如し。○禮佛の句南無阿利耶縛嚕吉帝、濕婆羅、冒地薩怛縛、摩訶薩埵 ○發願の句 正法金剛 ○勸請の句 大聖慈悲觀世音、蓮花部中諸聖衆 ○正念誦 伴僧。御加持各〻本呪○字輪觀 阿等

○千手大悲、餓鬼道の三障を破す。此道の飢渴宜しく大悲を用ふべし。

○種子 ぢ ○三摩 開敷蓮花 ○祕說寶珠師主口傳に曰く、事に隨て所持を以て三摩耶形と爲すべし。(二)秘々。」 ○部主 聖觀音小野醍醐 又は馬頭小野 ○諸尊 又は三十七尊 ○(三)根本印二手合掌、左右の法名指、頭指の端立て交へ少しく屈す、二七指蓮葉の如く圓にし、二小指二大指張り立つ即ち成ず、師主に之を受く。

○又の印 八葉蓮花の印、小呪を用ふ。(四)師主口傳 ○(五)又の印 三寶院權僧正の傳。師主の秘說なり。謂く蓮花五股の印と名づく。先づ二手合掌、左右の二無名指二頭指外に縛して二中指を立てよ、二小指二大指開き張り立つ、即ち成ず。

此印には陀羅尼を用ふ。陀羅尼は別にあり梵字なり。 ○禮佛の句囊謨沙訶沙羅布慈阿利也縛路吉帝濕婆羅。 ○發願の句 大悲金剛 ○勸請の句 千手千眼觀世音、蓮花部中諸聖衆 ○正念誦小呪 伴僧並に御加持

(一)赤色の紙此は敬愛に修する時の事なり

(二)頂上に置く自身十一面と觀ずるなり

陀羅尼 ○字輪觀 阿等 師主口傳に曰く、散念誦には尤も毘沙門の眞言加誦すべし。又曰く

(一)赤色の紙を以て八葉蓮花百八枚を造りて本尊壇に之を燒く。文

○馬頭師子無畏は畜生道の三障を破す獸王の威猛宜く無畏なるべし。

○種子 ぢ又は ○三摩 白馬頭 ○部主 聖觀音 ○諸尊 六觀音 又は三十七尊 ○根本印二手合掌、二頭指二無名指、屈して掌に入れ各〻相背け、二大指を並べて微しく屈して頭指に著くること勿れ。 ○眞言 唵阿密哩二合都納婆二合縛吽發吒、娑縛賀 ○勸請の句 馬頭觀音大悲尊、蓮花部中諸聖衆 ○禮佛の句囊謨阿利耶賀耶枳里波、冒地薩埵訶薩怛縛。 ○發願の句 嗽食金剛 迅速金剛 ○正念誦。本呪 伴僧。並に御加持上に同し ○字輪觀 阿等

○十一面大光普照は、阿修羅道の三障を破す、其の道猜忌嫉疑、偏に普照を用ふ、經は二臂、軌は四臂。 ○種子 ぢ又は ○三摩 軍持 ○部主 聖觀音小野醍醐 又は馬頭小野 ○諸尊 六觀音 又は三十七尊

○根本の印二手右左を押し、相叉へ合掌して印を以て(二)頂上に置く。師主の口傳に曰く、此印は深く叉る是れ秘秘の說なり。 ○又の說 開敷蓮花の印

○眞言に曰く 唵那羅那羅地理地理度嚕度嚕壹知縛知者隸者隸鉢羅捨隸矩蘇咩矩蘇摩縛隸壹里弭里止里止里致惹引羅摩跛曩也跛羅摩秫駄薩怛縛二合摩訶迦嚕尼迦、引娑婆賀

○小呪 唵嚕係濕縛羅紇哩、娑婆賀 ○禮佛の句 囊謨阿利耶壹迦娜舍目佉 ○發

願の句　變異金剛　○勸請の句　大聖慈悲十一面、蓮花部中諸聖衆　○正念誦の呪。小呪　○御加持眞言　○伴僧　敬禮聖智海。等　○字輪觀　阿等

○○準胝天人丈夫は人道の三障を破す。人道に事理あり、事は憍慢を伏し、丈夫は理は則ち佛性を見る、故に丈夫と稱す。丈夫と稱す。息災。延命。除病。師主口傳に曰く、求兒に此法を修す。文保元四年三月十八日之を始行す、百箇日。等身の像。師主手替を勤む。三日十八臂。以上異本になし。

○種子ｷﾘｰｸ　○三摩甲冑。又は五股。小野或は賢瓶　○部主　大日胎藏。師主の說　馬頭　正觀音

○諸尊　六觀音　又三十七尊　○根本印二地二水交へて掌に入れ、二中指直く立て、頭しを著げ、二風を屈して火の上節の側に著け、二空風の側に著く。

○秘印　外五股の印　內三股の印但し二左風の側に著く。　曩謨薩怛縛南、三藐三沒駄倶底南怛爾也他、唵折隸主隸準提、娑婆賀　○勸請の句　準提佛母摩訶薩、如來部中諸聖衆。○禮佛　曩謨阿利耶沒駄縛佉縛底　○發願の句　最勝金剛　○正念誦眞言小呪　○御加持。並に伴僧本呪　○字輪觀　阿等

○○如意輪大梵深遠は天道の三障を破す。梵は是れ天主、主を標して臣を得るなり。息災增益敬愛。師主曰く、六字章句陀羅尼は觀音經の所說、止觀に依らば六字は卽ち是れ六觀音の釋、是れ皆六觀音を稱ぐ」小野僧正は、準提を以て不空羂索を取らず、此の說を仰ぐべし」云云。八家秘錄は、準提を以て觀音の部に出さず」云云　以上異本には而も麁書にして奧にあり。

○種子、ｷﾘｰｸ　○三摩、金剛寶蓮師主深く秘して曰く、紅蓮花の上に寶多摩尼寶を置け」云云　不空の軌に曰く、月の上に八葉の蓮花あり、上に如意寶珠あり、紅頗梨色の如し、赫々たる光明無量世界に至る、光明の中に於て、自身本尊の像と想へ」云云。

○部主　聖觀音小野醍醐　馬頭小野　○諸尊　六觀音、又は三十七尊　○根本印平掌心に當て忍願蓮葉の如し、進力摩尼の形ち、餘度盡く輪の如し、陀羅尼を用ふ。　眞言　娜謨、囉怛娜怛羅夜也、娜謨阿唎耶縛魯枳帝、濕縛羅耶菩提薩怛縛耶摩訶薩怛縛耶、摩訶迦嚕捉迦耶怛姪他、唵斫迦羅軍弾舌低震跢摩捉、摩訶鉢頭迷嚕嚕底瑟吒、入縛羅阿迦哩灑耶、吽泮吒、薩縛訶　○心秘密印前の根本の印に依て、戒方檀惠を縛せよ、一切意願、心の所念に應じて皆悉く成就を得。　眞言　唵鉢頭迷合震跢摩尼入縛攞吽　○隨心印二手堅固縛、進力摩尼の形ち、禪智竝べて而も申ぶ、戒方亦た舒べて直くす、檀惠相ひ交へよ。　心中眞言　唵縛羅娜鉢頭迷合二吽　師主口傳の秘印に曰く、八葉蓮花の印の上に寶珠を觀ず。」眞言は心呪之を用ふ。

○勸請　大聖如意輪觀世音、蓮花部中諸聖衆　○禮佛曩謨阿利耶曩多摩尼、冒地隆怛縛摩訶薩怛縛。　○發願　持寶金剛　○正念誦心中呪　○御加持並に伴僧大呪　○字輪觀　阿等

建保六年二月十三日遍知院に於て御本を以て書き了んぬ。

金剛佛子　憲——生年二十七

國譯諸尊要鈔卷八

○○不空羂索二臂（經の二）四臂（經十五卷）三面六臂（經の八）三面十臂十一面廿二臂（經十三卷）十八臂（經の二十）　○種子ｷﾘｰｸ　○三摩羂

(一)根本印　此印は千手軌の說なり此の明は經の第二卷に出たる眞言なり。

(二)理谷の傳　大理趣房と大谷の覺俊の傳となり。

(三)唵阿暮伽云云　此の眞言は不空奮怒王の眞言なり。此の眞言に不動、獨股の印を用ふ、此の印と此の眞言とを用ふるは不空羂索と同體にしてと不動と奮怒王は不空羂索の使者なり、又釋迦と奮怒王とも同體なり。

(四)彼なり　彼れとはヲンアボキヤヒジヤヤの呪をいふ。

(五)大自在天　自在天に八臂ある故なり。

(六)寶志和尙　宋高僧傳第三に委し

索　○部主馬頭　又は正觀音　○諸尊三十七尊　又は六觀音　○(一)根本印

二手蓮花合掌、進力禪智金剛縛、右の手禪度左の手虎口の中に入る、(二)理谷の傳皆之に同じ但し之を用ひず、是れ師の說なり　○眞言に曰く　唵跋都麼達麼阿謨迦惹野寧素嚕、素嚕、娑縛賀　異本に曰く、經の第二卷に出づ。　○不空羂索心眞言　三卷の不空羂索經上には不空陀羅尼自在呪と名く、類秘鈔に、有るが曰く、此の呪を以て決定成就眞言と名く」文　唵阿謨伽、波羅底訶帝、莎訶。師主曰く、蓮花の印を用ふ、謂く蓮花合掌なり。

○隨作事成就の呪　不空羂索自在王呪經上卷に出づ。云云　(三)唵阿暮伽毘閣耶訖泮吒　加持物に之を用ふ。　何事を成すに隨て、若し此の呪を誦すれば悉く皆成就す。師主口傳に曰く、今此の呪には不動獨股の印を用ふ　秘秘說　此の法は衆物に此の印を以て之を加持すべし。凡そ小呪に皆蓮花の印を用ふべし、若し怨家を破壞せんことを得んと欲はゞ、木に彼の形並に名字を畫き、脚を以て之を踏んで加持すべし、印眞言は(四)彼なり。○八臂の像　通用玄非の課經に曰く、觀自在菩薩を畫作せよ、大自在天に似たり」經の一に流志の曰く、法の如く不空羂索觀世音菩薩を圖畫せよ、(五)大自在天の如し」云云　十一面經疏溜淵に曰く、不空羂索經に曰く、是の觀自在菩薩は乃ち八手を現じて而も鹿皮を被むる。」又曰く、千手千眼大自在王、十一面觀自在菩薩、此の菩薩或は大自在天の身を現ず、故に此の身を現ず。文　師說に曰く、(六)寶志和尙不空羂索の身に現ずるに八臂あり、南圓堂の像も亦た然なり、近代世間に畫作する所も皆八臂なり　寶志遷化の時、六觀音の身を現ず、彼の傳を見るべし。

○勸請の句　不空羂索大聖尊、蓮花部中諸聖衆　○禮佛の句　南無阿利耶謨伽波奢　○發願の句　等引金剛　○正念誦眞言、成就の呪　○御加持、並に伴僧。

○字輪觀、阿等　觀世音菩薩、不空羂索の神呪を說く時此の形を現じたまふ故に、不空羂索觀音と名く。經に曰く、身に衆病なく安穩快樂にして、一切の惡鬼一切の怨家速かに滅して來らず、壓魅呪咀身に著かず、諸善神常隨衛護し、福壽增長所作皆成ず」云云　南圓堂の樣　別にあり　但し一面三目八臂なり、先づ二手を心に當つ　蓮合　次の左の手には索、右の手には白拂、次の左の上に(一)蓮花、右に錫杖、次の左の下は施無畏か　或る本には軍持　右は與願か。又次に一面四臂、第一の二手は說法、次の左には索、次の右には軍持なり。次に又三面六臂、左の第一には蓮花、第二には索、第三には三戟叉、右の第一には瓶、第二は施無畏、第三は手を揚ぐるなり。又秘本は　別にあり

○葉衣觀音　(二)圖に曰く、肉色左の手垂れ下して索を持す、右の手乳に當て如意幢を持す、左の膝を立てゝ赤蓮花に坐す」云云　或る本は白蓮花に坐す」云云　葉衣觀自在經に曰く、左の手に羂索を持し、右の手施願を仰ぐ、或は吉祥菓を持す。　○種子　　○三摩、吉祥菓　又は鉞斧、又は未敷蓮花、又は羂索　○部主　聖觀音　○諸尊　六觀音　○印　八葉の印　師說　○(三)通印、合掌　右、左を押す是なり　眞言　唵鉢羅二合拏捨

(一)蓮花　此の處に三葉蓮花の圖あれども之を略す。

(二)圖に曰く　此は石山の圖位なり醍醐の像は四臂なり。

(三)通印合掌　金剛合掌なり、此は一切の佛菩薩に通ずる故に通印といふ。

縛里吽發吒　○勸請の句　本尊界會觀世音、蓮花部中諸聖衆　○禮佛の句　曩謨阿利耶波羅拏奢縛里　○又說の句　曩謨阿利耶波麗奢縛里　○發願の句　異行金剛　○正念誦眞言本呪　○御加持並に伴僧同上　○字輪觀　阿等　○鎭の法別にあり

◎白衣觀音息災　○種字　ㄅ　○三摩　白蓮花小野　○部主。聖觀音、又は馬頭

○諸尊六觀音又は三十七尊　○印　金剛合掌　○眞言　曩謨囉怛曩二合怛羅夜引二合野曩莫素摩薩羅縛諸乞灑二合怛羅二合遲惹野者都地波阿去引路迦羅野怛儞也他、唵弩摩底跛拏摩底薩賓上儞佉細、娑縛賀　○或說　種子ㄅ　○三摩(一)鉢曇摩花　○部主　聖觀音

○諸尊　六觀音　○印　內縛、二頭指圓に相ひ拄ふ十一面軌中卷に出づ　眞言　唵濕吠帝濕吠帝半拏羅縛引悉儞、莎訶同軌に出づ　○禮佛の句　南無半拏羅縛悉地同軌下卷に出づ　○發願の句　離垢金剛　○勸請　本尊界會白衣觀音、蓮花部中諸聖衆　○正念誦本呪　○御加持並に伴僧上に同じ　○字輪觀阿等

御本に曰く、指したる儀軌次第なし、或る說には葉衣觀音を以て即ち白衣となす。」或る說に蓮華部母に用ふるは卽ら是れなり「不空羂索經八に曰く、白衣觀音或る師は白處尊を以て白衣となす。」

(一) 鉢曇摩花此は白蓮花なり、然れども紅白相通ずる事あるなり。

母菩薩は、左の手脇脞の上に搏げ、掌を仰けて不開蓮花を執り、右の手掌を側め揚げて半跏趺坐す。」云云　如意輪經に曰く、白衣觀世音母菩薩。」云云　第九に曰く、白衣觀世音母菩薩は、左の手に開蓮花を執り、右の手臍下に仰け伸べて半跏趺坐す。」云云　又曰く、白衣觀世音母菩薩は、左の手に蓮花を執り、右の手脞の上に仰け伸べて半跏趺坐す。」云云　第二十二に曰く、次に半拏羅婆徒儞白衣觀世音菩薩は、手に蓮花を執る。」云云　胎の軌に曰く、白處尊は髮冠純白を襲へり、鉢曇摩花の手なり。」云云　大日經疏第五に曰く、半拏羅縛悉寧、譯して白處といふ、此の尊常に白蓮花の中に在すを以ての故に以て名となす。また天の髮髻冠を戴きて純素の衣を襲す、左の手に開敷蓮花を持し、此の最白淨處より普眼を出生す、故に此の三昧を名けて蓮花母となす。文　或る師曰く、白處は白衣是れなり、唐の摺本に寶冠の上に白き繒を覆ひ、左右の端肩の上に垂る、不空羂索經の第八●九●二十二●三十を檢知するに、並に白衣觀世音母といふ。又皆半拏羅婆徒儞の句あり。又十一面の軌、白衣の眞言に半拏羅縛悉儞の句あり、而して大日經疏に曰く、半拏羅縛悉寧、白處と譯す。文

◎大白衣　○種子　ㄅ　○三摩　開敷蓮花　○部主　聖觀音　○諸尊　六觀

音　○印二手内に相ひ叉へ、逆力二度合せ竪て微しく開き、禪智竝べ立つ。　○眞言　唵摩訶鉢頭迷濕廢謨倪虎嚕虎嚕、娑婆二合賀　○又た曰く　曩莫三三曼多沒駄南薩、娑婆賀　○禮佛の句　阿梨耶豪黎阿微地也　○發願の句　放光金剛　常淨金剛

◎多羅菩薩　○種子　ｱ　○三摩　青蓮花已に開き却て合す　○部主　正觀音

○諸尊　六觀音　○印　二手内縛して、進力並べ申べ合せ拄へ、禪智並べ立つ。

○言　唵多利咄多利咄唎、娑縛賀　○禮佛の句　曩謨阿利耶多羅　○發願の句

悲生金剛　○正念誦本呪　○御加持並に伴僧同上　○字輪觀阿等　以上多羅法端にあり重出無用か、隨て又の御本に之なし。

◎(一)毘俱胝　○種子　ｱﾞ又は毘里　○三摩　數珠鬘　○部主　聖觀音　○諸尊

六觀音　○印　多羅の如し、但し二風交へ竪つるなり。　○言　唵娑羅娑羅惹曳、

娑縛賀　○禮佛の句　阿利耶毘哩俱胝　○發願の句　降伏金剛、定惠金剛、除障

金剛　○正念誦本呪　○御加持並に伴僧上に同じ　○字輪觀阿等

◎滅惡趣尊北に向て之を修す、滅罪　○種子　ｱﾝ　○三摩幢　寶珠　○部主　尊勝　○諸

尊　三十七尊　○印(二)鉢の印の言　訶訶訶素多睹、娑縛賀　○根本印　定惠を拳に作

(一) 毘俱胝　梵語忿怒尊なり　觀音額のシヤより生ずること大日經疏に見えたり、三目四臂の尊なり。

(二) 鉢の言　飲食の印なり地藏と同體なり。

り二中指を開き竪つ。　○眞言に曰く　唵訶訶訶、尾三摩曳、娑縛賀　口傳に曰く、

幢菩薩の印之を用ふ、金剛界の眞言(一)本呪なり。　○正念誦の呪　、曩莫薩摩吒沒駄南、

阿弊の反毘庾多羅二合尼、薩怛縛二合駄敦、娑縛賀　○勸請の句　本尊界會地藏尊、寶部會中

諸聖衆　○禮佛の句　阿利耶乞叉底蘖婆　○發願の句　悲願金剛　○加持物　胡

麻　○藥種　枸杞

保元四年正月三十日より始め、五七日此の法を勤修す、之れ美福門院、鳥羽院御祈

に之を修せしめ御す者なり。

◎(二)圓滿金剛法　增益、聖賢闍梨の說　○種子　そ　○三摩　甘菓を器に盛る　○印言　胎藏

の如し　右の手掌を仰け、忍度と禪度とを屈して相ひ捻す、餘度皆舒ぶ。　唵婆去誐縛無可丁以の反娜引曩地跛帝尾沙嘌二合惹引布羅野

娜引難、娑縛賀

此の印を結び眞言三返を誦するに由て、即ち無量劫慳悋の業種を滅して、三種の施

福を獲得す、謂はゆる資生施、無畏施、法施なり、即ち檀波羅蜜圓滿して、現生には

富饒を獲得し、資緣具足して心に自在を得、壽命長遠なり　千手の軌之を見るべし

○秘說に曰く、種怛洛　○三寶珠　○印言前の如し。　御本に曰く、建保六年

(一) 本呪　滅惡趣の眞言のこと。幢菩薩の印は外縛して二風二地二水立て合すなり、此れ金剛界幢菩薩の印なり。

(二) 圓滿金剛法は增益に修す、別して五穀豐饒の爲め、惣じては富貴を祈るに之を修す。

(一)不動　此の次第は別行を本となし、兼ねて連壇を明す故に八千枚等を出す。

(二)外五股の印　此れ秘印にして即ち五鈷の印なり、調伏五壇の時阿闍梨是非共に此の印は結はざれば叶はずと。

(三)三摩耶　此も秘鈔に出づ、此の印に慈救呪を用ゆ、小野の秘説なり、此の後入唐の傳法三の宮之を傳ふ、廣澤方には内縛二小を開立つ、然れども小野醍醐に二小縛を開き立つ、右師説なり。

(四)兼林　兼は成蓮房、兼意にして廣澤方、林は高野山琳賢なり。

國譯諸尊要鈔卷九

○(一)不動息災調伏

○種子　○三摩　智劍　○又の説　○三形　索　○勸請の印本印　又は大鉤召　○或説法三御子の傳。秘秘の説。　○三形　俱力迦羅　○部主　降三世　○諸尊段　四大明王　○正念誦　慈救呪　○御加持　慈救呪　○加持物の呪　一字の明　○根本の印獨股の印なり　火界の呪　○劍印　慈救呪　○(二)外五股の印慈救呪異に無し　○(三)三摩耶、攝召の印言異に無し　○又の印　口傳に之在り。　○勸請の句　本尊聖者不動尊、四大八大諸忿怒　○禮佛の句　大聖不動威怒王　○梵號　南無阿里耶阿遮羅曩駄微地也囉惹　○密號　常住金剛　○五大尊召請次第　金剛藥叉降三世　北　本尊　大威德　軍荼利

師主口傳に曰く、五大尊調伏に行ずる時は、三摩形皆智劍なり、又た通じて慈救呪を用ふ。」　○五大尊を攝する事(四)兼林二説之に同じ(異)　曩莫三曼荼縛曰羅二合赦戰拏、北方金剛藥叉。暴惡　摩訶引嚩灑拏、東方降三世。忿怒　娑頗二合吒耶、南方軍荼利恐怖主　吽　怛羅吒西方大威德　唅　鑠中方不動能成事業　三三摩耶攝召の印

言に曰く、師主の説なり謂く三三摩耶とは是れ底哩三昧耶なり、梵には底哩と曰ひ唐には三と曰ふ、梵には三摩耶と云ひ唐には平等と曰ふ、今三三摩耶攝召と曰ふは、大日經に準ずるに、初發心より乃し成佛位に至るまで、常に三つの法成就有り、一には除障相應、二には相續不斷、三には究竟成就なり、亦三身三寶三事を證す、初後平等の故に三平等法と名づく、若し此三平等を具足せざれば則ち障起有り、間斷して三事を成就せざれば菩提に至らず、故に此法の中に是の三三摩耶攝召の印明を以て、初發心より乃し成佛に至るまで、明王を攝召して永く捨離せずして、纔に印明を結べば長く成就を得、其の印明は、金剛堅固にして内に相ひ叉へ、檀惠竪て開いて生ずる所の印なり、此の印を名づけて功德の母と爲す、佛法僧寶其の中に住す明に曰く　曩莫薩縛沒駄母地薩怛縛二合南、阿莽羅尾迦羅多、帝爾儞阿羅逝娑婆二合訶　善無畏曰く、此の三三昧耶は、除障相應、相續不斷、究竟成就なり、是れ大日經三句の法要、菩提心爲因●大悲爲根●方便爲究竟の義なり。文師主の口傳此の印を受けて曰く、二手金剛外縛して、左右の二小指之を立て、大指をば並べて内に之を入る。」異本には此口傳無し。

○(二)八千枚乳木之を燒く事　先づ三春最初甲子の日、木を取る、若し急に之を修す可

(一)八千枚　此の作法に當流と作法の別あり、當流にては千枚了りて加持物を供ず修寺は千枚の次に飯食等之れあり、又例の百枚を用ゐず、當流には八千枚の前に例の百八千枚常の如く燒く なり。

(一) 八指　一指を七分として五寸六分なれども今は六寸にして用ふ。

(二) 百八支云云　此の方は是は例の百八支を燒き了りて千枚を燒く、第二度よりは千枚許りなり。

らずんば、件の日之を取り初め置き、殘るに至らば日時を論ぜずして之を取るも、咎無し、長さ(一)八指に但し師說は八寸なり。之を削る、正しく之を燒く時千枚之を燒き了る、次に小杓を以て三度飯雜供を供し、次に芥子一度之を供す、此の如く一返了つて又千枚を燒く、飯芥子前の如し、此の如くして八箇度に之を燒く、芥子の返數多少は任意なり。師說に曰く、千返を以て吉と爲す。文　本尊段の百八支は乳木の所にて之を燒く、例の(二)百八支は之を用ひず、前供養以後、讃、普供養、三力、祈願、禮佛、以上異本に無し。次に十四根本の印言、次に十九布字、次に佛眼印明、次に本尊印明、次に入我我入觀、次に本尊印明、次に正念誦等常の如し。　口傳に曰く、振鈴の後、率都婆の印眞言、一字の明、次に法螺の印二手三補吒して、二空を改めて風火の間に出だす。　眞言に曰く　曩莫三曼多沒馱南、暗○次に理供養印明等常の如し。　定印を結んで本尊觀に入れ、其の眼眠るが如く少し許り開て視る是れ入定の相なり、火生三昧に入れ、自身無動尊と成る、謂く本尊と我と一體無二なり。　一には、此の尊は大日の化身　花臺にして久く已に成佛す、本願を以つての故に如來の使者と爲つて、諸の正務を執持するなり。　二には、明の中の阿嚕含𤚲の四字なり。三世の諸佛皆此の四秘密より三身を應現して菩提樹下に降魔して成佛す、是れ寂滅の定にして不動の義なり。　三には、常に火生三昧に住す。覽字の智火を以て、一切の障を燒いて大智火と成す。　四には、童子の形

(一) 肥滿　此は一切衆生の惡業煩惱を噉食するが故に卑しく肥え玉ふなり。

(二) 左の一目　此れ大日經の說にして釋迦不動なり。

を現して、身卑く(一)肥滿せり。上み佛勅を承て行者に給使す、下も衆生を化して、雜類の者を接持することを表す。　五には、頂に七莎髻有り。七覺分の法を轉ずることを表す。　六には、左に一の辮髮を垂る。一子の慈悲を垂ることを表す。　七には、額に皺の文有り、形ち水波の如し。六道を憶念し趣に隨つて多思なることを表す。　八には、(二)左の一目を閉ぢて、右の一目を開く。左道を掩蔽して一乘に入らしむることを表す。　九には、下の齒上の右の唇を喫ひ、下の左の唇は外に翻し出す。慈悲の力用を以て魔羅を怖れしむることを表す。　十には、其の口を緘閉す。衆生の生死、戲論の語風を滅することを表す。　十一には、右の手に劒を執る。衆生現在の、三毒の煩惱を殺害することを表す。　十二には、左の手に索を持す。不降伏の者を繫縛し利惠の劒を以て、惑業を斷じ、引て菩提に至らしむることを表す。　十三には、行人の殘食を喫ふ。衆生の未來無明の習氣を噉盡することを表すなり。　十四には、大盤石に坐す。衆生の重障を鎭めて、復た動ぜざらしめ、淨菩提心を成し、妙高山王の如くならしむることを表す。　十五には、色醜く(一)青黑なり。無明を調伏することを表す。　十六には、奮迅忿怒。威猛の相を表す。　十七には、遍身に迦樓羅焰あり。智火の金翅鳥王、惡毒有情の龍の子を噉食することを表す。　十八には、變じて俱力迦羅大龍と成つて劒を繞ふ。智火の劒を以て、九十五種外道の龍火を、摧滅することを表す。　十九には、二童子に變作して、行人に給使す。一は矜迦羅と名づく、恭敬小心の者の正道に隨順する者に表す、二は制吒迦と名づく、恐語惡性の者の、正道に順せざる者に表す。　十九布字觀は定印なり、此の眞言の末に各〻種子十九を之を加ふるなり。

曩莫薩縛怛他蘖帝毘藥、二合薩縛目契毘藥、薩縛他、引唵婀左羅賛拏嵐、頂歸命(一)、頭

(一)智劍五段の時には五大尊共に智劍を三形となす次の三明王も同じ

(二)外五股印三形なり。師主口傳に曰く、先づ二手各大谷覺俊は別して金剛界の如し當流には尊ぶなり

歸命ん、垂髮　歸命ぎ、額　歸命ね、先右耳次左耳　歸命ぞ、右眼　と、左眼　歸命ゑ、鼻　歸命こ、口　歸命ん、舌

歸命ぎ、兩肩　歸命ぎ、喉　歸命ち、兩乳　歸命ぎ、心　歸命と、臍　歸命で、兩脇　歸命と、腰　歸命ぞ、兩膝　歸命ん、膝　歸命ん、兩足

○十四根本の印別にあり　左脇降三世、金剛藥叉、右脇軍陀利、大威德此一行異本に無し　○鎭の法別にあり

○降三世四面八臂

○種子　ह　○三　五股　秘(一)智劍　○部主　不動　○諸尊　四大尊　○根本の印二羽忿怒拳、檀惠背け鉤結し、進力二度背け立つ　○又の印　(二)外五股の印　師主口傳に曰く、先づ二手各〻膝の上に覆せて、次に各〻仰けて後ち、例の印の如く之を結ぶ、究竟の秘事なり。」大谷覺俊の傳なり。　眞言に曰く　唵蘇婆儞蘇婆吽蘖哩二合訶拏蘖哩訶拏吽蘖哩訶拏婆耶吽阿曩野斛引婆誐梵縛曰羅二合吽泮吒　○正念誦　本呪　○伴僧並に御加持の呪上に同じ。　○勸請　本尊聖者降三世、四大八大諸忿怒曰羅　蘇　婆　儞尾　儞耶　囉惹　○發願　最勝金剛　○字輪觀　阿等　○五重結護別にあり

(一)軍荼利八臂なり、常には六臂なり。

(二)ह西方の教令輪の故なり。

(三)心中心印此の印明は惡夢の時結誦して宜し。

○(一)軍荼利一面三目、上の齒は下の脣を喫ひ、上の牙下に向ふ、頂上に髑髏有り、八臂第一の兩手相ひ交へて前に在り、右の第二は三股斧、第三は掌を垂れて外に向ふ、第三は前へに屈して拳にして頭指を舒ぶ、第四は上に屈して五股、左の第二は三股鉾、第四は金剛輪、左の足膝屈して引き擧け、右の足直くして蓮を踏む、過身に蛇有り。」道場觀は四臂四面なり

○種子　ह　○三摩　三股　智劍　○部主　不動　○諸尊　四大明王　○根本印二羽各〻三股の印に作り、右左を押し腕を相ひ交ゆ。　○眞言に曰く　阿蜜利帝吽發吒　○又た根本の印內三股印　○眞言に曰く　曩謨囉怛曩怛羅二合夜也曩摩室戰二合拏摩訶縛曰羅二合俱路二合駄也唵戶嚕戶嚕底瑟吒底瑟吒滿駄滿駄賀曩賀曩阿密利帝吽發吒此印明は本儀軌の說なり。　○正念誦本呪　○伴僧並に御加持同上　○勸請　甘露軍荼利大明王、四大八大諸忿怒阿等　○禮佛　南無縛曰羅軍荼利、毘地耶囉惹　○發願　甘露金剛　○字輪觀

○大威德

○種子　(二)ह　○三摩　棒　智劍　○部主　不動　○諸尊　四大明王　○根本の印二手內に相ひ叉へて拳に作り、二中指を竪て相ひ合はす、本尊の身に同じ。」大呪を用ふ。　○心印前の根本印の如し、二頭指を舒べ屈して、火の背に當てて、相著けず。所作の事業速に成就す。眞言に曰く　唵紇哩二合瑟室利二合尾紇哩二合多引娜曩吽薩縛二合設吐論二合娜捨也薩擔二合婆也四合薩擔婆也娑發二合吒娑發吒、娑縛賀　○(三)心中心印前の心印

の如し、但し二風直くして火の背に相ひ著けず。　唵悉致利迦攞嚕跛吽欠、娑縛賀　師主の口傳に曰く、本と三摩耶形は棒を横に伏て、其の上に劍を立てて之を觀ず、究竟の秘といふなり、(一)定印に住して先づ頂上に唵字、口の上に惡字、腰の上に吽字之を觀ずべし秘秘なり。」云云

(一)定印に住す之は惡夢の時布字觀に行ず可し、薄雙紙に委し。

○勸請　焰鬘特迦大明王、四大八大諸忿怒　○禮佛　南無縛日羅焰曼德迦、毘地耶囉惹　○發願　持明金剛　○字輪觀　阿等

◎金剛藥叉三面、正面は五目、左右の面は各〻三目、三面皆口を開く、上の唇に牙有り、六臂右の第一の手には五股を執り、第二には箭、第三には劍、左の第一には鈴、第二には弓、第三には金剛輪、左の足直くして蓮を踏み、右の足引き擧て蓮を踏む、敬愛に之を修す。　○種子　ह　○三摩　羯磨輪　智劍　○部主　不動　○諸尊　四大明王　○根本の印二無名指中指内に相ひ叉へ、二小指曲げて鉤の如くし、進力及び禪智曲げて笑眼の如くせよ。　○眞言に曰く　唵摩訶藥叉縛日羅二合薩怛縛二合弱吽鑁斛鉢羅二合吠捨吽　師主口傳に曰く、種子　ह　三摩　智劍　○印言　金剛合掌を用ふ。秘秘說也　唵吒枳吽、娑破吒二合鉢羅二合吠捨耶吽發吒引　○勸請　金剛藥叉大明王、四大八大諸忿怒　○禮佛　南無縛日羅藥叉、毘地耶囉惹　○發願の句　○字輪觀　阿等　○二十五輪別にあり　御本に曰く、建保六年二月十二日遍知院に於て御本を以て書き了る。

金剛佛子憲——生年廿七

◎北斗法

第一貪狼星。子の年の人を護ぼる、黍・桐を主る、米麥粟。　第二巨門星。丑亥の年の人を護る、粟・槐を主る、ヤマタチバナ橙　第三祿存星。寅戌の年の人を護る、稻・楡を主る。麥　第四文曲星。卯酉の年の人を護る、麻・棗を主る。桑　第五廉貞星。辰申の年の人を護る、麥・桑を主る。　第六武曲星。巳未の年の人を護る、小豆杏を主る。小豆異には杏　第七破軍星。午の年の人を護る、小豆杏を主る。麻の子　○主色　貪黑青赤　巨白黑青　祿同上　文同上　廉同上　武赤黃白　破同上　○(一)七曜の精　貪は日の精、或說は月　巨は月の精。或は水　祿は火の精。或は金　文は水の精。或は土　廉は土の精。或は水　武は木の精。或は火　破は金の精。或は日

○東方七佛の變北斗延命經に出づ。　貪最勝世界運意證佛　巨妙法世界光音自在佛　祿圓滿世界金色成就佛　文無優世界最勝吉祥佛　廉淨住世界廣達智辨佛　武法意世界法海遊戲佛　破瑠璃世界藥師瑠璃光佛

○七つの當て處ろ　貪、左の目に當つ。或は額。左眼。　巨、右の目に當つ。或は面　祿、口に當つ。或は左眼　文、鼻に當つ。或る說無し　廉、左の耳脾に當つ。或は左眼　武、右の耳脾に當つ。或は口　破、主る肝に當て。或は項異には項　○二十八宿に配す。　貪室壁奎婁　巨胃昴畢觜　祿參井鬼柳　文星張翼軫　廉角亢豆房　武心尾箕斗　破牛女虛危　○(二)指尾の方　正月。戌の時は寅。亥の時は卯。子の時は辰。丑の時は巳。寅の

(二)指尾の方此は破軍星の方なり此の星は劍先の星なり、十二時に廻る。指尾の法として香藤寺の寬空の作あり。

(一)虛空に現する形。此の下七星の圖あるも之を略す。蓋し七星は七佛の所變。

(二)九曜とは日曜云云　九曜とは日は東より出づれども丑寅は物の初めなる故に丑寅を指し、月曜は此は物の收まる方なる故に戌亥とす。

(三)大白星。此れ宵曉の明星。

(四)鎭星。諸星を生ずる星。

(五)羅睺。幡雲といふ、災も此の星の業なり。

(六)豹尾。彗星といふ。

(七)降下の日。此は諸星の下り玉ふ日なり。

(八)月の一日の宿。是れ毎月朔日の宿なり此より換れば知るといふ事なり

時は午。卯の時は未。　二月。戌の時は卯。卯の時は申。　三月。戌の時は辰。卯の時は酉。　四月。戌の時は巳。卯の時は戌。　五月。戌の時は午。卯の時は亥。　六月。戌の時は未。卯の時は子。　七月。戌の時は申。卯の時は丑。　八月。戌の時は酉。卯の時は寅。　九月。戌の時は戌。卯の時は卯。　十月。戌の時は亥。卯の時は辰。　十一月。戌の時は子。卯の時は巳。　十二月。戌の時は丑。卯の時は午。

○(一)虛空に現する形。　○(二)九曜とは。又は九執と名づく。是れ當年屬星。並に本命曜を曰ふ。

一には日曜。又は大陽と名づく。丑寅の方。　二には月曜。又は大陰と名づく。戌亥の方。　三には火曜。南方又は熒惑星と名づく。　四には水曜。又は辰星と名づく。北方。　五には木曜。又は歲星と名づく。東方。　六には金曜。又は(四)太白星と名づく。西方。　七には土曜。又は(四)鎭星と名づく。中ちの方。　八には(五)羅睺。又は黃幡と名づく。丑寅の方。　九には計都。又は(六)豹尾と名づく。未申の方。

○或次第に曰く、火曜は是れ大將軍と名づく、水は是れ北辰、木は是れ帝釋、金は是れ增長天、計は是れ閻羅王、又云く、日は是れ歲德、水は歲刑、木は歲殺、土は歲破、羅睺は阿修羅」云云

○本地　日は觀音。(或は虛空藏)　月は勢至。(或は千手)　火は寶生佛。(或は阿嚕迦觀音)　水は微妙莊嚴身佛。(或は水面觀音)　木は藥師佛。(或は馬頭觀音)　金は阿彌陀佛。(或は不空羂索)　土は毘盧遮那佛。(或は十一面觀音。)　羅は毘波尸佛。計は不空羂索

○(七)降下の日、並に衣色　日、二十七日、白衣　月、二十八日、白衣　火、十九日、赤色　水、二十一日、黑色　木、二十五日、青色　金、十五日、白色　土、十九日、黃色　羅、八日、青色　計、十八日、

○(八)月の一日の宿(ヒトヒ)(餘は之を以て廻らし數へて之を知るべし。)

室(正月一日)　奎(二月)　胃(三月)　畢(四月)　參(五月)　鬼(六月)　張(七月)　角(八月)　氐(九月)　心(十月)　斗(十一月)　虛(十二月)

○十二神七曜住(異には住を經に作る。)

師子(亥日)　雙女(戌水)　秤(酉金)　蝎(申火)　弓(未木)　摩蝎(午土)　寶瓶(巳土)　魚(辰木)　羊(卯火)　牛(寅金)　鬼女(丑水)　蟹(子月)　○十二月　師子正(或六)　雙女二(或七)　秤三(或八)　蝎四(或九)　弓五(或十)　摩蝎六(或一十)　寶瓶七(或二十)　魚八(或正)　羊九(或二)　牛十(或三)　鬼女十一(或四)　蟹十二(或五)

○(一)凡そ香隆寺指尾法に曰く、夫れ此の七星は上み天神に曜かし、下も人間に直くして以て善惡を司どり而も禍福を分つ、若し人有つて能く禮拜供養せば、一生の中に於て橫惡の事有ること無し、長壽富貴にして死籍を削り生札に還著す、信敬せざる者は運命久しからず、貧窮多病にして卒す、大小便利及び穢惡の事、並に北に向つて緣することを得ざれ。」云云　抑〻此の法を修せんと欲はば、月の一日より起首して、月の八日に至つて一期と爲す可し。宿曜經に曰く、白黑月の七日に北斗(梵には(二)七仙神と曰ふ。)下だる、若し念誦する時は、結跏趺坐して北に向へ、飲食の時も北に向へ、臥息の時は頭を東にして面を北にす、著する所の衣服所用の雜器、供養物等皆白色なり、所行の處は、王宮淨室河池海邊練若山谷の間、意樂の處に隨つて之を行ずべし。」云云　北斗七星護摩秘要儀軌(一行)に曰く、若し人有つて能く禮拜供養すれば長壽福貴なり、信敬せざる者は運命久しからず、供養を爲(なさ)ば其の屬星をして、數〻死籍を削り生籍に付せしむ。」云云　北

(一)凡そ云云　寬空の次第なり。

(二)七仙神　七星なり。

(一)護摩圖　今之を略す。
(二)波拏　幡なり
(三)花八葉　樒を一葉づゝにして八葉を重ねて紙よりにて結びて二つ拵え盛花の器に入れ置き勸請奉送に次第の如くに用ゆ。
(四)火天壇　圖あるも略す。
(五)部主段　圖あるも略す。
(六)本尊段　圖あるも之を略す。

斗七星護摩法行に曰く、此護摩法を修せば、死籍の記を削り長壽の札に記す神驗最も明なり、命を延べ算を增し災を除き富を招く、延命の法此に如く者なきなり。」云云

○(一)護摩圖　金剛界に付いて之を行すべし。

圖後に曰く、右初夜は此の圖の如く、(二)波拏七本、幣七重ね、錢茶菓各〻三盃、佛供十一盃、但し上に蠟燭之を立つ、後夜には粥八盃之を備ふる常の如し、波拏幣錢茶菓子は之れ無し、日中には佛供十六盃汁八盃之を備ふること常の如し、但し大八盃。小八盃合して十六盃なり。菓子並に波拏等は之れ無し。　左右脇机の供物等は息災の如し。云云　但し五穀の中に一種を除き命穀に換へて之を用ふ、又乳木は命木を用ふ。」云云　又曰く本尊段の七つ星、並に補星の料に、(三)花八葉を重ね結ひて、二結び置く可し、是れ勸請並に奉送の料なり。法務の說なり

○藥種　杓杞、白朮、人參、遠志、黃精根。　○加持物　胡麻　○塗香、散香、丸香には白檀、龍腦、白膠、薰陸、或は茅香甘松之を用ふ。

○護摩の次第　○(四)火天壇　圖下に曰く、大日所變の故に阿字を以て種子と爲す、印眞言常の如し」　○(五)部主段　圖下に曰く、一字金輪を以て本尊と爲す。釋迦金輪　三形印眞言常の如し」　○(六)本尊段　圖下に曰く、各別の種子尤も善し、利根の

(一)諸曜宿段　圖あるも略す。
(二)世天段　圖あるも略す。
(三)翻經院　胥龍寺內に翻經院といふ寺あり、此處にて翻經せり、翻經院の元政の北斗護摩の秘要に眞言あり、則ち召北斗の呪にしてナウマクサンマンダダラダラバザラウム。
(四)醍醐流云云　醍醐にては召北斗と重んずる故に。

人之を用ふ可し、三摩耶、星形、但し本命星を中央と爲し、餘の六を伴と爲す、印眞言は召北斗の印言なり」　○(一)諸曜宿段　圖下に曰く、土曜を中央と爲し、餘の八を伴と爲す、次に十二宮、次に二十八宿の廻はり圓に之を勸請す可し、或は通して阿字、大鉤召の印言之を用ふ、但し供物の時は、諸宿曜の明眞言之を用ゆ。

○(二)世天段　圖下に曰く、或は十二天通じて吽字を用ふ、印眞言常の如し。

○供物呪の事　○火天段常の如し　○部主段(三)翻經院眞言。　○本尊段北斗惣呪尤吉し、又本命星には本尊の眞言、餘は惣呪なり。　○諸曜宿段、唵盧(ロ)伽盧伽迦羅(キャラ)耶、娑縛訶、此の眞言通じて之を用ふ。　○世天段常の如し

○加持物には、北辰の心呪之を用ふ。

○加持物の呪　唵素底里(ソナリ)瑟陀(シュダ)、娑縛賀　○伴

○正念誦　金輪の眞言之を用ふ、即ち翻經院の說なり。次に北斗惣呪、師說なり。　○念誦次第　佛眼、大日、金輪、召北斗、當年星、九曜、十二宮、廿八宿、　○御加持　召北斗　醍醐流に僧の呪　召北斗眞言之を用ふ。

は本尊加持には、召北斗の眞言を宗と爲す。　○勸請の句　一字金輪轉輪尊、北斗七星諸曜宿

○禮佛の句　曩謨、怛羅(タラ)訶(カキャク)迦(ハ)多婆(ナウキャシュタ)曩迦瑟多羅(シュタラ)　但し醍醐流と。云云　師主の口傳は、振鈴の後蠟燭に火を付く、承仕或は自ら之を行ず、次に先づ金輪の印言、次に召北斗の

印言、並に諸曜宿等の印言之を用ふ、次に事供養なり。

○道場觀　「壇の中に惡字有り、變じて七寶莊嚴の宮殿と成る、其の中に紇哩字有り寶蓮花臺と成る、臺の上に𑖭字有り轉じて金輪佛頂と成る、其の後邊の左右に七つの惡字有り荷葉座と成る、座の上に各〻盧字有り即ち北斗七星と成る、前に荷葉座有り、座の上に土星、次に日月火水木金羅計、十二宮神、二十八宿、三十六禽、並に諸眷屬等重重に圍繞せり。」種子三摩一一に之を觀ずべし、印眞言に曰く。○召北斗の印翻經院儀軌の說なり。但し香隆寺の次第に相違す。　虛心合掌して、二大指を以て二無名指の甲を捻し二中指二小指蓮葉、二頭指少し開き屈して來去す」師說　眞言常の如し。

○北斗惣印一行儀軌の說、阿陀密經に出づ。　左右の二火二空相ひ係け之を捻す、二水指の前の面を合せ、二地二風張り立つ即ち成す。眞言は惣呪なり。　○或說の印二羽內縛して、二頭指端し立て合はせ即ち成す、眞言惣呪なり。　○(一)七星の印本命供次第の說　各〻皆金剛合掌を用ふ。

○又の印香隆寺、並に宿曜供次第の說、各別の眞言に此の印を用ふ。　二手合掌して、二風二空極めて之を相ひ開く。

一本に之無し　○九曜の惣印護摩次第には七曜の印之を用ふ。　先づ合掌して、十指相著け、二風二空極めて相ひ開く。

延命院の說　○七曜惣印　虛心合掌して、二大指外縛す。　○七曜九執十二宮神印　定惠圍にして端を合はせ、二空退け堅て合せて心に當つるなり。　○二十八宿の(二)惣印先づ虛心合掌、二火外に相ひ叉へ、二空又相ひ叉ふ、眞言常の如し。　○十二宮惣印　次上の延命院の說に同じ、惣呪は之れ無し。　○(一)三十六禽の印二手內縛、二風空端し合はせ彈指す、眞言常の如し。　十八道に之を行ず、別章次第。　(二)金輪を宗と爲す、故に入我我入觀、並に字輪觀に尤も之を行ず、正念誦等の作法常の如し。

○(三)北斗供圖　(四)今此の北斗は三時に之を行ず、初夜の佛供十一盃、此上に蠟燭之を立つ、波拏七本、錢三盃、茶菓子各〻三盃、弊七重ね圖の如くに之を備ふ、後夜粥三盃、日中佛供三盃、汁三盃、菓子は之れ無し。今の圖の樣は師主、顯長參河守の爲めに行ぜしめ御所なり、佛供に於ては香隆寺の次第に依る。(五)法務の說に曰く、佛前に四盃之を並べ置き、次に三盃並ぶ、四盃は四角に各〻一盃之を備ふ。文

本命供は三時に之を行じ、當年屬供は一時に之を行ず、若し本命供の時は七星を中央と爲し、右の端を曜と爲し左の端を宿と爲す、若し屬星供の時は、曜を中央と爲し七星を右の端と爲す、宿は前の如く、三位の中に各〻諸星有りと雖も、本命星、當年星等を(六)本と爲して之を供す可し。

○○供養法次第

壇前普禮、著座普禮、塗香、三密觀、淨三業、三部、被甲、加持香水、加持供物、覽

(一)七星の印醍醐にては金剛合掌を用ふ、次に出す又の印の香隆寺等の傳は醍醐にては用ひざるなり。

(二)惣印　惣にも別にも之を用ふ。

(一)三十六禽彈指、三反眞言奧にあり、三十六禽は子丑等の十二神なり、此十二宮の伴數あり二つの宛の本を合して三十六禽なり。

(二)金輪云云　天部には常に同於本尊を行せず、然れども此北斗の法は衆星の能生たる金輪を宗要とする故に入我我入を行ずるなり。

(三)北斗供圖　今之を略す。

(四)今此の云云　此は大法に修す、天變怪異を聞るときは三時に之を修す。

(五)法務の說　本命星に九曜十二宮を攝し本命宿に廿八宿を攝する也。

(六)本と云云　本命供の時は七曜を先となし屬星は九曜を先となし屬星供なし之を供ず。

(一)大虚空藏云云　是れ大法の規則、金剛界に加へ入るゝなり。

(二)懺悔頌　是は胎蔵の次第にあり胎蔵の法の三力の次にある頌なり。

(三)字輪觀　此の下に異本には散念誦あり。

(四)普賢行願　懺悔隨喜なり。

(五)瑜祇經三種眞言　金剛吉祥と成就一切諸宿曜と破の明となり。

(六)八不の偈　中論の初の八不の偈なり。

字觀、金剛起、金剛持遍禮、普禮、神分等（初に表白）五悔、發願、五大願、普供、三力、四無量觀、勝願、大金剛輪、地結、四方結、道場觀、(一)大虚空藏、三力の偈、小金剛輪、送車輅、請車輅、召北斗印言、九曜惣印言、二十八宿惣印言、大鉤召印言、拍掌、結界、金剛網、火院、大三昧耶、閼伽、荷葉座、振鈴、理供養、事供養、讃、普供養、三力、(二)懺悔頌、祈願、禮佛、佛眼加持、次に入我我入觀、本尊印明等、次に正念誦、(三)字輪觀、佛眼、大日、本尊、散念誦、法施祈念、理供養、事供養、讃、普供、三力、祈願、禮佛、廻向、(四)普賢行願、解界、撥遣、三部、被甲、出堂。

○道場觀　「觀せよ、壇の上に惡字有り七寶莊嚴の宮殿と成る、其の中に惡字有り荷葉の座と成る、（星に隨ふべし。）座の上に種子有り、字變じて星形と成る、星形變じて其の星と成る、等

○念誦遍數（但し本命當年星の時、念誦此の定に之を用ふのみ。）　佛眼眞言二十一返、大日眞言百返、一字金輪百返、（翻經院）白衣、八字、妙見、召北斗千返、（翻經院）北斗惣呪百返、（一行軌の說）九曜惣呪百返、十二宮惣呪百返、二十八宿眞言百返、（胎藏）（五）瑜祇經三種眞言各〻百返、本命星、當年星、本命曜、本命宿、本命宮、炎魔王、（以上各〻百返）心經二十一卷、(六)八不の偈二十一返

(一)星供の圖　之を略す。

(二)壇の圖　之を略す。

(三)如來拳印　此は觀じ了りての加持なり。

○(一)星供の圖（小野の說）　久安五年十一月一日法務の本を以て之を書し了る。

師口授して曰く、北斗供の時には、幡幣錢此の圖の如し、佛供に至つては十一盃なり、香隆寺指尾法の如く蠟燭之を立つ。　○(二)壇の樣（師說に依つて之を圖す口傳）　著座普禮、三密觀、淨三業、三部、被甲護身等、（常の如し）加持香水、加持供物、金剛起、普禮、表白、神分等常の如し、四無量觀、勝願、大金剛輪、地結、四方結。

○道場觀　合掌して觀せよ「虛空に吽字有り變じて三摩耶形と成る、三摩耶形變じて北斗七星七曜九執二十八宿と成る。」(三)如來拳印にして七處を加持す。又說に曰く、如來拳印を結べ、壇の上に惡字有り變じて寶宮殿と成る、宮殿の內の中央に七つの惡字あり、七つの荷葉の座と成る、座の上に盧字（或は吽）有り、變じて三摩耶形と成る、三摩耶形變じて北斗七星と成る、相好圓滿せり、次に其の宮殿の右方に七曜九執十二宮神あり、左方に二十八宿、三十六禽ありと之を觀ずべし、種子、三昧耶、座等、位に隨つて之を觀ずべし、次に印を以つて七處を加持せよ。」（云云）　大虚空藏、小金剛輪、送車輅、（觀念常の如し。）請車輅、大鉤召、召北斗、九曜、十二宮、二十八宿、三十六禽、虛空網、火院、示三昧耶、閼伽、荷葉座、五供、（理供事供）讃、普供、三力偈、祈願、禮佛。

○次に本尊加持佛眼。大日。金輪。召北斗。北斗惣呪。九曜。十二宮。二十八宿。

○散念誦眞言は、便宜に隨ふべし。

○次に法施、八不の偈、法身の偈等常の如し八不の偈に曰く、不生亦不滅、不常亦不斷、不一亦不異、不來亦不去。

○法身の偈　諸法從緣生、此法隨緣滅、如來說是因、是大沙門說

○次に後供養作法等常の如し讃、普供、三力、祈願、禮佛、廻向、五悔、解界、撥遣、三部、被甲等常の如し次に出堂。

北斗七星、七曜、九執、十二宮神、二十八宿、各〻皆別の種子有り、惣種子に二說有り、一說に曰く、吽字、二說は盧字なり、或る次第に曰く、北斗の惣種子は盧字、九曜の惣種子は哦字なり。」

○諸星種子印眞言、召北斗印眞言に曰く、翻經院儀軌注の說なり。虛心合掌して、二大指を以つて二無名指の甲を捻し、二中指二小指蓮葉。二頭指少しく開き屈して來去す。

曩謨三滿多、那羅曩、翳醯枳、頗伊、賀伊、那伊、迦伊、羅伊、謨羅多羅、伽羅舍、娑縛賀

○又の印明。一行儀軌の說阿陀密經に出づ

左右の二火二空相ひ係け之を捻す。二水指の前の面を合はせ二地二風張り立つ卽ち成す。

唵颯多而曩野伴惹密惹野二合染普他摩娑二合縛弭曩名位羅紇山二合婆縛都、娑縛賀

○或る說の印　眞言は一行の說の如し。二羽內縛して、二頭指端竪て合せて卽ち成す。

○七星各別の種子印眞言。本命供の次第に曰く、各〻皆金剛合掌を用ふ。」

香隆寺の次第に曰く、二手合掌して、十指相ひ著けて、二風二空極めて之を相ひ開く。七星各〻此印を用ふ。

ぁ　貪狼星の呪　唵陀羅尼陀羅尼吽

ぃ　巨門星の呪　唵俱嚕陀羅吒吽

ぅ　文曲星の呪　唵伊利陀羅吒吽

ぇ　廉貞星の呪　唵吐吒羅尼唵

ぉ　武曲星の呪　唵誠都嚕吽

ぉ　破軍星の呪　唵婆娑陀含吒吽

以上香隆寺の傳

○惣種子は吽　ぁ　貪の眞言　曰南、智羅布里、二合尼迦曳、娑縛賀。

ぅ　巨の眞言　曰南、多羅多羅、多羅賀尼、娑縛賀。

ぇ　祿の眞言　曰南、迦迦迦迦、哩賀哩賀、夜利尼、娑縛賀。

ぉ　文の眞言　曰南、鉢羅鉢羅、婆夜羅婆夜羅、娑縛賀。

ぉ　廉の眞言　曰南、到到力力迦迦、左哩賀左哩賀、夜哩尼、娑縛賀。

ぉ　破の眞言　曰南、婆底多羅、婆底婆利婆利、摩訶婆利左利尼、娑縛賀

以上小野の傳

○九曜の惣種子印言　ぁ字　或は吽字　○惣印、先づ合掌して、十指相ひ著けて、二風と二空と極めて相ひ開く、或る本命供次第に曰く、七曜惣印、虛心合掌し

て、二大外縛せよ。」又曰く、通印は合掌を用ふ、二大立てゝ來去す。」又曰く、定惠端合はせ、二空退け立て心に當つ。」又曰く、定惠の手、相ひ合はせ、火輪を離る。文

○惣呪　歸命、唵蘖羅二合醯入縛哩二合耶鉢羅鉢多、儒底羅摩耶、娑縛賀

○各別の種子印眞言　羅睺星、ऽの印、定惠堅固合にして雙べ立て、二空輪竪てて、幢に同じ。　眞言　唵羅引戸曩阿素羅羅惹野塞摩捨都曩野若は名位扇底迦哩、娑縛賀。　唵遏羅虎耶、娑縛賀　土曜ऽ、印　地天鉢の印　唵引捨泥殺儞二合羅曩乞殺二合怛羅、二跛羅二合訶、引摩曩引嚕婆野、若は彼名位普瑟底迦里、娑縛賀　唵捨泥始羅始制二合帝室哩二合摩賀三摩曳室哩。異本には以上の七字無し。娑縛賀　唵計都曳耶、娑縛賀　（私）吠曳娑縛二合賀　水曜ऽ、印二羽内縛して、二頭指を立て合はす。水天の印なり。　唵母馱、曩乞殺二合怛羅、娑縛二合弭曩、名位契拏摩、娑縛賀　唵沒馱室哩、二合娑縛賀　金曜ऽ、印二羽内縛して、二中指を舒べ立て又へ。但し惠の中指稍々之を屈す。　唵戌上羯羅二合訖馱縛二合羅縛二合遲惹野若は彼の名位室利二合迦里、娑縛賀　唵戌羯羅二合室利、二合娑縛賀日曜ऽ、印合掌して、風以下の四指頭相ひ拄へ、前の方大に開き、二空の頭を以つて各々水の下の節を拄ふ。　曩謨、囉怛曩怛羅野引耶、曩莫素哩野薩縛曩乞灑二合怛羅二合囉惹野、唵阿謨伽寫野名位設底、娑縛賀　唵阿儞底耶

室利、二合娑縛賀　火曜ऽ、印右の手五指直く立て相ひ著け、空を屈して掌中に納れ著く、風中節を屈して相ひ招く。　唵阿誐羅迦嚕儞野、名位娑縛賀　唵央誐羅迦室利、二合娑縛賀　計都星ऽ、印　羅睺星の印なり。　唵縛曰羅二合計都曩引曩乞殺二合怛羅囉惹野名位吽、娑縛賀　唵計都曳室哩、娑縛賀　月曜ऽ、印右の手拳に作り腰に安し、左の手五指相著け之を立て、少しく屈して其の高き事少し許り肩を過ぐ即ち成す、蓮花の中に潔白の月在りと想へ。　唵戰上怛羅二合曩乞灑二合怛羅二合囉惹野名位設底、娑縛賀　唵素麼室哩、娑縛賀　木曜ऽ、印、鉢の印　眞言　唵引婆羅二合訶、薩鉢二合底曩摩、比跢縛曩二合野、若は彼の名位摩擺縛羅引馱寧、娑縛賀　唵沒羅賀沙摩二合底室哩、二合娑縛賀

以上小野、但し初の眞言は七曜攘災の上卷に出づ。

○二十八宿種子印眞言　○惣種子 ॐ 又は ᳬ 字　○惣印　先づ虛心合掌して、二火外に相ひ叉へ、二空亦叉ふ。胎藏次第、並に宿曜供次第の說なり。　本命供次第に曰く、堅固合掌して、二火二大指各〻外縛す。」　○惣眞言　歸命、唵諾乞灑二合怛羅二合涅蘇那儞曳、娑縛二合賀

○各別種子眞言諸家の次第は想印を用ふ。　角 ᳬ 唵質多羅、娑縛賀　亢 ᳬ 唵薩婆二合底、娑縛賀　氐 ᳬ 唵毘釋訶、娑縛

賀　[以下西方]房𑖨　唵阿㝹羅他、薩婆賀　心𑖨　唵折沙他、娑縛賀　尾𑖨　唵牟藍、娑縛賀　箕𑖨　唵弗婆娑他、娑縛賀　斗𑖨　唵鬱多羅莎陀、娑縛賀　牛𑖨　唵阿毘止、娑縛賀　女𑖨　唵沙羅婆那、娑縛賀　[以下北]虛𑖨　唵但儞瑟吒耶、薩縛賀　危𑖨　唵捨多毘沙、娑縛賀　室𑖨　唵弗婆跋陀羅、娑縛賀　壁𑖨　唵鬱多羅跋陀羅、娑縛賀　奎𑖨　唵離婆底、娑縛賀　婁𑖨　唵阿離尼、娑縛賀　胃𑖨　唵婆羅尼、娑縛賀　[東方]昴𑖨　唵基栗柯、娑縛賀　畢𑖨　唵戶盧喜尼、娑縛賀　觜𑖨　唵麼梨伽尸羅、娑縛賀　參𑖨　唵阿陀羅、娑縛賀　井𑖨　唵不捺耶婆修、娑縛賀　鬼𑖨　唵佛沙、娑縛賀　柳𑖨　唵阿沙離沙、娑縛賀　[南方]星𑖨　唵訶可、娑縛賀　張𑖨　唵雨頗、娑縛賀　翼𑖨　唵求尼、娑縛賀　軫𑖨　唵訶莎多、娑縛賀

○十二宮種子印眞言　○惣種子 𑖨 又は𑖨　○惣印定惠堅固に合して雙べ建て、二空輪堅てて、𑖨に同じ。殘り十一宮の印皆之を用ふ。是れ小野僧正の傳なり。　本命供次第に曰く、堅固合掌して、二大指來去す。」云云。十二宮には別の惣呪無し、仍つて一一の眞言之を用ふべし、或は生日宮の眞言を用ふべし。

異本　香隆寺の次第に十二宮の惣印明を出す、二十八宿の惣印明之を擧ぐ。異注

師子𑖨　歸命、係呵婆多曳、娑縛賀　雙女𑖨　歸命、迦惹婆多曳、娑縛賀

秤　[異には𑖨に作る]歸命、兜羅婆多曳、娑縛賀　蝎𑖨　歸命、毘利支迦婆多曳、娑縛賀

弓𑖨　歸命、檀㝹婆多曳、娑縛賀　摩竭𑖨　歸命、摩伽羅婆多曳、娑縛賀

賀　寶瓶𑖨　歸命、鳩槃婆多曳、娑縛賀　魚𑖨　歸命、彌那婆多曳、娑縛賀　羊𑖨　歸命、迷沙婆多曳、娑縛賀　牛𑖨　歸命、毘梨沙婆多曳、娑縛賀　男𑖨　歸命、彌陀那婆多曳、娑縛賀　蟹𑖨　歸命、羯羅迦吒婆多曳、娑縛賀

○三十六禽印眞言二手內縛して、二風空端し合せて彈指す。　唵阿詣羅阿詣羅、僧伽羅僧伽羅、娑縛賀　○

(一)此法の所用諸尊の眞言等　○佛眼眞言　曩謨、婆誐縛妬、烏瑟捉二合沙、唵嚕嚕蘇普嚕入縛二合羅、底瑟吒悉多嚕舍儞、薩縛囉多薩多儞曳、娑縛二合賀　○同小呪　唵沒馱嚕遮尼、娑縛賀　○大日眞言　唵阿尾羅吽欠　○一字金輪　曩謨三曼多、陀羅陀羅波奢羅吽　○白衣眞言　唵濕吠帝濕吠帝、半拏羅縛引悉儞、娑縛二合賀

○八字文殊　唵引阿引入味引羅吽引佉左洛　○妙見眞言　唵素底里瑟駄、娑縛賀

○召北斗眞言　曩謨、三曼多、那羅曩嚧薩枳、頗伊、賀伊、那伊、迦伊、羅伊、謨

(一)此の法云々此は散念誦のこと なり。

羅多羅、迦羅含、娑婆二合賀引

○北斗眞言　唵颯跢、而曩野、伴惹密惹野、染普他摩、娑縛二合弭曩羅紇山、二合婆縛都、娑婆賀

○九曜惣呪　唵蘖羅二合醯濕縛里二合野、鉢羅二合鉢多、儒低羅摩耶、娑縛二合賀

○二十八宿眞言　唵諾乞灑二合怛羅涅、蘇那儞曳、娑婆二合賀

○金剛吉祥成就一切明　唵縛曰羅室利摩訶室利、阿禰底也室利、日素摩室利、月央誐羅迦室利、火沒羅賀沙跛底室利、木戍羅室利、金舍儞始者羅始制帝室利、土摩訶三摩曳室利、娑縛二合賀

○妙吉祥破諸曜宿明百返を誦す　唵薩縛多羅三摩曳、室利曳、娑縛賀

○成就一切明百返を誦ず　唵一吒吒引吒烏短聲二合置智置智吒烏短聲三合吒烏短二合吒烏引吒烏短二合四縛曰羅二合五薩怛縛、二合惹吽鑁斛六紇哩二合鶴吽泮吒七吽、八

○妙見法

「樓閣の中に荷葉の座有り、座の上に刁字有り、變じて(一)星印と成る、印變じて妙見菩薩と成る、左の手に蓮花を持す、花の上に北斗七星の形を作す、右の手は(二)說法の印に作り、五指並べ舒べて上に向ふ、大母指を以つて頭指の側を捻す、手掌を外に向ふ、天衣・瓔珞・珥璫・環釧其の身を莊嚴す、五色の雲の中に結跏趺坐す、眷屬圍繞せり。」

○讚　孔雀經の讚なり。　○根本の眞言　唵穆祇帝怛素吒　○印右の手施無畏に作り、大指を屈して(一)身に向へて(二)之を招く事三度、左の手金剛拳に作り、腰に安す。　○奇妙心眞言　唵素涅哩瑟多、娑縛賀　○(三)又の印　寶部光菩薩の印なり。　先づ施無畏　眞言　又向內　○又八葉の印　又は被甲の印　唵摩訶室利曳怛里吠、娑縛賀

(一)星印星形なり、手印にあらず　(二)說法の印五指を開き外に向て風空を捻す、又火空を捻す。

(一)身に向へ印を返して之を仰ぐなり。　(二)之を招ぐことなり　風指にて召ぐなり　(三)又の印五指立てゝ外に向るなり。

以上卷十

國譯諸尊要鈔卷十一

○○琰魔天

注進　琰魔天供一七箇日支度

合

蘇　蜜　名香白檀　壇一面三尺、二寸脇机一、燈臺二本、半疊一枚、壇敷布、一端(四)蠟燭布、一端、或は二丈壇

供米三石五斗乃至七石御明油三升五合、乃至七升銀錢料紙三帖、閼伽桶一口、杓あり閼伽折敷三枚、小刀一、　阿闍梨　承仕二人　駈使二人　淨衣白色　右注進すること件の如し　年月日某

(四)蠟燭布本法は檜木の板にて造る、其の上を布にて卷き、蠟を塗りて用ゆ、是れ軌の說なり、自行最略の時は布の代りに紙を卷きて幾度も胡麻の油に浸して能く何反も日に干して用ゆ。

伴僧二口にて金剛般若經を轉讀する事も之あり、事供の後蠟燭に火を燃すべし、位に隨つて次第す。毎位眞言を誦して之を供すのみ。十二天供並に星供等、蠟燭に火を燃すこと之に同じ、此の法には振鈴之あるべし、燈明外の蠟燭は常の燈明の分なり。白飯四盃、居え樣之あり、(一)振鈴は列壇の時は之を振るべからず、時に隨ふ。云云　○次第石山、亥の刻を以て之を行すべし。　○道場觀　「壇の上に惡字有り、光明を放つて宮殿と成る、七寶の莊嚴幡蓋寶樹周匝莊地と成る、其の上に亦惡字有り光明を放つて大地に遍して琉璃の寶嚴せり、此の殿は四方四門を開く。門毎に皆階道有り、此の殿の内に壇場有り、其の上に𑖭字有り變じて壇茶の印と成る、印變じて琰魔法王と成る。水牛に乘れり。左右前後に后妃婇女有り、太山府君五道冥官等の眷屬圍繞せり。」　次に加持七處　○請車輅　○次に大鈎召但し眞言の末に琰魔耶駑醯吽の句を加ふなり　○次に虛空網　○獻座但し(二)二意有り一は水牛の座、二は荷葉の座、　右の手頭指大指頭相跓へ、荷葉の形の如くし、左拳腰に安す。明に曰く　縛曰羅毘羅耶、莎呵　○(三)本尊琰魔天合掌して地風の中節背を著け空を以て風を押せ　唵縛曰羅迦捨　右の印言は金剛界二十天の内なり。　○又閻魔王合掌して、地風掌に入れ、空風の上より中に至る。　南、吠縛薩縛多耶、娑縛賀　(四)右は胎藏の印言なり。　○次に后の印　普印　歸命沒哩底野二合吠、娑縛賀　○次に妃の

(一)振鈴云々　聖天境十二天魔等炎の小境の時には振らず若し大境伴僧にて之を行時には之を振る、自ら行普賢延命藥師等の大法壇の時は之を振らず、自行にも天等の小壇は之を振ること、伴僧には振る時計りなる。本所に壇之を略す圖あるも之を振る。

(二)二意　本尊云々の印なり。此は壇茶の印なり。此は胎藏の右は胎藏の二通なり。

(三)本尊云々　此は鬼の主に入るなり。金剛界に約すると胎藏に約すとい ふに。

印惠の手五輪を垂れ(一)健吒の相、鈴の印に同じ左は腰に安す　歸命、摩哩怛野吠、娑縛賀　○次に太山府君　普印　歸命、質怛羅二合矩破多二合野、娑縛賀　○次に五道大神　普印　唵一閻魔羅闍二合烏揭羅毘梨耶三合阿揭車、四娑縛賀　○次に司命　普印　伺命伺命、多都多都、唵哆本尼耶、娑縛賀　○次に司錄　普印　已者已者、毘迦良、娑縛賀　○次に拏吉尼左掌を舒べ面門に合せて、舌を出たし掌に附け人の血を食ふ勢の如くす。　歸命、頡唎二合訶、娑縛賀　○次に遮文荼の印前印大指頭指ツマウルナリ、拘とイハツウマルなり云云。定の手を仰けて(二)拘に作り胸の上に當て、想へ鈴鐸を受くる形の如し、惠の拳腰に安す呪に曰く　歸命、護嚕護嚕、左門拏、娑縛賀　○次に成就仙　普印　歸命悉駄尾儞也陀利南、娑縛賀　○次に毘那夜賀二手内縛、二中指立て交へ、また二風を以て各〻中指に附け二大、頭の側に附けて五處を加持す。　唵摩訶哦拏波多曳、莎呵　○次に若し(三)諸神の呪を用ふれば、右の手拳にして風を舒べ、頭少しく屈して之を召く。　唵嚕迦嚕迦羯羅耶、娑縛賀　○次に五供印明○次に事供蠟燭に火を燃す○次に撥遣　唵縛曰羅穆乞叉、莎呵呵と與に三度彈指す　○念誦次第　佛眼、大日、心經、二十一卷尊勝陀羅尼二十一返琰魔天、千返后妃、北斗、九曜、司錄、異には錄を命に作る　諸神、三種、一字、次次は卷數案の如し、但し心經尊勝等の(四)三種の眞言は之を書せず　銀錢三盃、幡、琰魔、北斗、七星、九曜、幣各〻二本、言此の眞言を以て炎魔天供に用ゆ。　唵颯跢而曩野云云　○(五)都狀は表白の所にて讀むべし　○北斗七星眞

(一)健吒の相　健吒は鈴の梵語なり印の大指を中にして四指を廻りにして下に向ふ。

(二)拘に作り　鐸を受くる形。

(三)諸神の呪　諸鬼神の呪。

(四)三種　心經、尊勝、光明眞言なり、此の三種は卷數には載せず。

(五)都狀　勅願などには管家江家等の衆の中に御祈の趣を書き玉ふこと

奉供　供養法十四箇度。　奉念　佛眼眞言一千四百返、大日眞言一千四百返、本尊眞言一萬四千返、琰魔后、琰魔妃、北斗、九曜、太山府君、五道大神、司命、司錄、諸神、一字金輪、（以上眞言各〻一千四百返）

右は　國母仙院の御息災、安穩にして寶壽を增長し、御願を圓滿に爲し奉らんとして六月三十日より始め今日に至るまて並せて二七箇日夜の間、特に精誠を致し奉供すること右の如し。　年月日某。　已上勸修寺

醍醐、仁和の卷數案は金剛般若に之れ有り。或說は佛眼、大日、釋迦、十一面、地藏、本尊、以下部類、金剛般若一卷、心經、尊勝陀羅尼、光明眞言、三歸、一字、或は八不の頌を誦すべし。　已上醍醐流

○○十二天供（別にあり、常の如し、）

○○(一)九十天供

小野の四種念誦に曰く、四臂の不動、（中尊とす）十二天、九曜、二十八宿、之を合して五十天と言ふ、或は四大明王を加へ羅計二天を除いて五十二天と言ふ、大師御作に曰く、五十天供は、十二天、二十八宿、九曜なり。四臂の不動尊を加へて五十天と云ふ、亦四大尊を加へ、羅計を除いて五十二天と云ふなり。五大尊、十二天、北斗、七星、十二宮神、五星、二十八宿。」云云　以上六十九なり。　四臂の不動、四大明王、十二天、泰山府君、五道大神、大吉祥天、北斗七星、十二宮神、及以び五星、二十八宿　以上七十天なり。

(一)五十天供此は自行には行ずるにあらず、天下の乱るゝを行ずの時のみ之を行ずの等、五十天も皆行ずの七十天も皆行ずの二十天の通りの二天供の只蠟燭の數を增すなり。

○○聖天（別にあり、深秘深秘）

○○神供（別にあり常の如し、但し勸修寺一流には神供法と云ふ。）

淨水一桶、五穀粥一桶、（杓あり）散米（少小）一折敷、花（少小）香（少小）幣（十二本）　先づ淨地を拂ひ、次に三部、護身、次に(一)加持香水、次に灑淨、次に(二)敷花、（十二天の座）次に幣を立つ、次に淨地、次に淨土變、瑠璃地を觀ず、次に如來拳印、次に大鉤召印眞言、次に十二天各別の印、(三)眞言に各〻翳醯の句を加へよ、次に四明、次に加持飲食、（三股の印）唵三波羅三波羅吽、次に甘露の印（右の五指を舒べ、外に向へ食に加ふ。）　外眞言　曩莫、蘇嚕鉢（ソロバナ）耶怛他蘖多耶怛儞也他唵蘇嚕蘇嚕鉢羅蘇嚕、娑呵　次に鑁字の觀、(四)「飲食の中に鑁字有り甘露の法食と成る。」次に水三杓　次に香三返　次に花三返　次に粥各〻十二天の本方に之を供す。次に普供養、次に供花を散す、次に啓白、次に心經、次に廻向、次に撥遣　○又淨

(一)加持香水云云常の加持香水と（は異るを）、桶に水を入れ香を浮べて之を加持すると淨事なり、則ち上に淨水一桶といふ是れなり、灑淨は常の如くにあらず、散杖を以て杓をもて地に灑ぐなり。

(二)敷花　折敷に少々の花と云ふ此の料なり。

(三)眞言に云云此れ皆召請なり、各別に召請する時のことなり。

(四)飲食云云此の句の次より施餓鬼法混入せりと云ふ、古人稱して用ふ可からずと、故に今之を略せり。

(一) 曩謨　此の句の次に十二天境圖あるも之を略す。

(二) 大人米、勝れたる米、此の米は香氣味共に好し、故に國王及び大人に備ふ、地に蒔と雖、實甚だ少く平人用ひ難き米也。

(三) 三尺位云云、施餓鬼棚のことと、二尺五寸位低く拵るが宜し。

(四) 普集　此印は大指中指の甲を押す、明七反誦して風を三度招ぐなり

(五) 開咽喉　是印眞言三度誦して風指三度彈指す、餓鬼の咽喉の狹きを開く意なり。

土變　如來拳印を結んで「觀ぜよ、大地悉く瑠璃の寶地となる、諸神坐して列居す、金銀の器其の數量りなし。」　此の如く觀じ已て七處を加持せよ。　○佛名

口傳に曰く、散供の次に之を唱ふべし。

曩謨寶勝如來　曩謨妙色身如來　曩謨甘露王如來　曩謨廣博身如來　(一)曩謨

離怖畏如來

◎施餓鬼法

軌に曰く、銅の器或は白瓷、食の多少は意に隨へよ、文西域記第八に曰く、摩揭陀國の稻種は、其の粒麁大にして香味越れ光色特に甚し、彼の俗之を供(二)大人米と謂ふ 文

儀軌に曰く、(三)三尺より高からしめざれ、諸鬼食ふこと能はず 文　○施餓鬼法

一切の餓鬼に飲食を施さむと欲はば、先づ須く廣大慈悲の心を發すべし、普く餓鬼、一切靈祇天仙等を召ぎ、淨處を點定して地或は棚を拂へよ、桃柳石榴の樹下を用ふると勿れ、一器に淨食を儲け少しの淨水を和して東方に向つて施せよ。或は居し或は立つ　○次に淨地　○次に淨土變　如來拳印　唵僕欠　○次に(四)普集　右の手空火相捻して、風を招くこと三返、想へ法界の中の一切餓鬼、悉く皆雲集す　唵步布入哩迦哩多里、怛他引蘖多也　○次に(五)開咽喉　前印風指を招かず、此を破地獄の印、及び開

(一) 加持飲食の印　是印は三反擲りて三度彈指す。

(二) 鑁字七返　歸命の句を加ふ。

咽喉の印と名く。　唵步布入帝哩迦、哩多哩怛他蘖多引也　○次に食器を取て手に居え偈を誦す

至心奉上　一器淨食　普施十方　盡虛空界　一切餓鬼　先亡久滅

山川地主　乃至廣野　諸鬼神等　請來至此　受我此食　依我呪食

離苦得樂　往生淨土　發菩提心　行菩薩道　晝夜恒常　擁護於我

一切善願　皆令滿足

○次に五大願常の如し　○又曰く(一)加持飲食の印右の手の大指、中指の甲を摩て、外に彈す。　○次に前印を結んで食器に當て、加持飲食の眞言を誦して曰く　唵三婆羅三婆羅吽　想へ「一切の餓鬼、皆摩伽陀國七七斛の食を得、食し已て皆天上淨土に生ず、行者をして業障消除し、壽命を增益せしむ。」　○次に甘露　施無畏の印　唵蘇嚕蘇嚕、鉢羅蘇嚕鉢羅蘇嚕、娑縛賀　想へ飯食及び水變して無量乳及び甘露と成る、諸の餓鬼をして平等に受用せしむ。師說に曰く。二十一返、或は七返を誦す　○次に鑁字加持。七返　五指を展べ開き下に向ふて食器に臨めて(二)鑁字七返を誦す、此れを普施一切餓鬼の印と名づく　○次に淨地、或は流水樹下、或は淨石の上に瀉し置く、瀉し終つて更に廻顧すること勿れ、又殿基石階に近くこと勿れ。　○次に五如來名號各〻三返を稱す　南無過去寶勝如來、除慳貪業福智圓滿　南

無妙色身如來、破醜陋形圓滿相好　南無甘露王如來、灌法身心令受快樂　南無廣博身如來、咽喉廣大飯食受用　南無離怖畏如來、恐怖悉除離餓鬼趣

○(一)次に發菩提心眞言　唵冒地質多沒馱波陀野弭

○次に(二)三昧耶戒眞言　唵三摩耶薩怛鑁　想へ「諸の鬼神等、菩薩の三昧耶戒を受けて、皆甚深の祕法を聞くに堪へたり。」師說(三)尊勝陀羅尼三返。或は千手陀羅尼。　○次に(四)光明眞言二十一返或は七返

○心經祈願檀波羅蜜眞言二十一返　願施此食、所生功德、普將廻施、法界有情、共生淨土、疾得成佛、或本の偈なり　○次に撥遣　拳印を作り彈指聲をなせ。　唵縛曰羅穆乞叉穆

建保六年二月二十五日遍知院に於て御本を以て書し了る　金剛佛子憲——生年廿七

以上卷十一

國譯諸尊要鈔卷十二

○○梵天　「樓閣の中に荷葉座有り、座の上に𑖭字あり、字變じて花と成る、手に持する所の物、事に隨つて之を替へ用ふべし。　蓮花變じて大梵天王と成る、相好具足せり、　面上に三目あり四面四臂なり、右の一の手は(五)施無畏、次の手には鉢を持す、左の一の手には蓮花を持し、次の手には軍持を持す、眷屬圍繞せり。」

(一)讃　諸天の讃　○(二)印定の手、水を屈して月に入れ、空を以て水の側の上を押す、惠拳腰に安す、但し胎藏には定半蓮、云云　眞言に曰く　歸命、波羅惹婆多曳、娑縛賀　○同明妃　定持花　歸命、𑖭三摩多曳、娑縛賀　以上の二印言は胎藏の外院なり。

○梵天左の五指を立て屈し、右の拳を腰に安す、是れ半紅蓮花の印なり。　唵昧曩縛曰羅　以上の印言は金剛界の(三)二十天なり。

○○帝釋　「樓閣の中に荷葉座有り、座の上に𑖭或は𑖭字有り、字變じて獨股と成る、獨股變じて帝釋天と成る、赤色にして右の手に杵を持し左の手拳にして腰に安ず、冑及び天衣を著す、(四)忿怒の形なり、眷屬圍繞せり。」　○印　內縛して二風堅て合はせ針の如く、二空並べ竪つ。○眞言　歸命、鑠乞羅耶、娑縛賀　○帝釋天金色にして內縛二風二空相ひ立つ。　唵縛曰羅庾馱東方(五)泥縛　以上の印言は金剛界二十天なり。

○○地天𑖭又は𑖭或は孔　三、賢瓶或は鉢、十二天供の印は鉢なり。　「(六)金壇の上に七寶の宮殿有り、殿の內に阿字あり荷葉座と成る、座の上に鉢哩字有り、字變じて四瓶と成る、瓶變じて堅牢地天と成る、首に髮髻を著し、身に羯磨衣を著す、莊嚴微妙なり、兩手に(七)寶瓶を持す、諸の地神等の眷屬圍繞せり。」

(一)次に發菩提心言は三反。　(二)三昧耶戒　三反　(三)尊勝云云　尊勝は滅罪、千手は餓鬼道の能化なり　(四)光明眞言此の次に檀波羅蜜眞言。　(五)施無畏云云　施無畏は息災、鉢は調伏、蓮花は敬愛、軍持は增益なり。

(一)讃　孔雀經の讃に二の梵漢兩種あり、漢に二名あり、其の中に天阿修羅の贊なり、此を諸天の贊と云ふ、又は天龍八部の贊といふ。　(二)印　持花の印半蓮とは左掌を立て右に向ふ、五指を並べて少し屈す　(三)二十天　二十天の內といふことなり。

(四)忿怒の形　此の尊忿怒の形に見えず、眼色の忿怒なるをいふ。

(五)泥縛　天の梵語也、帝釋は十二天の時東方の天曼荼羅にある故に東方の天といふ事なり。　(六)金壇　增益なり、此れ譽めたる言なり。　(七)寶瓶　常の瓶にあらず、瑠璃の鉢なり、此の中に花を入れて持す。

(一)印　鉢の印なり。

(二)内縛云云　二火を塔形の如くとは二中を圓形にするなり是れ寶塔の印にして天の所持物なり。

(三)中指一股　二中立て合し、棒の形にするなり、是れ寶棒なり、内縛は二中は棒なり、故に塔の印ともいふて此寶棒ともいふて此の天の秘印なり。

(四)禪貳師子一　一とは五太子の中の第一のこと。

○(一)印　定惠の指の端一處に聚め、掬の形に作さしめよ、　○眞言　唵微里體尾曳、娑縛賀　○讃　諸天の讃

◎毘沙門　「壇の中に惡字有り、變じて七寶の宮殿と成る、其の中に二肘の壇有り、其の上に荷葉の座あり、座の上に藥叉の二字有り變じて二鬼と成る、座の上に有字有り變じて如意棒と成る、棒變じて毘沙門天王と成る、身忿怒にして甲冑形なり、左の手に塔を持し、右の手に棒を執る、或は戟、座に立つ眷屬圍繞せり。」

○本尊印　虛合して、二地を掌に入れ交へ、二風舒べて火の背に着くる事勿れ。　唵吠室羅末拏耶、娑縛賀　○又の印　合掌して二地二火を屈して掌に入れ、二大指を以つて火の甲を押して風を招け。　金剛二十天の中　○印、(二)内縛して二火を竪て塔形の如くせよ、是れ口傳なり　次第には(三)中指一股云云。　眞言に曰く　唵縛日羅昧羅縛、娑縛賀

○大呪　曩謨引　囉怛曩怛羅夜也、曩謨引　失戰荼、縛日羅幡拏曳、摩訶藥乞叉、細曩鉢多曳、曩謨引　阿他骨嚕、藥室拏薩也、摩訶囉引　惹、摩訶𩜁怛藍鉢羅尾沙弭、薩縛薩怛縛吽底瑟南、怛儞也他、唵摩尼縛駄羅也、薩縛賀布嚕拏縛駄羅也、薩縛賀摩拏栗託也薩縛賀、悉定迦羅也薩縛賀、吠失羅末拏也薩縛賀、難一曩駄也薩縛賀

○次に吉祥天印言　常の如し　○(四)禪貳師童子一印　金剛掌　明に曰く　唵奢擧多羅夜、娑縛賀　右毘沙門の吉祥禪貳師　○次に(一)獨建二那吒三常見四最勝五　右毘沙門の五太子なり。　○次に八大藥叉、並に二十八使者等の印言　別に在り　○吉祥天の法　別に在り

○最勝太子　吡沙門第三の太子なり、異本には第五の太子となす。　「樓閣の中に大磐石の山有り、山の上に曼荼羅有り、曼荼羅の上に𑖀字有り、字變じて刀劍と成る、刀劍變じて如意天王と成る、其の像八臂四面なり。當前の正面は平正圓滿の相を作す、猶し菩薩の相の如し、左廂の面は青黑色にして大に口を張り虎牙の相なり、右廂の一面は自在天の相を成し赤白色なり。當前の上の面は藥叉極惡の相を作す、牙齒長利にして身赤黑なり、髮の色金青色を成す、其の天王左右の二手は皆竪て丶刀を持す、左右の手は相ひ雙べて縛日羅叉を持す、左右の二手は合掌して心に當つ、左右の二手は下れて俱に槍を持す、其の身雄狀迅極にして可畏なり、五色の雲を以つて散し垂れて蓋と爲す、諸天藥叉大將、二十八部前後に圍繞す。」

○印　合掌して心に當つ、即ち二大指を以つて右、左を押し交へて掌に入れ、二頭指並べ立て、餘の三指交へて拳に作り、然して之を頂戴して三たび上げ三たび下ぐ。　○眞言に曰く　唵那吒倶伐羅、娑縛賀　名香は求求羅香を用ふ安悉なり息災

◎訶利帝法師說

(一)獨建云云　二三四五の數字は太子の數を顯はす。

(一)雜念云云　不動降三世等の威靈なる金剛部の印明結誦すれば此の印の尊の降臨し難き野卑の雜眷屬なれば、野卑の雜眷屬とはたとへ我が念誦信ずる尊の呪の種々眞言を加へ誦すること宜しからず、只一心一境に此の尊のみ念ずべし。といふことなり。大都天部は此の通りなり。

(二)中大小廻大は中尊は形に觀ずべし、其の大廻りに之れある小子は小に觀ずべしといふことなり。

(三)大藥叉本尊なり大藥叉の召請は合掌にて二大を召す。以下は九子の名なり

(四)南無加妙　南無增喜　南無自在　南無飛行　南無安住　南無同蘇　南無

像の面西に向へ、其の持誦の者は壇の西に面を東にして像に對ふ、念誦は或は四時三時、乃至一時間闕すべからず、若し間斷あらば法卽ち成し難し、亦金剛部の眞言を誦し、及び(一)雜念誦することを得ず、恐らくは成就し難し、毎時一百八返を誦するを常と爲す、正しく念誦の時人と共に語を雜ゆべからず、白月一日五日、及び十六日二十日より起首すべし。

○種子　ぁ　○三　吉祥菓　○發願　至心發願　唯願大日　四智如來　普賢觀音　大聖文殊　本尊聖者　大藥叉女　歡喜母天　沙多半支(サタハンジ)　諸大藥叉　五百諸子　五千眷屬　降臨壇場　所設供具　哀愍納受　護持以下常の如し

○四無量觀○勝願○大金剛輪○地結　○道場觀異本に曰く、(三)中大小廻、金剛合掌。」　○大虛空藏○(三)大藥叉○召請印言○愛子召請印言○拍掌○次に閼伽右方足を洗ふと想へ　○奉座荷葉の印言。　○五供印明常の如し、異には秘事なり云云　○次に現供右の塗香花飲食菓子等、先づ佛菩薩等に供養すと想へ、是れ秘事なり。左の塗香花飯食菓子等次に鬼子母神等に供養すと想へ、是れ秘事なり」以上異本　○讃諸天　○拍掌三度　○次に普供養印言三力祈願　○禮佛餘句は常の如し　南無歡喜母女訶利帝母三返　(四)南無加妙　南無增喜　南無自在　南無飛行　南無安住　南無同蘇　南無愛受　南無香味　南無得財　南無五百諸子

(一)普賢三昧耶の印言　是は諸佛に供養せよと之れあるが故に此等の印言を出す、印言は下に出す。

(二)擲惡人の印　印を以て其の方に向て打つ勢をなす也。

(三)金剛の偈　金剛般若の偈なり。

(四)口を漱ぐ　本尊の御口を洗ふ意なり。

(五)二の召請　本尊大藥叉女の印と愛子の印となり、召請の時は印を以て召請の撥遣の時は外へ撥する也。

○(一)普賢三昧耶の印言○觀音の印言○文殊の印言○本尊の印言降伏の印　○(二)擲惡人の印言○愛子の印言○次に念誦眞言等○本尊○愛子妙鈔に出づ　○三歸眞言　○如來慈護の眞言　○觀音○八不の頌○(三)金剛の偈○最勝王經寶號　○次に閼伽左方。(四)口を漱ぐ料なり。　○讃○普供養○三力○祈願○禮佛○廻向○五悔後段　○解界地結　○撥遣先づ(五)二の召請の印を、外に向うて之を撥ふ　○三部被甲○普禮○出堂　○大藥叉女召請の印右手の指を以て、左の手の背より指の間に交へ入れて、左の手の掌を把り、左の手をも右に向ふて三度之を召く、其の印相卽ち成す。　眞言に曰く　唵一(ドドマ)弩弩麽(鼻音リ)の印里迦引(キナイ)哂諦、娑縛二合引賀二　○愛子召請の印二手合掌して、二大指掌中に並べ屈して、二大指を以て之を招く。　眞言に曰く　唵一(ナビナニ)致尾致顆、娑縛二合引賀二　○普賢菩薩の印外縛三摩耶の印なり。　眞言に曰く　唵三摩耶薩怛鑁　○觀音の印二手外縛して、二頭を立てて蓮葉の如くす卽ち成す。秘事　又の印之有り、言に曰く　唵阿嚕力迦、娑縛賀　○文殊の印金剛外縛して、忍願を立て、劒形の如し心額喉頂の四處を印す、護身と成る　言に曰く　唵惡尾羅吽迦者洛(アクビラムキャシャラク)　○本尊の印內三股の如し。　二手內に相ひ叉へ、二小指相ひ鉤して二無名指各〻左右を虎口に入れ、二中指立て合はせ、二頭指各〻中指の背を捻して、二大指各〻中指の中節を捻す。其印相卽ち成す。　言に曰く　唵一弩弩麽引里、迦引哂帝、娑縛二合引賀引　○擲惡人の印右の手の大指を以つて、無名指の甲の上を捻して、眞言一返を誦する毎に一度彼人之を擲せよ。其の印相卽ち成す。眞言は本尊の言なり。　○愛子の印合掌して、二大を屈し掌の中に入れよ。　言に曰く　唵引一知上(ナビチ)尾知上(ビチ)顆、娑縛二合引訶引二　○三歸の眞言に曰く　唵僕欠　○如來慈護の眞言に曰く　訶利帝の威光を增さんが爲めに之を用ふ。　唵沒馱(ボダ)昧(マイ)怛(チ)里縛曰羅

(一)一字金輪大日金輪の呪を呪すれば天の功徳沒する故なり。(二)亮阿闍梨　琳賢なり。(三)凡そ云云　儀軌の文。

(四)中心の云云　上の中の大小迴の事。

(五)師說　之れ合掌なり。(六)散念誦　佛眼、大日、本尊、愛子、藥師、延命、破諸宿三呪とは藥師、延命、破諸宿なり。(七)愛子の眞言　次に壇圖を出すも之を略す。

羅吒(アラキ)奢憾(シャカン)　○(一)一字金輪眞言或傳に曰く、天等には此の眞言を用ふ。　唵多羅多羅、波娑羅吽　○訶利帝の讃に曰く　高野(二)亮阿闍梨の說と云云師主之を習ひ奉り了る、仍つて之を注す。訶利帝母、曩謨率都帝、娑縛賀

○勸請　呵利帝母鬼子母、揵陀山中諸眷屬。(三)凡そ若し人九子鬼の名を知らざる時は、供禮すと雖も敢て受用せず、能く名號を知つて之を供すれば、先生の貧報有りと雖も多く福利を得云云。

○呪賊經金剛界大法に付いて淨地より道場觀に至る。云云。

壇の上に八つの紇哩字有り、變じて荷葉の座と成る、但し(四)中心の一葉勝れて大なり、其の上に各〻吽字有り皆刀と成る、中心の刀變じて本尊訶利帝母菩薩と成る、餘は皆鬼神と成る、本尊を圍繞せり。」

○印　金剛合掌(五)師說甲を唵弩弩麽引里、迦引吽帝娑縛二合引賀引一　○(六)散念誦佛、大、本、愛、藥、延、合はす。

破、宿、賊、經後の三呪は卷數に載せず。○(七)愛子の眞言　唵引一知上尾知上顎、娑縛二合引訶引二

師說に洗ひ米を供す云云　佛供八盃、但し一盃は大なり、或る說に曰く、七の孩子有り。文　菓子石榴安息香小野僧正の傳なり。

訶利帝母供一七箇日支度　壇一面方三尺五寸　脇机一脚　燈臺二本　半疊一枚　蘇、蜜、名香白檀安息　壇敷

布一段　閼伽桶一口約を加ふ　折敷二枚　壇供米三石五斗　御明油三升

阿闍梨　承仕　駈仕　淨衣白色　右注進すること件の如し　年　月　日

軌に曰く、燈明を用ひず。」

○(一)寶藏天女法像二尺五寸　「壇の上に(二)五色の綵有り以つて座と爲す、其の上に𑖭字有り、變じて寶珠と成る、寶珠變じて天女と成る、頭(カウベ)に花冠を作る、點する所の花端正なり。身に紫袍金帶烏靴を着す、右の手に蓮花を把り、左の手に如意寶珠を把る、光明威德比び無し。」

○印眞言中指無名指を以つて屈して大母指を以つて二手の甲を押す。頭指及び小指を舒べて心の上に安す、右の手に數珠を把り眞言を念ず。此れを玉環の印と云云。　唵陀羅哦(ダラギヤ)陀羅哦、尾陀羅(ビダラニ)儞、娑縛賀　一千返を誦し滿つれば、諸願意の如し。云云

○寶藏天女讃に曰く　微妙殊勝不思議、柔嫩香鮮光如日、眉目端正最稀有、身膚細滑如兜羅、口中香氣滿人間、衆生視者忻瞻禮、一心欲求如是人、常如敬慕心不疑、雖示世間種種事、畢竟速成淸淨道、能使持者到菩提、相共同證無上覺

五月五日の前七日、乃至二七三七、及び百日或は卅九日を取り乃し五月五日に至つて滿足すれば其の法卽ち成ず。

(一)寶藏云云　福德を祈る天。(二)五色の綵　五色の綵を以て作る座なり。

○師傳に曰く　種子吽　三寶珠　能く世間殊勝の事を成す、天を廻らし地を動かし山を傾け岳を覆へす、或は財帛金寶山の如し、呪を說いて曰く　唵吒羅佉吒羅佉、毘多羅儞、娑縛賀

五月五日の前七日の內、長齋淨潔して此法を行せば、天女喚ばざるに自ら來る、五月五日の夜念誦千八を存せよ、(一)三更心皆し來らば必ず語すること勿れ、所問有らば問に隨つて之に答ふべし、長生の好藥世間の萬事身を終るまで奉事し、乃至姉妹と作る、必ず須らく分明なるべし孤疑を生ずること勿れ。二肘半の壇を牛糞香泥の五色に綵畫して天女を安ず、蘇蜜乳菓子各〻一盃、五色の蘇花餅各〻五枚、(二)粟麥を花に作りて之を供す、像は二尺五寸、花冠端正にして紫袍金帶烏靴を著す、右に蓮を把り左に如意寶を把る、財帛盈溢にして高官に遷つり貴賤男女歡喜す、凡そ一たび動すれば一切の鬼神皆迎侍す、世間の好妙意に隨ふ、惡人あつて相ひ害せんとするに賊の名を呼べば自ら縛し自打つて萬病皆瘥ゆ、八の眞言像の前に各〻三七返を誦し、然して後に作法す。云云。

唵與波羅帝吒急急、娑縛賀　唵折薩帝吒利摩耶、娑縛賀　唵勒叉那帝吒、娑縛賀

(一)三更云云　夜半頃心も必ず昏くなる時に本尊現ずく其の時行者の方より語るべからず必ず本尊の問を待つべし、何が故に修すると問へば行者の意願を答ふ。

(二)粟麥　外の天等にも是の如く供物あり、此の法は竹木枯るゝ時に此の法を修すべし、此の天女の法は殊に靈妙なり。

唵婆婆隸若帝、娑縛賀　唵勃惹羅帝吒、娑縛賀　唵藥叉藥叉底那、娑縛賀　唵遮帝毘折曳吽泮吒、娑縛賀　唵折勒那耶唎婆帝吒、娑縛賀

中・名を屈して掌に入れ、母指を以つて二指の甲を押す、頭指を舒べて小指を心に安ず、右に數珠を把り眞言を念ず。玉環の印と名づく

(一)摩訶迦羅提婆　(二)合掌の印　「壇の上に阿字有り變じて樓閣と成る、其の中央に惡字有り荷葉の座と成る、座の上に𑖭字有り袋形と成る、形變じて大黑天神と成る、身の色悉く黑色に作れ、頭に烏帽子を冠らしむ悉く黑色なり。袴を著けしめ駈りて褰げて垂れず、狩衣を着けしめ裙短く袖細くせよ、右の手を拳に作りて右の腰に收めしめ、左の手に大袋を持せしめ、背より肩の上に懸けしめ、其の袋の色鼠毛の色を爲せ、其の垂れ下さん程臀の上に餘せ。」

南海傳第一に曰く、坐して金囊を杷り小牀に却踞す、一の脚地に垂れ(三)毎に油を將て黑色を拭ふて形を爲す。文胎藏の圖は六臂なり。

○讃諸天　○印　○眞言　唵摩訶迦羅耶、娑縛賀　○又の印　內縛して地水を舒べて來去す是れなり。眞言　唵密止密止、舍婆隸二合多羅羯帝、娑縛賀　師主曰く、種子吽、

(一)摩訶云云　大黑天神。
(二)合掌の印　本尊の印。

(三)毎に云云　常に油にて拭ひ奉るは吉なり、黑色は降伏の相、不動明王に同じく茶吉尼を降伏の爲に現じ玉ふ。

(一)根本の印　眞言七反了りて五處加持す、加持の時は言を誦せず。次の隨心の印も同斷なり。

三袋　○印　普印　眞言常の如し

○○襄麌利童女法　「香醉山の上に寶樓閣有り、中に吽字有り、變じて黑虵と成る、轉じて襄麌利童女と爲る、身綠色にして狀龍女の如し、七頭を具足す、項に圓光有り、四臂なり、右の一の手には三戟叉を持し、第二の手は施無畏、七寶の瓔珞耳璫環釧臂釧脚釧莊嚴せり、鹿皮を衣と爲し、諸の毒虵を瓔珞と爲し、諸虫蟒虵の類を伴戲と爲す四面に圍繞す。」

○(一)根本の印　曰く二手相ひ博げ物を掬する勢の如くして、小指を以つて相ひ並べ、餘の八指各〻散し少しく屈して卽ち成す。」自身の五處を加持す所謂左右の肩、心喉額等、頂上に印を散す。　○隨心の印　右の手五指散し開き、少しく屈して師子爪の形の如くして成す。此の印を結び隨心眞言七返を誦して五處を加持す。　○隨心眞言　唵阿泉幸以の反爾賀吠、二合引一戍攞爾賀吠、二合引二縛曰羅二合迦、引三曳引三仡羅娑四入縛羅入縛二合羅五摩訶引迦哩、引六摩賀　喻祇、覺爽の反引七濕縛二合里曳引八唵頗蘇引九普吒羅奚、引　娑縛二合賀、十吽發吒莎呵、十　一萬返を滿すれば吉祥成就す、眞言の句の中に於て左攞婆縛尾一本には尾を尾に作れり。鑠娑婆賀の句を增加す。

烏頭湯を閼伽に入れて供養す、又名香を用ふ裏に曰く附子の名なり。

常瞿利毒女經嬰多三藏の譯に曰く、此の常瞿利は女身を現はすと雖も實には女に非ざるなり。」云々　或る傳に曰く、○種子𑖩　○三摩三戟叉。　惣じて此女は諸天の部主なり。以上異本

○○摩利支天東方に向つて之を修す。　「樓閣の中に荷葉の座あり、座の上に𑖩字有り、變じて天扇形と成る、形變じて摩利支天と成る、天女の形に似たり、左の手、臂を屈して上に向ふ、手腕左の乳の前に當て、拳に作る、拳の中に天扇を把る、扇は維摩詰の前の天女の把る天扇の如し。扇に於て中に當つて西國の萬字字は佛の胸の上の萬字の如し。を作る、四曲の內に各〻四箇の日形を作る、一一に之を著く、其の天扇の上に各〻光焰の形有り、右の手、臂を申べ五指を並べ申ぶ、指の頭垂れ下だす、眷屬圍繞せり。」

○印二手の地水內に相ひ叉へて右、左を押す。風空並べ立て合はせて、火を以つて風に纏ふ、大金剛輪の印の如し、身の五處を印す。　唵摩利支曳、娑縛賀　定を虛掌に作り、惠も亦虛掌に作り、定の虛掌の上に橫たへ覆せよ、若し難ある時は此の中に在りと想へ、若し他人の爲めに之を修さば、他人此の中に在りと想へ、此の天、日天子の前に在れども天人の眼にも見ること能はず。　口說に曰く、寶瓶の印を或傳には菴室の印と云ふ。」　又は是れ甲冑の印なり。　唵阿儞怛耶、摩利支、娑縛賀

(一) 水天法　此の法は水の不自由の處に修せば必ず水澤山に出づるなり

(二) 委細口傳　糸の端を結びて龍の頭とすることなり

(三) 又呪に曰く云云　此の次に供壇の圖あれども今之を略す。

(四) 天蓋の樣　天蓋の圖あれども今之を略す。唯天蓋の圖に付て說きたるを擧げたり。

○(二)水天法　此法は北方に向つて之を修すべし是れ水方の故なればなり。

壇敷には青色の物之を用ふ、若しくは絹若しくは布、或は紺の布之を用ふ。」三時に之を行ず、龍索には青色の生糸(スイシ)三尺之を用ふ、但し結ぶべし(二)委細口傳にあり　佛供十六盃、汁並に菓子各〻二盃なり、後夜には粥八盃なり、若し略する時には佛供等各〻三盃なり

○三摩　龍索　○印　內縛して二風を竪て合はせ、圓ならしめ環の如くす。　眞言に曰く　曩莫三曼多沒馱南、阿幡鉢多曳(アハンハタエイ)、娑縛賀

異には三を二に作る

○(三)又呪に曰く　唵縛嚕拏野(バロダヤ)、娑縛賀

建保六年二月二十一日遍知院に於て御本を以て書き了る　金剛佛子憲——(生年廿七)

以上卷十二

○太元法

○(四)天蓋の樣　東方の幡は青色七流、南方は赤色七流、西方は白色七流、北方は黑色七流。」云云。

中央本體は舊き黃色の幡一流之を懸け(但し舊に依つて包んで之を結び付く。)更に中央に白色の幡を懸く。

(一) 小野僧正の傳　此の次に二箇の壇圖並に本尊懸け樣の圖を出せるも今之を略す。

(二) 上鬲　一鬲は呪を誦し下鬲は打ち入るなり。

異には一流。云云

毎時大阿闍梨大壇三匝之を廻ぐる。　○次に禮盤に著する作法等常の如し

右繞三匝の文に曰く、諸有永離一切過　無邊功德莊嚴身　一向饒益衆生者

我今悉皆歸命禮。　護摩(息災護摩　部主大日(金界)　諸尊段　三十七尊(一本の御本には之なし))　大壇　一本の御本には、毎時以下の五行此の處に在り。　護摩(調伏護摩、部主不動、諸尊段、五大尊(一本の御本には之なし))　弓箭太刀各〻百枚、鉤棒鐵杖各〻十二枚、瓶二十四口、(一)小野僧正の傳。

○四天王結護作法

結願の時例の如く御加持了つて、次に四天王結界、伴僧上番の下鬲二人、下番の下鬲二人合せて四人、大壇の四角に立つ、其の次第は、先づ丑寅の角、辰巳未申戌亥に、次での如く立ち了つて、然して後、初め帳の角の柱より始て次第に打つこと六度動かす、丑寅の呪は伴僧の中の(二)上鬲之を誦し、下鬲に之を勤めしむ。　御加持香水(一本には香水の二字無し)加持、並に御衣加持には本尊の呪之を誦す、伴僧は本呪を用ふ、但し香水加持の時は禮盤に立ち乍ら發願等之を行ず、伴僧も共に立つて牛王杖を持して加持すること眞言院の如し。云云　御加持は初夜後夜許りなり、但し十二日より乃至十四日迄は牛王加持三時、御衣加持三時、香水加持等なり。

(一)良雅、範俊の弟子なり、正統の弟子にはあらず、然れども正統同事の弟子なり。

○本尊讃　曩謨阿吒縛(バク)摩訶縛(バク)吒摩訶藥叉(一本こは叉の下、駄字有り。)耶曩謨素都帝　○本尊眞言　唵多利(タリ)駄保利(ダホリ)婆羅保利(カラ)柘頡(シヤキ)迷柘頡(ベイ)迷駄羅薩多烏(ソタウ)嶮(エンベイ)毘　娑縛賀(或本を以つて之を點す。)

○種子刄　○三摩大力　○印(普通の印)合掌。但し二大を以て二水の中節を押す。　○言(本呪)　以上帝曉の傳、大乘院(一)良雅阿闍梨の傳之に同じ、智拳印を用ふ。云云。

○種子才　○三摩大刀　○印智拳印　○言(本呪)　以上は前大僧正定海の傳　大師御傳に曰く、御請來祕說なり。

○種子　鏁　○三摩　輪(千輻)　○印　智拳印　○言　本呪　以上

○普通の說(增益に之を修す。)　○種子•鏁　○三摩•塔　○智拳印　唵縛曰羅駄恒鏁　又は本呪を用ふ。

○小野の傳　○種•鏁　○三•劍輪　○智拳印　○言(本呪)　○祕說(調伏に之を修す)　○種子吽(異本に之無し)　○三劍　○印、內縛三股の印　○言　本呪　○小野の一說に曰く、○種(調伏)　○三劍輪　○印•三戟の印(外縛して、二大指二中指二小指立て合はす。)　○息災護摩　○部主大日(金界)　○諸尊段卅七尊　○調伏護摩　○部主不動　○諸尊段五大尊　或は諸尊段五大尊或は諸尊四十四羅殺百部鬼神に之を供す。

○種子•吽　○荷葉座　○勸請　○撥遣(胎藏諸夜叉の印言之を用ふ)　○世天段四大天王(以上異說)　御本の一本に曰く、以下の三次第は或本の秘法等の卷中に之を書す、但し十二天の次第は私に之を注す、炎魔王供には妙鈔の文を引く、是れ誰人の記と知らずと雖も秘法書寫の中に之れ有り、仍つて私に暫く加へ書す許りなり。文

◎歡喜天頸次第

○壇前普禮　○著座普禮　○塗香　○三密觀　○淨三業　○三部被甲　○加持香水　○加持浴油　○加持供物　○次に油を取つて壇の中に置き像を油の中に放ち著く。(小印を以つて大呪百八返を誦して之を加持す。)　○覽字觀　○觀佛　○金剛起　○普禮　○表白　○神分　○祈願　○五悔　○發願　○五大願　○普供養、三力等　○大金剛輪　○地結　○四方結

○道場觀(如來拳印)　「五輪世界を觀ぜよ、其の上に劍字有り毘那耶迦山と成る、上に阿字有り寶宮殿と成る、中に亦阿字有り變じて荷葉座と成る、上に𑖦𑖦の字有り共に變じて歡喜天男女の二像と成る、共に象頭人身なり、相ひ向ふて互ひに抱いて立つ、無量の聖衆前後に圍繞せり。」(深秘)

○大虛空藏　○小金剛輪　○送車輅　○勸請　○本尊(本尊の印を結び大指を以つて來去す。)　眞言に曰く

唵(バキヤ)鏺(シユダ)迦羅主(ヂイバタ)拏(ヤ)禰縛哆野弱、娑縛賀　○召請　○四明　○拍掌　○虛空結　○火院　○閼伽　○荷葉座　○五供印明　○摩尼供三力の偈等　○現供(一一て之を捧げ供す)　但し羅蔔根酒團を留て灌油の前後

(一)句を加ふべし　四種の法に隨て句を加へ用ふる義なり。

に供すべし。云云　○四智の讃常の如し○本尊讃普印讃の末に各〻法に隨つて(一)句を加ふべし○普供養、三力○祈願○禮佛○入我我入觀○本尊加持○正念誦○本尊印明○字輪觀○大日加持○本尊加持○佛眼　○次に羅蔔●酒●團●を供す、右方○次に灌油心中心呪を以つて之を浴す　後夜の時は四百返之を浴し、日中の時は三百返之を浴す。百返終る毎に彌〻祈願を成すべし、浴油の返數滿ち了て、左方の羅蔔根●酒●團●等之を供すべし。　○散念誦　佛眼、大日、正觀音、十一面、如意輪、心呪本尊心中心呪、千返心呪、千返悅與眞言、千返調和眞言五百返大金剛輪、一字、百返法施等心經、仁王經の偈等か　○次に五供養印明○普供養三力等。○次に現供左方○四智の讃○本尊の讃○普供養、三力○祈願○禮佛○隨心廻向、五悔終の段○解界撥遣○三部、被甲。○普禮○出道場。　或は浴湯の後に字輪觀を用ふ、此の傳尤も神妙なり、或は舊本等に見ゆ、或は明師の說に依つて粗〻之を記す、偏に愚慮を以つて之を注するには非ず。

○○十二天頸次第私記

○壇前普禮○辨供著座○塗香○三密觀○淨三業○三部被甲○加持香水○加持供物○覽字觀○淨地○觀佛○金剛起○普禮○表白○神分○祈願○五悔○發願○五大願○普供養

三力偈○大金剛輪○地結○四方結。

○道場觀　「寶宮殿有り、中に曼荼羅有り、中央に瑟瑟の座有り、座の上に頷哩字有り蓮花と成る、上に憾字有り利劍と成る、變じて四臂の不動尊と成る羯磨身なり、四方四角、及び內の四隅に惡字有り、荷葉座と成る、其の數十二なり、其の上に伊舍那等の十二天安座せり、各〻天衣を身に纏ふ。」

○大虛空藏○送車輅○請車輅○大鉤召○四明○拍掌○不動結界○虛空網○火院○大三昧耶○閼伽○花座○荷葉座○五供養印明○現供但し燈明供了つて次に蠟燭を用ふ○四智の讃○普供、三力○十二天の印明、伊舍那より乃し月天まで次での如く之を用ふ。　○念誦○五供○現供○讃○普供、三力○祈願○禮佛○廻向○五悔終の段○解界○撥遣○出堂

○十二天印眞言　△(一)大自在天右の手拳に作り腰に安す、左の手五指を直く立て相ひ著け地水の二指中節を屈す、火風空各〻少しく相ひ去けよ、　唵嚕(ロ)

拏(タラヤ)羅耶、娑縛賀　△(二)帝釋天左の五指直く立て相ひ著け、地水中節を屈して風を以つて火の背に著け、空の中節を屈す。　唵因捺(インタラヤ)羅耶、

娑縛賀　△火天右の手五指直く立て、空を屈して掌に相ひ著けて頭指屈して之を召け　唵阿誐那(アギャナウ)曳、娑縛賀　△焰魔天二地中節を屈して背相ひ著け二風屈して背むけ著け、二空各々風の中節を押す、卽ち成す水の甲を押す　唵焰摩(エンマヤ)耶、娑縛賀　△羅刹天右の五指直く立て、地水の中節を屈して、空を以て地を押す　唵地哩(ヂリチ)底曳、娑縛賀　△水天左の拳空を掌に入る勿れ、風直く立て中節を少しく屈す　唵縛嚕(バロダ)拏耶、娑縛賀

(一)大自在天　三古戟印なり。
(二)帝釋天　獨股印。

(一) 梵天印、故に大指横るにあらず。半蓮花

(二) 敬愛壇 壇圖あれども之を略す

△風天 右の五指直く立て地水中節を屈す。 唵縛耶吠、娑縛賀 △毘沙門 常の如し △(一)梵天 左の五指相ひ著け立てゝ少しく屈す、其の高さ少しく肩を過ぐ。蓮花と成ると想へ。 唵沒羅㾡摩曳、娑縛賀 △地天 鉢の印 唵畢哩體微曳、娑縛賀

△日天 前の印二空の頭を以つて各々水の下の文を拄ふ。 唵阿儞怛耶、娑縛賀 △月天 梵天の印の如し。但し掌を仰け中に潔白の月有りと想へ 唵戰捺羅耶、娑縛賀 ○(二)敬愛壇

○先づ供物を辨ず、所謂る五穀の粥 堅く調ふるを以つて吉と爲す、粥は應に知るべし香花の水に和す、但し蘇蜜を粥に加入す、又傍に菓子を挿む。 壇上の壇敷並に散花、例の如し 尊像を南に向へよ、其の壇四肘若くは三肘、處の便宜に隨ふべし 又閼伽一前を儲く、並に飯羹菓子燈明、各〻二杯壇の一方に居えて、彼の粥の上に蠟燭を挿さむ、位の次第に隨つて分ち居えよ、其の次第圖に在り。

○次に著座○次に三部護身○次に加持香水等 前の如し ○次に表白○神分等○次に三部心印○護身等○次に地界○次に道場觀 妙鈔の如し 此の觀を作し已つて、唵穆欠の眞言を誦して七處を加持す。○次に大虛空藏○次に小金剛輪○次に送車○次に請車○次に大鉤召 但し眞言の末に瑟吒耶 翳薩枳の句を加ふ。 ○次に空網○次に火院○次に閼伽○次に獻座 但し二の意有り、一には水牛座、二には荷葉座なり、惠の手の五指直く立て大指を掌に横ふる、此れ四葉の印なり。 眞言に曰く 歸命、阿、娑縛賀 ○次に焰魔

(一) 妙鈔

王の印 二手合掌して二風二地相ひ背けて月に入れ、二空並べ立て二風の中節の上より之を超して、二火の內第三の節に致して相ひ跓へ水火の頭相合はせしめよ。 眞言に曰く 歸命、縛無背の反 縛娑縛二合 多野、娑縛賀 以上妙鈔に之れ在り。

○次に塗香 左の手を以つて右の手の腕を執り右の手の五指を申べて外にす 眞言に曰く 唵微薩羅微薩羅、娑縛二合賀

○次に花 二手內に相叉へて縛を爲し、之を開き仰けて二頭指の側の頭之を相ひ柱ふ、二大、頭指の下に著けよ。 眞言に曰く 唵部哩惹縛二合 多蘭多詣、娑縛賀 ○次に燒香 二手背け相ひ合はせ、二頭指を舒べ側め之を相ひ跓ふ。二大を延べて頭指の下に安せよ。 眞言に曰く 前の塗香の眞言を用ふ

○次に飲食 二手鉢の形に作す 眞言に曰く 唵縛曰羅尾縛曰藍、二合 娑縛賀 ○次に燈明 右の拳大頭指を舒べて相柱へよ 眞言に曰く 唵微縛哩二合 多路者曩吽發吒 ○次に事供、但し粥の上に蠟燭之を燃す、位の次第に隨つて、位每に各〻眞言を誦して之を供し了る。○次に讃○次に普供養印眞言 但し觀念口傳に在り。○次に三力○祈願○禮佛 別に○次に焰魔天印 四處を加持す ○次に念誦○次に般若心經三卷 ○次に後供養○次に讃、普供養以下作法例の如し。○次に撥遣 唵縛曰羅二合 穆乞叉、莎呵 呵と共に三度之を彈指す。 ○次に三部被甲等○次に出堂し了る

胎藏に曰く、壇茶の印、常の如し 虛空合掌して、二地二風掌に入れ背け相ひ合はせ、空を以つて風を押す。 歸命、吠無背の反種子 縛娑縛二合 多野、娑縛賀

建保六年三月十二日遍知院に於て御本を以て之を書き了る。 金剛佛子憲——生年廿七

(一)槪を打つ眞言　此は護摩壇を土にて塗り、欠柱を槌にて打ち込むなり　先づ丑寅の角に眞言百反、辰巳、乾、坤、各眞言百反す

(二)鍬の印　此の印を勤さずして加持す、百八反、又は二十一反、略の時は七反。

(三)嬰麽夷　牛糞

(四)本部の三字半字眞言蘇悉地經上卷の第六品に三部の三字半の眞言を出す。

以上卷十三

國譯諸尊要鈔卷十四

○護摩雜要

○(一)槪を打つ眞言四百返　唵虎嚕虎嚕吽泮吒　○壇を塗る眞言　唵縛曰羅儗婆　○壇上を掃ひ地を掃ふ眞言　唵賀羅賀羅祖紇羅二合賀羅拏野、娑縛賀　○神線眞言　唵地里地里微麽羅迦里吽吽泮吒

○壇を作る作法　(二)鍬の印を以つて土を加持す、其の印明は內縛して進力禪智を立つ、明に曰く　唵儞佉那縛蘇提、娑縛賀　○次に(三)嬰麽夷を香水等に和して泥を成す、次に馬頭の印明一百八返之を加持す、常の如し壇を塗り已つて五色の糸槪等常の如し

○次に二器香水常の如し○地結、四方結常の如し○次に覽字觀常の如し　○次に驚發地神より、持地等に至る常の如し○次に五供印明、普供養等○次に地神の眞言百八返、若しくは二十一返、(四)本部の三字半字眞言百八返。　先師の傳なり、阿闍梨開白の次に先づ之を行す。」此一行。又の御本にこれ有り

○又一說に曰く、地天の眞言を以つて造立すべし、想へ地下金剛際、諸の瓦石糞穢の物みな取り捨つ、又惡鬼等諸の障難の人等悉く避除す、不動の眞言を以つて百八返、次に降三世、次に馬頭、次に地結、次に大金剛輪、各〻百八返。　以上大谷覺俊阿闍梨の傳。

○破壇作法師主の口傳　結願の時了つて禮盤を起たずして之を行す。或は他人を以つて之を行ず、　次に壇上並に爐口等水を灑ぐ三度、次に定印に住して觀想せよ「壇上に感字有り變じて風輪と成る、其の風爐並に壇上、之を吹き破ると觀ずべし、次に法身の偈を誦す、火箸を以つて緣の端之を破る、但し本說は獨股を以つて之を破る」但し先師は此の如く傳授し了る。

○御加持發願　至心發願　唯願大日　本尊聖者「以下二句法に隨ふべし」金剛愛染　三十七尊　兩部界會　諸尊聖衆　外金剛部　護法天等　各各還念　不捨本願　皆來集會　同共加持護持「隨時」、、二返　消除不祥　消除災難　惡靈邪氣　三世怨讐　惡人怨念　壓魅呪咀　作障難者　伺求短者　年厄月厄　日厄時厄　非時中夭　天變恠異　惡夢物恠　世間所有

(一)理運非常　諸不吉祥　未然他方　皆悉解脫　眞言寶藥　薰入「若は貴體」玉體　「若は貴體」玉體安穩

增長「若は福壽」寶壽　恒受快樂　無邊御願　決定圓滿　決定成就　此の後大阿闍梨自ら始めて眞言を誦す。眞言の返數は時に隨ふべし。左の手に念珠を持して數を取り、右の手に獨股を取つて順に施主を加持すべし。次に伴僧等眞言を念す、念誦すること中間と終と合して(二)二度なり、長からず短からず念誦すべし、珠を摺る時には獨股をば鬲の上に之を置

(一)理運非常　道理天運思ひ寄らざる難來ることあり

(二)二度　息災增益は二度、調伏は初中後三度なり。

(一)時の發願　行法時の發願。

(二)部主加持　大日加持のみなり。

く、終の念誦の度に獨股を取つて肩より少しく高くして助修に之を見せしむ、仍つて眞言を止む。

○(一)時の發願　至心發願　唯願大日　本尊聖者　某尊等　兩部界會　諸尊聖衆　外金剛部　護法天等　還念本誓　降臨壇場　所說供具　哀愍納受　護摩妙供　自受法樂　護持[人に隨ふべし]國主　消除不祥　消除災難　[或貴體]玉體安穩　增長[或福壽]寶壽　恒受快樂　無邊御願　決定圓滿　決定成就　[或殿內若は院內]宮內安穩　諸人快樂　及以法界　平等利益

○○護摩略鈔　小野の說、師口に隨つて私に之を注す。

房中より始め乃し著座・普禮・護身等に至るまで、常の如く之を行ずべし。

○次に三股を以つて灑淨香水を加持すること二十一返。枳里枳里の明を誦す。　○次に獨股を以つて漱口香水を加持すること七返。眞言　唵波羅娜縛曰羅淡　○次に散杖を取て香水に漬たし、二字觀を作し了つて之を灑ぐ。常の如し　○次に漱口香水三度、爐の口を灑ぎ旋らす。爐の口を洗ふ意なり　○次に三股を取つて爐の口を加持すること三返。枳里枳里の言を誦す。

○次に補闕　三股を取つて大金剛輪の眞言三七返を誦して、壇上の供物等之を加持す、之れ供物の闕少を補ふ意なり。　○次に羯麽加持　其印二手各々三股の印に作り、左を押して腕を相ひ交ふ、眞言唵縛曰羅羯麽欠　○次に覽字觀等　淨地乃至五悔より供養法正念誦に至る作法常の如し。　○次に散念誦了つて護摩に入る時　○先づ大日加持○次に(二)部主加持○次に本尊加持　○次に三平等

(一)爐の薪云云　此の下積薪の圖並に供壇の圖を出せるも之を略す。

(二)色相四種云云　色相は本尊の色相なり、息災は白色の火天の身と觀ず、敬愛の時は赤色の火天と觀る。

觀法界定印　○次に壇上の火舍を取つて、壇上の左の角に之を置く。　○次に芥子を取つて、火舍の跡に置いて、加持七返して四方四角上下に投げて結界を成せ。三寶院口傳に曰く、不動鈷印慈救呪、勸修寺傳に曰く、不動獨股の印火界呪　○次に火天の印を結んで身の四處を加持せよ。眞言小呪の末に息災の句を加へよ。

○次に念珠を取つて火天の小呪百返を誦せよ、此の間先づ鈴並に五股を左の脇机に之を置き、次に左右の脇机の供物等、壇上に取り置け。委細の口傳之あり　○次に茅草指環を取つて、右の無名指に貫け。佛部心三摩耶の眞言を以つて之を加持す、但し近來醍醐流には之を用ひず。延命院の次第に之を用ふ。又勸修寺に尤も之を用ふ。　○次に左の手に三股を持す。護摩の間之を持す。加持の時には右の手に之を持す。勸修寺の傳は獨股を持す。師主口傳に曰く、事業成辨の故なり。　○次の薪を積む。　○次に灑淨三度の如し。　○次に爐の薪に火を差す。　○次に火を扇ぐ　七返。若し火未だ盛ならずば數を限るべからず。觀呪有り次第　○次に羯磨加持　○次に漱口三度　○次に三股を以て爐の薪を加持すること三返。枳里枳里の眞言を用ふ。　○次に火天を勸請す。(二)色相四種に隨つて同じからず。　先づ定印を結んで觀せよ「我が心月輪の上に覽字有り變じて三角火輪と成る、我が身、體を擧げて又火輪の相なり、此の火輪變じて白色火天の身と成る、四臂具足して火焰身に遍す、是れ遍法界の身なり。」具さに尊の儀を觀念し已つて、次に右の手に一花を取つて火天の小呪を誦して爐の薪の上に置いて、又定印に住して觀ぜよ「此の花爐中に至つて荷葉座

と成る、座の上に覽字有り變じて賢瓶と成る、賢瓶變じて火天の身と成る、白色にして四臂具足せり、右の第一は施無畏、第二には數珠、左の第一には仙杖、第二には軍持なり。」此の如く相好威儀一一分明に觀念し了つて後、火天の印を結んで大眞言を誦し、眞言の末に勸請の句を加へ、娑縛賀の聲と共に、右の頭指を以つて三度之を招いて、爐中の火天と冥會して一體無二なりと想へ、次に四明の印を結んで眞言を誦せよ。○次に金合して啓白すべし。○次に漱口三度○次に塗香三度○次に蘇油大杓三度小杓三度○次に乳木三支○次に飯小杓三度○次に五穀小杓三度○次に切花三度○次に丸香三度○次に散香三度○次に蘇油大杓一度小杓一度○次に普供養印眞言、三力偈、祈願例の如し。○次に漱口三度已上本尊を召請する後、漱口並に塗香等を獻ずるより乃し撥遣以前の漱口に至るまでは、皆啓白並に觀呪有り。○次に撥遣、右の手に一花を取り小呪を誦して佛前に投げよ「想へ本位に至つて荷葉座と成る。」次に火天の印を結んで眞言を誦して、末に奉送の句を加へて之を撥へよ、觀呪有り、次に金合して啓白すべし。

○○第二部主段（本尊に隨つて同じからず）

先づ漱口香水を以つて三度爐の口に灑ぎ旋らす。　○次に部主を勸請す。（色相四種に隨つて同じからず）

先づ定印を結んで觀せよ「我が心月輪の上に其の尊の種子有り、變じて三摩耶形と成る、我が身、體を擧げて是れ其の三摩耶の相なり、即ち變じて其の尊と成る相好圓滿せり。」具さに尊の儀を觀念し已つて、次に右の手に一花を取り尊の呪を誦して爐の薪の上に置いて、又定印に住して觀せよ「此の花爐中に至つて寶蓮花座と成る、座の上に種子有り變じて三摩耶形と成る、三摩耶變じて其の尊と成る。」相好威儀一一分明に之を觀ずべし、然して後に大鈎召の印を結んで其の尊の呪を誦して、眞言の末に勸請の句を加へ娑縛賀の聲と共に、右の頭指を以つて三度之を招け降臨本位の尊、爐中の尊に冥會せしめ一體無二なりと想へ。○次に四明の印を結んで眞言を誦せよ。○次に金合して啓白すべし。○次に漱口三度○次に塗香三度○次に蘇油大杓三度小杓三度○次に乳木三度○次に飯小杓三度○次に五穀小杓三度○次に切花三度○次に丸香三度○次に散香三度○次に蘇油大杓一度小杓一度○次に普供養印眞言○次に三力偈○次に漱口三度以上召請本尊の後、漱口並に塗香等を獻ぜしより乃至撥遣以前漱口に至るまで、皆啓白並に觀呪有り。　○次に撥遣　右の手に一花を取り尊の呪を誦して佛前に投ず。「想へ本位に至つて蓮花座と成る。」○次に大鈎召の印を結び尊の呪を誦す、眞言の末に奉送の句を加へ之を撥ふ、觀念有り○

次に金合して啓白すべし。

◎第三本尊段

先づ漱口香水を以つて三度爐の口に灑ぎ旋らす。　○次に本尊を勸請す。色相四種に隨つて同じからず。○先づ定印を結んで觀せよ「我が心月輪の上に本尊の種子有り、變じて三摩耶形と成る、我身、體を擧げて是れ其の三摩耶の相なり、即ち變じて本尊と成る、相好圓滿せり。」具さに尊の儀を觀念し已つて(一)更に口傳有り。○次に右の手に一花を取り本尊の呪を誦して爐の薪の上に置く、又定印に住して觀せよ「此花爐中に至つて寶蓮花座と成る、座の上に種子有り三摩耶形と成る、三摩耶變じて本尊の身と成る。」相好威儀一一分明に之を觀ずべし、然して後、大鈎召の印を結び本尊の呪を誦して、眞言の末に勸請の句を加へ、娑縛賀の聲と共に、右の頭指を以つて三度之を招け、降臨本位の尊、爐中の本尊に冥會す、一體無二なりと想へ。○次に四明の印を結び眞言を誦す○次に金合して啓白すべし○次に漱口三度○次に塗香三度○次に蘇油大杓三度小杓三度○次に乳木百八支の乳木之を燒き盡す○次に飯小杓三度○次に五穀小杓三度○次に切花三度○次に丸香三度○次に散香三度今此の本尊に、切花●丸香●散香之を供し了つて、切花の器に丸香●散香を入れ、次に飯器に之を入

(一)更に口傳あり自身即ち金剛薩埵なれば我今本尊と同體の身となる、然れば一切衆生と同體なれば自身即ち施主なり、即ち今諸佛同體の本尊なる故に無始の罪業を滅す、本尊は萬德を具して意願滿足すと觀ず。

れ、次に器共に取り重ねて左の机に之を置き、次に扇を取つて右の脇机を叩く、之に依つて承仕來つて五穀を飯器に入れ交へ混屯して二器に分つ、一器は諸尊段の料、一器は世天段の料なり。○次に蘇油大杓一度小杓一度○次に普供養印眞言○次に乳木二十一支の內、六支を一度に取つて蘇油に差して之を爐の中に投ず。○次に藥種三度○次に加持物加持物の器を竪項の頭の壇に置いて蘇油の器を投げ越えて之を供す。觀念は次第の如し。○次に普供養、三力、祈願、例の如し。○次漱口。三度以上召請本尊の後、漱口並に塗香等を獻ぜしより、乃至撥遣以前、漱口に至る迄皆啓白並に觀呪有り○次に撥遣、右の手に一花を取て、眞言を誦して佛前に投ぐ。「想へ尊の本位に至つて蓮花座と成る。」○次に大鈎召の印を結んで本尊の眞言を誦す、末に奉送の句を加へて之を撥ふ、觀念有り。　○次に金合して啓白すべし。

◎第四諸尊段四種護摩に隨つて同じからず、若し息災の時には、此段に尤も滅惡趣尊を供す、(一)委細の口傳あり。　○先づ爐の薪を積む。○次に火を扇ぐ。觀呪等火天段の如し。○次に灑淨三度○次に羯磨加持○次に漱口三度○次に三股を以て爐の薪を加持すること三返。枳里枳里の眞言を用ふ　○次に諸尊を勸請す。色相四種に隨つて不同なり。　○先づ定印を結んで觀せよ「我身九識轉じて五智と成る、所謂る第九阿摩羅識轉じて法界體性智と成る、第八識轉じて大圓鏡智と成る、第七識轉じて平等性智と成る、第六識轉じ

(一)委細の口傳此の滅惡趣を供すと云ふは口傳にはあらず、諸尊段の諸尊の座位の觀念なり。

て妙觀察智と成る、前五識轉じて成所作智と成る、此の五智に五部の諸尊、一切聖衆を攝入す。」又我が身卽諸尊なりと觀ずべし。」次に右の手に數花を取て眞言を誦して（二）口傳受くべし。　爐の薪の上に置く、又定印に住して觀ぜよ。「此の花爐中に至つて無量の蓮花座と成る、座の上に各〻種子有り、變じて三摩耶形と成る、三摩耶變じて五部の諸尊等と成る、身相微妙にして相好圓滿せり、一一の尊に無量の眷屬有り。」此の如く分明に之を觀想すべし、然して後大鈎召の印を結び明を誦し、眞言の末に勸請の句を加へ、娑縛賀の聲と共に右の頭指を以つて三度之を招け、降臨本位の五部の諸尊、爐中の諸尊に冥會して一體無二なりと想へ。○次に四明の印を結び眞言を誦す。○次に金白して啓白すべし○次に漱口三度○次に塗香三度○次に蘇油大杓三度小杓三度○次に乳木三支○次に前の方の混屯一器を諸尊に之を供し盡す。○次に蘇油大杓一度小杓一度○次に普供養印眞言、三力偈、祈願例の如し。○次に漱口三度　以上召請本尊の後、漱口並に塗香等を獻せしより、乃し撥遣以前の漱口に至るまで、皆啓白並に觀呪有り。　○次に撥遣　右の手に數花を取り眞言を誦じて佛前に投ぐ。「諸尊の本位に至つて各〻花座と成ると想へ。」次に大鈎召の印を結び眞言を誦して、末に奉送の句を加へて之を撥へ觀念有

（二）口傳　諸尊の座位の事にして隨方觀心等のことなり。

り。次に金合して啓白すべし。

○○第五世天段

○先づ漱口香水を以つて、三度爐の口を灑ぎ旋らせ○次に明王等を勸請す、色相四種に隨つて不同なり。　○先づ定印を結んで觀ぜよ「我が心月輪の上に憾字有り、變じて智劍と成る、我身、體を擧げて智劍なり、變じて四臂の不動と成る、相好圓滿せり。」具さに尊儀を觀念し已つて、次に右の手に數花を取り不動の眞言を誦して爐の薪の上に置く、又定印に住して觀ぜよ「此の花爐中に至つて明王の花座、天等の荷葉座と成る、位に隨つて之を觀ずべし、「其の中央花座の上に憾字有り、變じて智劍と成る、劍變じて不動明王と成る、四臂を具足して相好圓滿せり、次の荷葉座の上に皆吽字有り、變じて各三摩耶形と成る、三摩耶變じて各〻十二天、七曜、並に二十八宿と成る、色相莊嚴せり」威儀執物一一分明に觀念し已つて後、先づ鈎召の印を結び不動の呪を誦して、眞言の末に勸請の句を加へ、娑縛賀の聲と共に、右の頭指を以て三度之を招く、次に天等、勸請の印を結び言を誦し、同じく又た三度之を招き、「降臨本位の明王、並に天等、爐中の明王天等に冥會して、一體無二なりと想へ。」○次に四明の印を結び眞言を誦

（二）勸請　世天段勸請に兩方あり、先づ不動、次に天等と各別に勸請の印を用ゆ、醍醐は不動世天一度に勸請するなり。

(一)更に口傳此れ世天の座位等のこと。

(二)世天段供次第此の處に十二天座居の圖あるも之を略す。

す。○次に金合し啓白すべし(一)更に口傳あり　○次に漱口三度　○次に塗香三度　○次に蘇油大杓三度小杓三度　○次に乳木凡そ六支を投ぐ、先づ本尊に三支、次に火天の小呪を誦して火天に三支之を供す。以上皆不動の呪を誦して之を供すべし。「天等同じく之を納受し給ふと想ふべし。」○次に殘す所の混屯一器、本尊並に十二天、七曜二十八宿に之を供す、不動尊に三杓、十二天等は各〻一杓づゝ之を供す、此の中に火天位に至つて三杓之を供す、是れ後火天段を修せざる故なり、各別の眞言を以つて之を供す、口傳に曰く、尙ほ殘餘有らば、當所の神明等に之を供すべし、普供養の眞言を用ふ。文．○(二)世天段供次第。此の十二天の座居は金剛頂經の說なり。一二等の次第は是れ供養の次第なり。○次に蘇油大杓一度小杓一度○次に普供養印明、三力偈、祈願例の如し○次に漱口三度以上召請本尊の後、漱口並に塗香等を獻せしより乃至撥遣以前、漱口に至る迄皆啓白並に觀呪有り。○次に撥遣、右の手に數花を取り不動の呪を誦して佛前に投ぐ、想へ「各〻本位に至つて花座、又は荷葉座と成る。」次に大鈎召の印を結び眞言を誦して、末に奉送の句を加へて之を撥へ、次に天等撥遣の印を結び眞言を誦して、末に奉送の句を加へて之を撥へ、觀念有り、次に金合して啓白すべし○次に護摩了つて、右方供養の香殘有らば、爐に投じて其の器を本所に置くべし、次に鈴五股本の如く之を返し置け、次に火舍

(一)金剛鈎菩薩此の菩薩は諸尊段にも鈎召にも用ふるなり。

(二)供物啓白、塗香、妙供の句、丸香或は切花五穀等と替るなり、唯願火天も本尊又は部主又は世天と替る分にして諸段同じ、何れ共啓白は同じ。

(三)降臨啓白句替ること上に同じ

並に閼伽器共に又本の如く之を取り置け○次に大金剛輪眞言七返若くは二十一返。時に隨ふべし。○次に一字の金之を打て、大阿闍梨百返了つて念珠を脇机に置いて先づ字輪觀○次に理供養印明○次に事供養等の作法常の如く之を行すべし。　以上五段護摩供了んぬ、但し大法に行する時には、三十六支を段段に用ふべし、初の灑淨香水等初火天段の如く之を行すべし。又曰く、薪を積む事四種乍ら息災の如く之を積むべし、更に替るべからず、一を以つて餘を知るべし。

右は小野護摩秘說なり、師主の口傳に依つて之を注す、努努他見に及ぶべからず。

○(一)金剛鈎菩薩印言二手外縛して、二頭指を開き立て鈎形の如くし之を召す。　唵縛曰羅二合矩尸阿羯茶、微羯茶、娑縛賀　○(二)供物啓白　我今奉獻、塗香妙供、但し此の句は物に隨つて不同なり。　唯願火天、但し此句段に隨つて不同なり。　納受護摩、悉地圓滿。　○(三)降臨啓白　唯願火天、但し此句段に隨つて不同なり。降臨此座、哀愍納受、護摩妙供、悉地圓滿。　○奉送啓白　唯願火天但し此の句段に隨つて不同なり。　還著本座。　○世天段降臨啓白　唯願明王、及與天等、降臨此座、哀愍納受、護摩妙供、悉地圓滿。　○世天段供物啓白　我今奉獻、塗香妙供物に隨つて不同なり。　唯願明王、及與天等、納受護摩、悉地圓滿。　○世天段奉送啓白　唯願明王、及與天等、

還著本座、慈悲護念、悉地圓滿。　○供物觀　應に觀ずべし、漱口香水は彼の御口を洗ひ、塗香等の妙供は彼の御口に入り、心蓮臺に至つて種種微妙の供具と成る、心より身に遍す、其の毛孔より流出して、一切佛菩薩緣覺聲聞、及び一切世天に供養す。

○供物呪の事　火天段には火天の小呪を用ゆ。部主段には其の尊の眞言を用ゆ。本尊段には其の本尊の眞言を用ゆ。諸尊段には普供養の眞言を用ゆ。　世天段には各別の眞言を用ゆ、委細は口傳に有り。　○勸請の句とは、翳醯翳吽（エイケイエイキ）な り。○四字の明とは、弱吽鑁舛なり。　○奉送の句とは、蘖車蘖車穆（ダツシヤダツシヤボク）なり。　(一)師主口傳に曰く、　病苦は加曩加曩、　恐怖は那賀（ダカ）那賀、　怨家は跛左（ハシヤ）跛左、　不饒益は度度度度、　毒藥は賀賀賀賀、　壓禱は爾置（ジチ）爾置、　滅罪は祖嚕（ソ）祖嚕、」云云　○護摩五段の理觀勸修寺の說云々師主の口傳之を受く。　火段(二)事相　部主(三)六度　本尊(四)煩惱を破す　諸尊(五)功德　世天理觀

○三平等觀委細は別に之あり。

三位　大壇　爐　座處。　三主　本尊　火天　自身。　三業　身業　口業　意業。

三業に就いて二種有り、一には本尊、意業爐、口業身、身業二には尊爐身に各〻身口意の三業有り、此の如く種種の三業は皆是れ不二平等なり、同じく五大所成にして共に實相

(一)師主口傳　明海の口傳。
(二)事相　火の波羅門の一切の物を燒きて供ずる如く其のリザを觀するなり、外道は事火のみを觀じ今は理觀なり。
(三)六度　供養物を六度に配す。檀は、次の如く慳貪、破戒、瞋恚、懈怠、散亂、愚痴を治す。
(四)煩惱を破す　供物は麁細の三種を殺じ供するなり。
(五)功德　三十七尊の功德は智火を以て煩惱業苦を燒きて供養すれば本有の功德顯る。

(一)八支なり　部主の四支は井に是の如く積む、而して八支に合して八支となる、本と火天段には、本の上に竪に六支積む、其の上に今左右に二支合して八支なり。

の理を離れず、故に理の外に事無し、事の外に理無し、事理不二にして三種は畢竟一體なり。　○三十六支を積む樣。大法を行する時之を用ふべし。　火天段十一支、常の如し　部主段四支、所謂る先づ前の火天段の上の六支の左の初の一支より猶右に一支を置き本の六支に並ぶ合せて(一)八支なり、次に佛の前、次に行者の前なり、故に四支と成る、是れ又左右前後の次第なり、前は佛の前後は行者の前なり、本尊段六支、前の部主段の前後二支の上に竪に六支を置く、左より右に至る、諸尊段十支、前の如し、但し底の一支なし。　世天段五支竪に之を置く、左より右に至る、故に三十六支と成る。

○口傳に曰く、乳木は本を佛前に爲して、金剛盤の上に之を置くべし。　○乳木供の事

三支を一度に之を取り、先づ本を蘇油に差し、次に末を蘇油に差して、手を仰けて横に一支づゝ之を供す。諸段之に同じ。　○丸香供の事　一度に三丸を取つて一丸づゝ之を投ぐ。諸段之に同じ。　○杓を置く事　大杓供了つて即ち本所に置く。　○四字の明の事檜尾僧都の說　諸天を請ふ時は、眞言の下に𑖨（ナン）の言を加ふ、那牟（ナン）とは是れ等の義なり、假令へば嚕陀羅と云ふ時は是れ唯だ主を請ふ、若し嚕陀羅南と云ふ時は是れ眷屬を等ずる故なり、之に準じて餘も亦之を悉せよ。又た請を爲

す時、伊醯伊醯は是れ勸請の詞なる故なり、又奉送の時の眞言の下に揭捨揭車を加ふ、是れ奉送の詞なる故なり、奉送の時四字の明を加ふ眞言、然る所以は、弱と云ふ時已成の佛、道場に降臨して同一體性、諸佛行者の頂に降臨す、吽と云ふ時行者の身に遍す、鑁と云ふ時堅密に住す、斛と云ふ時諸佛歡喜し給ふ、一切の勸請は皆是の如し、四字明の後、方に始めて娑縛賀を稱するなり、世天の散念誦には金剛部の眞言、及び雜念誦を得ざれ、恐らくは成就し難し。云云

○四種護摩の事

○○一には息災、佛部北方に向つて之を修す、初夜に之を始む。

○壇木。「廿木」椎の木、椒木、柏の木、穀の木、桑の木、毒無き甘味の木を用ふるなり。○乳木長さ六寸其の頭圓なり。桑の木、穀の木、栗の木。○供花。白色の花　○(一)藥種。」　甘草　遠志　苟杞　○加持物。」　胡麻　○相應句　扇底迦羅　○本尊、白色火天同上衣服、同上

○加持物觀念、其の觀は、尊の御口より入り、心蓮花臺に至つて衆多の光明輪と成る、卽ち一一の毛孔より光明輪雲海を流出して十方無邊諸佛の海會に供養す、其の光明輪還り來つて、普く自他身心の三毒罪障を照して、皆悉く摧破して一切の災難速疾に消滅す。云云　○入護摩の時は、先づ大日加持、次に(一)阿閦、次に本尊の印等。

○息災の本尊、佛眼、金輪、尊勝、不動、八字文殊、白衣、聖觀音、千手、十一面、準提、不空羂索、大佛頂、五大虛空藏、法花、孔雀經、仁王經、泥塔、熾盛光、北斗、焰魔天、聖天、加樓羅、(二)伎藝天。

○○二には增益、寶部東方に向ふて之を修す、晨朝に之を始む。　○壇木。黃木椎の木、椒木、栢の木、檉の木　○乳木。」長さ六寸、方に之を作る、栗の木、胡の木、穀の木。　○供花。」黃色の花、毒無く臭からず、世人所愛の花なり。　○藥種。」天門冬、桂心、地黃、訶梨勒、拘杞。　○加持物。」白米を黃に染めて之を用ふ。　○相應の句　補瑟徵迦曩莫。　○本尊、黃色火天、同上衣服、同上　○加持物觀念。此の粳米の丸供、本尊の御口より入つて心蓮花臺に至つて、無量の如意寶雲海と成る、一一の毛孔より流出して、盡虛空法界の佛菩薩に供養す、便ち還り來つて我及び彼の施主の頂上に旋轉して、無量の珍寶資具を雨らす、所求の事所願悉く成辨す。　○入護摩の時には、先づ大日、次に寶生、次に本尊の印、種子は唵字なり、芥子加持には軍荼利の小呪を用ふ。　○增益の本尊　尊勝、五大虛空藏、如意輪、持世、毘沙門、吉祥天、地天、訶利天、氷迦羅天、施餓鬼、大佛頂。

(一)藥種　中の一種を用ふ。

(一)阿閦　部主なり、醍醐には用ゐず。

(二)伎藝天　此の外に四種護摩の圖あるも略す。

(一) 調伏を用ふ。苦き木

○三には(一)調伏、金剛部 南方に向ふて之を修す、日中に之を始む。或は半夜、羅刹の日之を用ふ。

○壇木。苦木 佉陀羅木、大棗、臭木、毒木、一本は毒木花に作る ○乳木。長け八寸廻り三角 臭木、桃木、檀木、苦練木。 ○供花。蘮の花、或は青色或は紫色等の毒草毒木の花。

○藥種。鐵末。又曰く、附子。菖蒲。鬼臼。鬼箭。射干。巴豆を細抹にして和合して之を用ふ。 ○加持物。黑芥子。 ○相應の句。阿毘舍盧迦吽發吒 ○本尊。黑色忿怒 火天、同上 衣服同上 ○加持物觀念 此の芥子供、本尊の御口より入つて心蓮花臺に至つて、無量の利劒雲海と成る、一一の毛孔より流出して、盡虛空法界の一切忿怒の尊に供養す。還り來つて我及び施主を加持護念して、壓媚呪咀、四大鬼業、惡靈邪氣の病を摧破消滅して、安穩快樂を得せしむ。 ○入護摩の時は、先づ大日、次に不空成就、次に本尊の印、種子は覽字、芥子加持は降三世、調伏の本尊は六字、轉法輪、太元、不動、降三世、軍荼利、大威德、金剛夜叉、烏瑟沙摩、金剛童子、八大童子、摩利支天、大自在天等なり。

○四には敬愛蓮花部 西に向うて之を修す、一切の時に之を修す。 ○壇木」花木 椎木、板木、栢木、桑木、樫木。 ○乳木」合歡木、桑木、穀木、赤色の花木、通說。梅櫻等。 ○供花」赤色の花、世人所愛の花、歡草等の花。 ○藥種」相思子、訶利勒、天門冬、紅

(一) 天蓋云云此の處天蓋の表裏の圖あるも之を略す
(二) 九輪塔 輪塔の圖を略す。
(三) 百八反 尊勝陀羅尼を書き十二枚宛合せて一輪の中へ一つ宛入るゝなり、輪は金渡金なり、委しくは玄秘鈔にあり。
(四) 敷曼荼羅圖を略す。

花、荳蔻。 ○加持物」米の粉を赤く染めて之を用ふ。 ○相應の句」縛試迦縛拏斛 ○本尊赤色 火天同上 衣服同上 ○加持物觀念 此の團丸供本尊の御口より入て、心蓮花臺に至つて無量の蓮花箭雲海と成る、一一の毛孔より流出して、盡虛空法界の諸佛菩薩に供養す、便ち還り來つて我及び施主、彼此等の憎惡を射拂ふ、隔別厭離菩提の心、彼此一體和合して、互に無二敬愛の心を起さしむ。 ○入護摩の時は、先づ大日、次に無量壽、次に本尊等の印、種子は吽。 ○芥子加持、馬頭 ○敬愛本尊」愛染主、金剛藥叉、如意輪、阿彌陀、帝釋、千手。

以上卷十四

國譯諸尊要鈔卷十五

○如法尊勝法

○(一)天蓋空色、幡は皆黃色、四角に各〻二流、中央に一流合せて九流なり、中央の幡三丈、八流は各〻九尺、天蓋の裏に輪三股有り。鋼薄なり。 ○(二)九輪塔」百八之を造る、輪每に尊勝陀羅尼を書す、仍つて惣じて(三)百八遍なり、口授に曰く、塔の長さ三尺許り。」 ○(四)敷曼荼羅圖。 大壇に本尊を懸けず、上に天蓋を釣る敷曼荼羅の中央に塔を立て

(一) 護摩壇云云 範俊の誤りと稱す故に後には掛けずと。

(二) 印 尊勝の印 除障佛頂の印なり 彈指するにあらず 勢をなすなり。

(三) 匙 柳を以て作るを用ゆ。

舍利を安置す是れ口授なり、或は如意寶を安置す、云云 (一)護摩壇に延命を懸く、但し權僧正範俊、院宣に依つて公家の奉爲めに近來之を行せらる日、尊像を護摩壇に懸けず。云云。

○阿梨耶(聖者)烏瑟捉(佛頂)舍、尾惹耶(尊勝)曼謨陀羅尼。 ○部主、寶生○本尊、鍐○三摩、塔○諸尊、八大佛頂○御加持の眞言、キリム時の間は、伴僧は陀羅尼を念ず。○(二)印、彈指勢、次第の如く陀羅尼なり。○鈎召、胎藏次第の如くキリム。

○智拳印鍐、率都婆、陀羅尼、秘中の深秘。云云 ○乳木、骨路草、(爪の根)或は栢の木、或は松の木を用ふ、(四角に之を削る)又は活路草、(鳥爪)を用ふ。○毎日香」黑沈香、白檀、安息、薫陸、丁子、(已上は丸香散香等に用ふべし、多くは諸壇に通ずべし。若し足らざれば、本尊段に限る。) 檳榔子、天門冬、訶利勒、人參、桂心、伏苓(已上は本尊段に用ふべし。藥種は各別に之を盛り各々三度之を供す。) ○十五日香藥」沈、白檀、紫檀、煎香、以上四種の香、抹にして蜜を以つて一器に和して供すべし、(各々三度、(三)匙を用ふべし) 安悉、丁子、薫陸。(已上は蘇を以つて一器に和して之を供すべし。) 甘松、雀香、苓陵香、(以上は蜜を以つて一器に和して之を供すべし。) 乳頭香、龍腦、丁子、(以上の香、抹にして各々丸香に爲すべし、香毎に荳蔻、白芥子を加ふべし。) 右件の香藥等、諸壇丸香散香の所にて供すべし。 沈、白、紫檀、及び煎香、安息、丁子、薫陸。(以上毎日。) 甘松、雀香、苓陵香、(以上丸香) 乳頭、龍腦、荳蔻散、(以上散香以上毎日) 檳榔、天門、訶利勒、人參、桂心、

(一) 摧魔怨敵法 此は轉法輪の法の事。

(二) 彌勒 勸修寺流には彌勒たるも醍醐にては大輪明王なり。

苓(以上藥種)

○支度卷數案(別にあり)

○(一)摧魔怨敵法

○本尊、(二)彌勒○種子ㄹ(異には㕣或は㕣に作る。) ○三形迅速 ○部主、大輪金剛(師主口傳に曰く、今此部主をば本尊壇に作る。)之を繫べし。 ○諸尊、五大尊 ○印、小金剛輪の印 ○言 唵縛曰羅(二合)斫羯羅(二合)吽弱吽(引)鍐斛(引) 以上小野傳

○本尊、大輪金剛○種子ㄹ○三摩、輪 ○部主、降三世○諸尊、五大尊、(又圖の樣は奥に之あり。)

○印、小金剛輪の印○本尊、之を繫けず。 以上醍醐の傳

○勸請の句 本尊聖者轉輪尊、十六大護諸夜叉 ○又の說 摧魔怨敵轉輪尊、十六大護五千神 ○禮佛の句 曩謨阿利耶、斫羯羅、縛曰羅怛洛。 ○發願の句。(摧伏金剛、本尊聖者、摧一切魔、轉法輪尊、十六大護。諸大夜叉、部類眷屬、五千神將、外金剛部) 伴僧(委細の口傳之有り更に眞言有り。)

○字輪觀、阿等 師說に曰く、大輪金剛は彌勒の忿怒身なり、仍つて二說違ふこと無し、但し更に轉法輪菩薩法と云ふ故に、彌勒菩薩を本尊と爲す甚だ勝れたり。」

件の大輪の形像は(一)理趣會の曼荼羅に在り。(二)宗意の說に曰く、部主は大威德なり。」師主の傳なり。(三)大妙金剛、並に法花儀軌には、小金剛輪の印を以つて轉法輪菩薩の印と爲す。」其の證文を擧ぐれば、法花の儀軌に曰く、然して後、纔發意轉法輪菩薩の印を結べ、二手各〻拳に作り、二頭二小指互ひに相鉤して即ち成す、以つて壇の上に按し、眞言五返を誦せよ。眞言　唵縛曰羅二合斫羯羅二合吽引弱吽鑁斛文　大妙金剛大甘露軍拏禮焰鬘熾盛佛頂經に曰く、爾時に慈氏菩薩、(四)大輪金剛明王を現作して、遍身黃色にして大光明を放つ、右の手に八輻の金剛輪を持し、左の手一の獨股金剛杵を持して、是の六字心を說く。眞言　唵縛曰羅二合左紇羅二合吽文　(五)胎藏七集石山記に曰く、印相は戒方進力內に相ひ叉へて、檀・惠・忍・願・禪・智・相ひ合せて輪の如し、三角の光明燄あり、禪智を頂に在いて歡喜を乞ふ、是れ大金剛輪根本懺悔の印なり、彼の眞言は常の如し」右の印明本軌に出づ　圖に曰く、肉色にして左の手に蓮花を持し、其の上に三股を安く、尊形右の膝を立てゝ赤色の蓮花に坐す。文　一說に曰く、銅の筒其の內に怨敵を引入すと想へ文師說に曰く、等身に檀越の形を畫き、彼の足下に怨敵の姓名を書して彼の銅の中に籠むべし、是れ小野の甚極秘事なり。文　或人曰く、等身を取ること九寸、

(一)理趣會云云　纔發心轉法輪の曼荼羅なり。
(二)宗意　安祥寺の元祖なり、小野の二代の嚴覺より受法せし人なり。
(三)大妙金剛　已下眞言の了りまで勸修寺の證據なり。
(四)大輪金剛　呪あり、大呪は三金剛呪、中呪、小金剛呪、心呪は此の六字の中の呪なり、中の呪は此の呪に弱吽鑁斛を加ふ。
(五)胎藏七集　諸尊の各々の種子三形等の七種を集めたる集なれば七集といふ。

是れ(一)初生の等身なり。文　師說に曰く、椙を以つて乳木と爲す、又ウシヲをば藥種に入れて之を供す文　十八道を以つて之を行すべし、尤も四無量觀之を加修すべし。又秘說に曰く、散念誦の時に、右の手金剛拳に握つて彼の銅の上に置き、彼の十字の眞言を誦す是れ秘秘なり。」　○部主段、(二)又の樣。

○地鎭口傳小野の記　壇を築かざる以前に之を修す、金剛の一本には剛を銅に作る。賢瓶一口五寸に五寶等を入れて蓋を覆ひ、五色の糸を以つて之を結び、大日眞言、並に地天の眞言を誦せよ、然して後之を本地に埋め、五色の玉を以つて地の四方に埋む、五穀の粥二桶、甘露法味の眞言を以つて之を加持す、一桶は壇外に沃ぎ、一桶は墻外の四至に沃ぐ、即ち地を諸神地主に乞請ふなり、二桶にして若し不足ならば三桶に及ぶべし。

○鎭壇口傳小野の說　次に壇を築き堂を建つるの後之を修す、輪八枚槪八本を壇の八方に埋む、輪の中央に穴を穿ちて槪の峯を入れ戴かしめて槪を立てゝ之を埋む、先づ東方より之を埋むべし、各〻本方に隨つて八方天の眞言を誦して之を埋むべし、五穀の粥二桶之を沃ぐ。作法前の如し。粥は地鎭鎭壇共に之を用ふ。　以上は前後兩度に地鎭鎭壇を修する儀なり、所謂る地鎭は瓶及び玉を埋めて輪槪を用ひず、鎭壇は輪槪を埋めて瓶玉等を埋めざるなり。若

(一)初生の等身　如來初生の等身なり。
(二)又の樣　此の下に部主段及び世天段勸請の圖あり今之を略す。

(一)輪云云　以下の輪、槾、瓶の三圖あれども略す。

(二)本尊云云　異本に曰く、此流には究竟の秘事有り所謂部主に寶生尊本尊は如意寶なり、一山と一體なり、無二なりと之を觀すべし。」文

(三)眞言院云云　上古は正月十四日の晩に之れあり、先づ最初に顯教の最勝會了りて次に東寺の長者香水加持す、大内裏の眞言院ある故なり。

し前に地鎮を修せずして堂舍を造り畢つて後、一度に鎮壇を行せば、金銅の瓶を壇の中心に埋め、輪槾をば八方に埋むべし、玉は之を埋めず。」近來々くは別に修せず、鎮壇を一度に之を行ず。

○供養法」成身會、又は十八道に地天を供すなり。　○(一)輪の圖」輪八枚、各〻中心に穴を穿つ廣さ六寸。　○槾の圖」槾八本、各〻頭にホゾあるべし、長六寸、獨股。　○瓶の圖」長さ五寸に之を造るべし、蓋有り。　○支度の案等別に在り　○安鎮の法別に在り異本に之有り。

○○後七日御修法」二種の護摩壇有り、謂く息災と增益なり、息災は不動を本尊と爲し、增益は普通には吉祥天を本尊と爲す、師主極深秘の傳に曰く、(二)本尊嬉寐文

○部主、寶生尊　○印言」金剛界三昧耶の眞言之を用ふ、謂く金剛外縛して、忍願合はせ屈して寶形の如し。縛曰羅枳惹二合南怛洛二合　壇上本尊ハ一山之を勸請して、一體無二なり。云云　以上今此流には、此の究竟の秘事有り。(已一行一本に無し。)

○○(三)眞言院晦御念誦の事

寶生尊の眞言之を用ふること、增益護摩の如し、本とは月の一日に之を修す、惣じて

(一)御齊會　此は最勝講の事なり。

(二)布施堂　宮中眞言院にあり。

(三)五股　惠果和尚附屬の五股なる故なり。

(四)三度　此は竪に三度灑ぐなり。

(五)ハ一山　室生山の略。

後七日御修法の支度卷數、並に壇の樣等は別に在り。

○正月十四日の夜、御藥加持香水作法。香水は机の上に二器若し阿闍梨(一)御齊會に參する時は、(二)布施堂より諸僧相ひ共に內裏に參す、然らざる時は威儀僧等相ひ共に、右衞門の陣に參集し弓場殿に集會す。云云(三)五股は眞言院より自ら之を持す、或は他人を以つて之を持せしむべし、然る可き人之を持す。云云　諸僧皆床子に著す、次に阿闍梨立つて五股を持し行いて、香水机の下に寄り長跪して坐す、但し南殿の時には立ち乍ら法を作す、次に五股を香水器の右に置いて後、三部被甲護身、次に五股を取つて先づ右の器を加持すること二十一返、眞言常の如し。次に散杖を取つて水に漬たし、覽•鑁•を以つて之を加持すること各〻二十一返、後散杖を器の上に置く、右の器次に左も又此の如し、次に先づ右の散杖を取つて(四)三度御前に灑ぎ聖主を灑ぎ奉るなり、次に左の散杖を取つて先づ自身、次に諸卿及び宮中に灑ぐ、此間は五股を左に之を持す、次に右に五股を取つて、惣じて逆順に加持すること各〻三返して、而して後に袖の中に於て五股を持し、兩手を額に上げ少しく頭を低くし目を閉ぢて(五)ハ一山を想へ、此の如く觀念し了つて後立つて本の床子に

(一)三摩圖あれども之を略す。

著く、（或本に曰く、聖主の御身一體無二にして、御願成就、不祥の事を祈るべし。）御藥加持師主之を勤仕す、其の作法は、立つて而して少しく屈するなり、還つて師主語つて曰く、南殿に於ては立つて之を勤め、清涼殿の時には跪いて之を勤む文 勤修寺僧正の傳は、左の膝を突き右の膝を立てゝ、護身並に二器の灑水を加持す、次に雙膝俱に突いて主上に灑ぎ、次に初の如く左を突き右を立てゝ、自身及び諸卿法界に之を灑ぐ、小野の傳には、左の膝を突いて護身等了つて、次に加持二十一返、即ち自身等に灑ぎ、次に雙膝俱に突いて主上に灑ぐ、次に加持等。云云

○○寶生尊（增益）十八道、或は金界成身會に之を修すべし。

○種子ボ○(一)三摩●寶珠　○部主吉祥天　或は大日　異に曰く、或は尊勝　○諸尊、三十七尊　○印　左の拳臍に安し右の羽仰げて膝の上に置く。（異本に曰く、本尊の印言は、羯磨會寶生尊の印の如なり。）　○言　唵羅怛曩（アラタンナウ）二合三婆縛怛洛（サンバンバタラ）二合　○如意寶珠の印（兩手を以つて相ひ叉へ、頭指相拄ふ。其の母指を屈して掌内に入れて相叉（よ）へ、私に曰く外縛なり（異本））　唵帝儒（ナイジュジンバ）入縛羅（バラ）、薩縛羅他（サダ）二合婆陀迦（キャシッチャシッチャシンダ）悉薩悉薩眞跢摩（マニ）捉囉怛那（アラタンナウム）吽

○禮佛の句　○發願の句　○勸請の句　○正念誦本呪　○字輪觀阿等

○入我我入觀　○次に本尊印（先の如し）　○次に寶印（先の如し）　○次に羯磨會寶波羅蜜印言。（印相寶生尊の如し異に無し。）　○次に同會寶菩薩印言。（二拳相ひ合はせ進力寶形の如し。異に無し。）　○次に三摩耶會寶生尊の印言　○次に同會寶波羅蜜印言。（印相寶生尊の如し。異に無し。）　○次に同會寶菩薩印言　○次に檀波羅蜜印言（右の手火空相鈴して胸に當つ。）　眞言　唵縛迦婆底怛那底婆帝毘娑利惹普羅娜難（ナン）、娑縛賀　○次に毘沙門印言。（虛心合して雙地を掌に入れて相ひ叉へ、二空立て並べ、水火立て合はせて二風、火の背に屈して一寸許り相ひ著けざれ。）

唵吠室羅摩拏也、娑縛賀　○次に吉祥天印言　八葉の印　唵摩訶室哩（二合）野曳、娑縛賀　○次に正念誦　羯磨會眞言　○次に字輪觀　阿縛羅訶佉　○次に本尊加持　○次に散念誦（佛眼、大日、(一)上の十呪。一字。）　○散念誦返數（佛眼二十一返。大日百返。本尊千返。如意百返。(二)餘は皆百返。）　○次に後供養等作法（常の如し）返。一字百返。）　○次に吉祥天　大法に就いて之を修すべし　○種子、（シリ）○三摩、(四)寶珠　○部主、寶生尊　○根本の印　(五)八葉の印　○又の印、內縛三股の印　○曩謨摩訶室哩耶提尾　○發願の句　吉祥天女　○勸請の句　○正念誦　本呪　○字輪觀　阿等

師說に曰く、正念誦の始め、先づ定印を結んで觀念せよ「我が心月輪の上に室哩字有り、遍體皆悉く室哩字なり、此の字變じて摩尼寶珠と成る、我が身又體を擧げて如意寶珠なり、是の珠身變じて吉祥天女の身と成るなり。」　○入我我入觀（大法の如し。）

(一)上の十呪云云吉祥天より以上の十種の眞言を散念誦に唱ふることなり。
(二)餘は皆百返右上の十呪のこと
(三)吉祥天讃。十二の名號なり。
(四)寶珠　本圖あるも略す。
(五)八葉の印　印上に寶珠を觀ずるなり。

◎駄都法息災に之を行ず。

○種子　ぁ○三摩　駄都　○尊形、釋迦金輪○部主　大日金界　○諸尊、三十七尊

○印、金輪の印金剛界遍照尊の印なり。秘秘。　○言　曩謨三曼多沒駄南、唵步嚕唵　○勸請　本尊界會如來駄都、金剛部中諸聖衆。　○禮佛の句　曩謨沒駄舍利羅　○發願の句

如來駄都　本尊は釋迦金輪を繫くべし、壇の中心に舍利塔を安す。云云

或る本に曰く、相傳の口授に曰く、此の法は珠に末法の衆生を益す、現世當生の求願滿足せざること無し、次第口傳の事、努力努力妄りに非器の衆生に授くべからず。保延六年十二月十六日、甲(一)已講に授け了る、件の鈔は勝具眠院僧都の記、寛命持本。云云

又の異本に之あり。

◎如意寶珠法東に對す異本に曰く、本即增益　彼主。是南主

○種子、阿○三摩駄都、駄都變じて嬉寀と成る秘中秘　○部主、宀生○諸尊、三十七尊○本印言、兩手を以つて相ひ叉へ、二頭指拄へ、其の大母指を屈して掌內に入れて相ひ叉ふ、此の印亦大精進嬉寀の印と名づく、即ち陀羅尼を說いて曰く、唵帝儒入縛羅薩縛羅他二合娑陀迦悉囉悉囉眞跢摩抳囉怛那吽　○部主印言(二)金本誓の印言なり

○道場觀　「莊嚴珠妙寶壇の上に、七寶所成の寶臺有り、珠鬘瓔珞圍繞懸列せり、其の寶臺の上に閻浮檀金白銀合成の梵篋有り、色相淸徹にして威光赫赫たり、其の梵篋の內に阿字有り、光明を放つて法界を照す、此の阿字變じて圓滿月輪と成る、光明澄淨にして其の色潔白なり、此の月輪の中に如來の陀都有り、陀都變じて嬉寀と成る、香風、天に匂ひ密雲空に覆ふ、萬物を生長し一切衆生を利益せしむ、水底陸地利益を蒙らざること無し。

○香藥　雄黃、苟杞、牛黃　○正念誦眞言　本呪　○字輪觀　阿縛羅訶佉

○禮佛の句　南無震陀摩尼。　○發願の句　震陀摩尼。　○勸請　本尊界會震陀摩尼、寶部會中諸聖衆。

◎避蛇並與砂子別に在り

御本に曰く建保六年二月二十七日遍知院に於て御本を以つて書し了る

金剛佛子憲——生年廿七

以上卷十五

(一)已講　明海なり。

(二)金本誓　金剛界三摩耶會の印言なり。

國譯諸尊要鈔　終

國譯玄秘鈔

國譯玄秘鈔目次

第一卷　○佛眼　○金輪　○大佛頂　○文殊（一字六字）　○五大虛空藏
第二卷　○愛染王　○光言　○無垢淨光　○轉法輪　○尊勝（如法普通）
第三卷　○請雨素多覽　○普賢延命　○法花　○六字經　○仁王經
第四卷　○北斗

以上

玄秘鈔とは法の玄秘密奥深の事を記し玉鈔といふ、本鈔は勝意なり、倶胝院運作に元海の口説をし記されたるものなれば醍醐山相承の趣なり、故に金寶鈔、誄尊要鈔、玄秘鈔の三部抄の中に最も肝要とす。之に由りて知院の道教方の末流には三部抄の中玄秘抄を以て先とするも當流は後となす。

卷一

○(一)佛眼法　息災に之を行ず
○道場觀　此れより以前の作法は常の如し。「樓閣の中の曼荼羅の內に頞哩字（キリク）あり、三重八葉の蓮花と成る、上に阿字あり、月輪と成る、上に頞哩字あり、蓮花と成る、上に𑖭字あり、字變じて金剛眼と成る、眼變じて佛眼妙妃と成る、身水精色の如し、五佛の冠を戴き、法界定印に住す、內重八葉の前に𑖀字あり、金輪尊と成る、右に廻て八大菩薩あり、第三重の前より右に廻て步擲等の八大明王あり、次の院に四攝八供等圍繞せり」。　次に如來拳印、七處を加持す。

（一）佛眼は諸佛能生の母なるが故に殊に第一卷の初に出す、佛眼は一なれども五眼に隨ひて功德に於ては五眼皆備はれり、故に此の尊の印契に五眼を具足するとなり、五眼の名義は智論三十九十七葉に示す。

（二）請本尊五眼の印明を以て召請す。

（三）請金輪金輪の印にて召請すること。

（三）七曜云云七曜、金剛手、步擲金剛王等皆召請すなり。

（四）五股印　內五股。

（五）虛空藏外縛して二頭寶形並べ立つ。

（六）虛空庫金剛合掌して二頭寶形二大並べ立つる普供養の印。

（七）金剛拳　二拳相合す印。

（八）步擲　金剛合掌。

○次に大虛空藏　○次に小金剛輪、○次に送車輅、○次に諸車輅、○次に(一)請本尊、歸命、嚕、翳醯吽。印明等　○次に(二)請金輪　部嚕唵（ボロム）、翳醯吽　○次に(三)七曜惣呪印、○次に金剛手印明、八大菩薩惣請、○次に步擲等八大明王、○次に金剛王、○次に四攝並に拍掌　○次に不動結界、○次に火院、○次に大三摩耶、○次に閼伽、花座、○次に振鈴、○次に四攝八供、次に現供、讃、禮佛等、　○次に本尊印、五眼の印眞言常の如し、○次に金輪の印、○次に七曜別呪印、若しは總呪印、任意　○八大菩薩印言　○金剛手　(五)五股印　歸命吽　○次に文殊　梵𑖀印　暗　○次に(六)虛空藏　寶印　怛洛　○次に轉法輪　小金剛輪印　吽　○次に觀音　蓮花印　頞哩　○次に(七)虛空庫　寶印（合掌異には金掌）　唵　○次に(七)金剛拳　拳印　惡　○次に摧一切魔怨　普賢三摩耶印　迦　○次に八大明王印眞言　○(八)步擲（通印）唵頞哩（キリク）、部（ボロム）唵、吒嚕（タロム）吽、輸嚕（シュロム）吽、○次に(九)降

(九)降三世　順逆三轉言二反。

(一)大咲印　軍荼利明王なり、二無名指は著くるなり

(二)常の如し　鈴印の中にあり。

(三)或が曰く理大理趣房なり。(四)破宿云云　此の印一切宿曜障を摧くなり。(五)固く押す　指の節を逼めて强く押す。(六)二種　瑜祇經に出でたり。(七)小野の說　急時にして時迫らば惣眞言を用ふることを示す。

三世印常の如し、唵蘇婆儞蘇婆吽縛曰羅吽發吒　○次に大威德内縛二火合せ立て、唵吽惡吽

○次に(一)大咲印先づ二中指を以て各の二無名指の背の上に芯在く、二無名指の頭を柱へ、二小指頭しを開て直く立て相ひ去ること一寸許、二大母指二無名指の第二の節の側の文を押して腕を合はせ、二頭指屈して相ひ　唵縛曰羅阿阿の字異に無し、吒訶沙吽吽　○次に大輪印二手金剛拳にして、檀惠と進力と四度互に鉤結す、　唵縛曰羅遮羯羅吽　○次に馬頭印常の如し　唵賀耶枳里波、吽吽吽泮吒　○次に無能勝虛心合掌して、十輪の端相ひ拄へ密合ならしむ、　唵戶魯戶魯戰拏里、摩蹬耆吽泮吒　○次に不動印、

(二)常の如し、唵阿遮羅迦娜戰拏薩駄野吽泮吒　○吉祥成就印、內縛して二中指を申べ立て、二頭指を以て二中指の背を絵ず、二大指を並べ立つ、　唵縛曰羅金剛室利吉祥佛眼摩訶大也室利吉祥白衣觀音阿禰底也室利日曜索摩室利月曜央誐羅迦室利火曜沒羅賀沙跛底室利木曜戍羯羅室利金曜舍儞始者羅始制帝室利土曜摩賀大也三摩曳普也室利大普賢吉祥諸大曜婆縛賀、或が曰く、此の明の前後は佛眼、中は七曜なり、七曜の障難を摧伏して速に悉地を成ずる意なり、(三)或が曰く理七曜は佛眼の所變なり、和光同塵は利益衆生を以て本となす、故に內院に安く、云云

○次破(四)宿曜障印內縛し二大指を出して(五)固く押す、　明に曰く　薩羅那乞叉怛羅宿曜三摩曳平等室利曳吉祥扇底迦羅息災戶嚕事也婆縛賀是を破宿曜一切不祥の印言と名く。　以上(六)二種の眞言は、散念誦に尤も誦すべし、○次に入我我入　○正念誦　○次に本尊加持　○散念誦、○五供養等常の如し、

(七)小野の說は、金輪佛頂の所には一字の印明、八大菩薩の所には金剛手の印明、八大明王の所には步擲明王の印明、或は不動を用ふ、護摩の部主には金輪、諸尊段には七曜、並に八大菩薩、八大明王文　八大菩薩には或る說は一切諸に作る、異には一切を菩薩の眞言之を用ふ、謂く歸命乞叉拏入多羅焰欠娑縛賀」普印異本　(一)法務の御說には慈救呪を用ふ、八大明王には、胎藏一切持金剛の呪之を用ふ、謂く吽吽泮吒髯髯、娑縛賀」

(二)三寶院權僧正は、正しく金剛界に就て此の法を修したまふ、仍て初鈴以前には伴僧は金剛界大日の眞言を誦し、(三)振鈴の後には本尊佛眼の呪を誦す」。(四)烏羽僧正範は胎藏に依て之を行じたまふ、初鈴以前には伴僧は胎藏大日の阿尾羅吽欠の眞言を誦す。彼の僧正の傳に曰く、胎藏に依て修する是れ勝說なり文　○小呪の印言、一拳金輪の軌に出づ」金剛合掌、二頭指を並べ屈して甲を合はせ大母指を並べ立て頭指の側を押す。　曩莫三曼多沒駄南、引唵沒駄引路者儞、二合引婆婆賀　以上三行異本に之れ無し。○勸請の句　佛眼佛母大覺尊、八大菩薩諸薩埵　或は說く、金剛吉祥佛眼尊。」　次の句は上の如し。○發願の句　殊勝金剛密號○禮佛　阿利也沒駄路左曩梵號尊像。大聖妙吉祥說除災敎令法に曰く、佛眼尊は左に(五)五眼の契を持し、右は如來拳に作くる文。菩提場所說一字頂輪王經の二に曰く、應に佛眼明妃の形を畫くべし、女天の如くして寶蓮花に坐して種種に莊嚴せり、身金色の如し、目に(六)衆會を覩る、(七)輕き穀の衣を著し、肩に絡ふて被たまへり、右の手に如意寶を

(一)法務　醍醐の定賢法務大僧正なり。

(二)三寶院云云　醍醐にては金界の法を用ゆ、小野方は範俊は胎藏を用ゆ、何れも其の深義を盡す。

(三)振鈴云云　餘の法なれば振鈴以前は佛眼の呪なれども今は本尊佛眼なる故に常とは振り替るなり。

(四)烏羽僧正　台家にては覺融なるも言家にては範俊なり。

(五)五眼の契　五股を持する事、次の如來とは胎拳なり、佛眼の法を三摩耶形に五古を深秘とする此の義なり。

(六)衆會　衆生を見ること。

(七)輕き穀衣　薄絹のこと。

持し、左の手は施願なり、圓光周徧し、熾盛の光明あり、身儀寂靜なり文　内に異には内を同に作る曰く、金剛眼の形佛眼佛母如來と成る、白蓮花に坐す、身相白色にして五智の冠を著して法界定印に住したまふ文　○(二)圖に曰く、肉色定印にして蓮花に坐したまふ。」　○(三)曼荼羅の事。瑜祇經金剛吉祥大成就品に曰く、時に金剛薩埵一切如來の前に對して、忽然として、一切佛母の身を現作して、大白蓮に住す、身に白月の暉を作す、兩目微咲して二手臍に住めて(四)奢摩他に入るが如し、一切の支分より十凝誐沙俱胝の佛を出生す、一一の佛皆な本所出生を禮敬することを作して、刹那の間に於て、一時に化して、一字頂輪王と作る、皆な輪の印を執れり。○時に本所出生の大金剛吉祥母も、復た畫像曼拏攞の法を說きたまふ、白淨の素絹を取て、自身の量に等ふして、之を圖畫せよ、凡そ一切瑜伽の中の像は皆な(五)身の自坐と等量にして之を畫け、中に於て三層八葉の蓮花を畫くべし、中に我が身を畫け、我が前に當て、一の蓮花葉の上に一切佛頂輪王を畫け、手に八輻の金剛寶輪を持す、此の次に於て右に七曜使者を旋布せよ、次の第二の花院。頂輪王の前に當て、金剛薩埵を畫け、次に右に旋て八大菩薩を畫け、各の本標幟を執れり。次に第三の花院に右に旋て、各の八大金剛明王を畫け、

(一)圖に曰く　石山の圖位なり。
(二)曼荼羅の事　地藏院深賢の作實歸抄にあり、佛眼曼荼羅の請來は後入唐會の理趣會の曼荼羅の奥にあり。
(三)奢摩他　定の梵語なり、之には止と翻ず、即一切の煩惱の結を止む
(四)身の云云　行者の等の身といふことなり。

又花院の外の四方の面に於て、八大供養及び四攝等の使者を畫け、皆師子冠を戴けり、是を畫像法と名く、(一)曼荼羅も亦是の如し文　同經の註に曰く、(二)法將阿闍梨の曰たまはく、八大菩薩は理趣經の如し、八大金剛は攝一切佛頂輪王經の說の如し。又八供養及び四攝等の標幟は金剛界の如し、七曜の形は(三)別に之を授く。文　○(四)通道場觀略出經に依て之を鈔す。　如來拳印を結で、諦に觀想すべし、虛空界に於て鑁字あり、毘盧遮那佛と爲る、由し慈悲を具して、乳を流注す、兩一本には兩を雨に作る邊の輪圍山より便ち甘露の大海と成る、其の海中に於て波羅字あり、以て龜形と爲る、由し金色の如し、其の身廣大にして無量由旬なり、龜の背の上に於て、奚哩字あり、其の字變じて赤色の蓮花と爲る、其の花三層なり、層に八葉あり、臺蘂具足せり、其の臺上に於て、波羅•吽•鑁•等の三字あり、以て須彌山と爲る、其の須彌山の頂上に於て、鑁•吽•怛洛•奚哩•惡•の五字あり、五峯の寶樓閣と爲る、大殿の四角正等にして四門を具足す、軒楯周環して四重の階道あり、繒綵珠網花鬘を以て嚴飾を爲す、種種の雜寶鈴鐸瓔珞を懸く、復た其の外に於て、無量の(五)劫波樹行列せり、諸天妙聲を以て歌詠し音樂す、阿修羅莫呼落伽等、金剛儛を以て娛樂する所なり、彼の殿內に於て曼荼羅あり、八大

(一)曼荼羅云云　此は敷曼荼羅も是の如しといふ心か
(二)法將阿闍梨　龍智阿闍梨。
(三)別に云云　慈覺請來の攝災決に之れあり。
(四)通道場觀　此の法に局るにあらず、故に通といふ諸尊に通ずるなり
(五)劫波樹　極樂は七重の寶樹あるなり、且つ彌陀の光明にて一切皆金色にして晝夜分れず、此の木の花の開不開を以て晝夜を知る。

(一)如來部輪　曼荼羅に五部あり、中の中部輪なり。
(二)師子の座　五獸を以て五佛の坐とすること守護經にもあり。
(三)象　大力無比の故に菩提心の表相なり。
(四)馬　馬は七寶の一なり、故に寶部の坐となす。
(五)迦樓羅　生死の大海の大龍を食す、故に羯磨部を生死の大海の衆生を掘くふ、故に佛部の座となす。
(六)圓覺錄　禪林寺宗觀別錄のこと圓覺は寺號なり。

金剛を以て柱として莊嚴と爲す、」(一)如來部輪の中に三種子の字を想へ、中央に心字を想へ、其の字の左右に阿字を想へ、其の三字を以て、天の微妙四面方等の(二)師子の座を成就す。」金剛部の中に三種子の字を想へ、中央に哦字を想へ、其の左右に於て、吽字を想へ、其の三種子の字を以て成する所なり。金剛部の中には(三)象を以て座と爲す。」寶部の中に三種子の字を想へ。中央に廢字を想へ。左右に怛洛字を想へ。其の三種子の字を以て成ずる所なり。寶部の中には(四)馬を以て座と爲す」蓮花の中に三種子の字を想へ。其の中央に磨(マン)含字を想へ。左右に頡唎を想へ、此の三種子の字を以て成ずる所なり。蓮花部の中には孔雀を以て座と爲す。」羯磨部の中に三種子の字を想へ。中央に惡字を想へ。左右に惡字を想へ。其の三種子の字を以て成ずる所なり。羯磨部の中には(五)迦樓羅を座と爲す。」

私に曰く、其の部中の本尊に隨て、此の觀を作すべし。其の座の上に於て本種子三摩耶形を觀ずべし。本尊種子三昧耶形は各別の法の如し。

大師請來錄に曰く。金剛頂瑜伽中略出誦念經一部四卷。」異に曰く。八十一枚　(六)圓覺錄に曰く、金剛頂瑜伽中略出念誦經一部六卷。不空三藏譯の策(サウ)子二帖。紙四十四帖。」同經一部

(一)大內鈔　仁海の作。
(二)中臺云云　異本には此の所に曼荼羅あり。
(三)護摩達磨の說　仁海の作。

四卷。舊本には譯者の名を著さず。先請來の經と其の文少違せり。」(一)大內鈔に曰く、佛眼の三形、法三の御子の傳は如意珠、後入唐の傳は圓光の中に五眼なり文

○(二)中臺種子の事。　欠字、三形獨股、攝眼卷如說なり。或は三形金剛眼。　異本裏書に曰く。或は哦字。五股三股。又は佛頂眼文　嚕字。(三)護摩達磨の說。三形は佛頂眼なり。師說に之を用ふ。　室利字。三形五眼の契、謂く五股杵。是れ靈巖寺の傳なり。私に曰く。縛日羅室利は此尊の名なり。仍て此の字を用ふるか。　沒字。三形金剛眼。是れ大理趣房の傳なり。私に曰く、小呪の初の字を取るか。

○初重八葉の事。　前の葉に當て、金輪の種子。部(ボロム)哦吽。」普通曼荼羅の圖には釋迦金輪なり。唐の圖には左の手を胸に當てゝ蓮花を捧げ、上に輪を安ず。右の手は施無畏に作る。」私に曰く、是れ最勝佛頂か。彼れに金剛の號あり。護摩達磨に此の尊の印言を出すに大勝金剛の印言を擧ぐ、然れば彼の尊を圖すること、あるべきか。或人の曰く。金輪は七曜の主なり。故に初重に安ず。眞言と曼荼羅と其意同じ、古本の曼荼羅に、金輪の所に大勝金剛を安ず。云云　右に遠て餘の七曜次の如く日月火水木金土の七曜を圖す。私に曰く、外部の天等と雖親たり本尊の敎勅を受くる故に初重に之を圖す。　種子は瑜祇經金剛吉祥の明の字なり。

○第二重八葉の事。　前の葉に當て、金剛手を安じて、之を始めと爲(し)て右に遠て八大菩薩を安ず。八大菩薩とは、祇經の註に曰く、八大菩薩は理趣經の如し。云云。故に今は理趣經に依る。　金剛手●吽。文殊●暗。虛

空藏•怛洛。轉法輪•吽。觀音•頡哩。虛空庫•唵。　金剛拳•惡。摧一切魔•郝。攝一切佛頂輪王經の說は、攝眼毒女鈔に曰く、此曼荼羅の八大菩薩の名字は此の經の說に依る。種子に於ては、彼の鈔の奥に私に之を出す」。　金剛手•吽　妙吉祥•室利。虛空藏•ぞ。慈氏•瑜。觀音•薩。地藏•訶。除蓋障•惡。普賢•阿なり。問て曰く、金剛手文殊虛空藏觀音の四菩薩は、二經の說同體なること、顯然なり。餘の四菩薩の兩說同異如何。答ふ有る人曰く、餘の四菩薩の兩說其の體不同なり文　今案じて曰く。餘の四菩薩の名不同なりと雖、其の體は實に一なり。謂はゆる、轉法輪は是れ慈氏なり、故に小野大鈔に貞觀寺の傳を出して曰く、轉法輪は卽ち慈氏なり。」云々、又眞興の三部記に曰く、轉法輪菩薩は金剛輪を現ず。」云云　又三部の記に曰く、虛空庫又は地藏なり。」云云。故に小野の大鈔に曰く、虛空庫菩薩無能勝を現ず」云云。　虛空庫は是れ地藏なり。私推して曰く、金剛を月の第十六分圓滿の相に譬ふ是れ卽ち除蓋障の義なり。　金剛拳は、是れ除蓋障なり。　摧一切魔は是れ普賢なり。故に護摩達摩に此の菩薩の印を出すに普賢三摩耶の印を出す。又三部の記に曰く。摧一切魔。步擲金剛を現ず。」云云、　是れは各別の證據此の如し。惣じては攝一切佛頂經の八大菩薩は、卽ち八大菩薩曼荼羅經の八菩薩なり。然らば彼の曼荼羅經の說は通じて曼荼羅の儀式なり。豈に此の尊の曼荼羅の八大菩薩、彼の經の八菩薩に非らんや。能く能く之を思ふべし。　又攝眼毒女鈔に、攝經の八菩薩を列す。此れ亦證據なり。但し祇經の註の文、理趣經に讓て攝經に讓らざるは、理趣經四會の曼荼羅に、分明に八大菩薩の形像を圖するが故に之

を讓る。攝經には八大菩薩の形像を說かざる故に之を讓らざるか。問ふ理趣經釋の摧一切魔怨菩薩をば本と是れ慈氏なりと曰ふと云々。然るを今何ぞ普賢菩薩と云ふや。」答ふ有人の曰く、本とは是れ慈氏とは彌勒を指すに非ず。是れ本と慈心を備ふる氏といふ意なり。」文の此の起盡を見るに義優美なり。　理趣釋に曰く、何を以ての故に一切有情を調伏して、卽ち菩提なりとは、本とは是れ慈氏菩薩なり。此の菩薩內には慈定に入て深く難調の諸天を矜愍し、外には威猛を示して受化を得て引て菩提に入らしむ」云云。

○第三重八葉の事　金剛手の前の葉に降三世を安じて始と爲て、右に遠て八大明王を安ず。降三世•吽。大威德•頡哩。大咲•吽。大輪•吽。馬頭•吽。無能勝•吽。不動•慽。步擲•虐なり。」攝眼毒女鈔に、降三世を前葉に安じて始と爲す、是れ金輪の左に金剛手を安ずる時には、前の葉に降三世を安ず。私に曰く、此の說を吉とす、護摩達摩並に大鈔には、前の葉に步擲を安じて始とす、是れ金輪の右に金剛手を安ずる一本なり。善く能く之を思ふべし。　○佛眼印の事。金剛界護摩鈔の法三御子中に曰く、五眼とは進力異には力を忍の間、力願の間、禪智の間、禪智の末、悉願の端下の間、檀惠の間是れなり」云云。

(一)息災　總じて此に明す所は皆諸星の障を息むる法を列するなれども故に息災なり。

(二)形相　是れ大日金輪。

(三)同用法　慧運の請來の金輪に就て委悉なり。

(四)大日劍印　廣略あり、廣は青龍寺の相傳、略は仁海廣本の要を取りて記し玉ふ本なり

(五)孔雀王云云　金輪と孔雀明王とは同體の故なり。

平治元年六月二十三日之を鈔し了ぬ。

◎金輪法(一)息災に之を行ず。

「壇上に香水海あり。海の中に妙高山あり。山の上に大曼荼羅あり。その中央に七師子の座あり。その上に白色八葉の大蓮花王あり。中臺に勃嚕唵字あり。字變じて十二輻の輪と爲る。輪變じて大日如來一字頂輪王と成る。金剛の寶冠を戴けり。服素月の如し、輪鬘を首飾と爲す。種種の衆寶を以て法身を莊嚴す。智拳大印を持す。(二)形相金剛界大日の如し　一一の葉の上に右に旋て輪王の七寶圍繞せり。」前の葉に佛眼尊を安ず。　○或る傳に曰く、種鑁。」七寶とは輪寶、象寶、馬寶、珠寶、女寶、主藏臣寶、主兵臣寶なり。　○印。一字頂輪王の印なり。(三)同用法、並に(四)大日劍印に出づ。　先づ合掌して、左右の二無名指二小指を以て、右左を押して相ひ叉へて掌に入れ、二中指直く竪てゝ第一の節を屈して、頭し相ひ拄へて劍形の如くす。二大指並べ立て、二頭平に屈して兩節の頭相ひ拄へて二大指の甲の上に於く。　○眞言　曩莫三曼多母駄南引唵部嚕唵三合　若し所求一切の事を祈請することあらば、此に於て(五)孔雀明王の眞言を加ふべし。此の眞言を加用する事は究

(一)智拳印　是れ大師の御傳なり。

(二)此の印云云　金輪の軌に十方佛剎中唯智拳印ありと說く故に智拳印を以て秘印と習ふ。

(三)行法の時云云　阿闍梨は加用の眞言を誦し秘呪なれば伴僧は皈命ボロンのみを誦するなり。

(四)小野の秘事　一字金輪孔雀明王にして而も速疾の尊なり。

(五)或は十佛頂云云　本所に曼荼羅の圖あり略す。

竟の秘事なり。此の義金輪王佛頂略念誦法、通一切佛頂同用、並に大日劍印と云ふ書に之あり。件の同用法は安祥寺の祿の文なり。　○又の傳には(一)智拳印を用ふ。」義範、範俊、三寶院權僧正、大教院覺意僧都等、皆(二)此の印を以て此の法の秘事とす。勸修寺法務寛信授けて曰く。　金剛外縛して、忍願直く竪てゝ上の節相ひ拄へ劍形の如くして、進力各の中指の背に著く、是れ金輪究竟の秘事なり文。私に曰く、此の印は金剛界五佛灌頂の中の遍照尊の印なり。(三)行法の時、阿闍梨加用の眞言は上の如し。伴僧は歸命勃嚕唵なり。　○金打て後の眞言　曩莫薩縛沒駄冐地薩怛縛二合南、阿引尾羅吽欠。　○御加持眞言辨事佛頂の眞言なり、五佛頂經に出たり。　曩莫三滿多沒駄南、唵吒嚕二合滿駄、娑縛賀。　○勸請の句　一字金輪轉輪王、八大佛頂諸轉輪。　○禮佛の句　沒駄瑟尼遮羯羅　○部主佛眼普通の說。　孔雀明王(四)小野の秘事、　○諸尊　三十七尊、(五)或は十佛頂用否任意　瑜伽儀軌に曰く。不空譯。　兵寶持金剛無能勝爲帥佛眼如來母、共寶共居八方と。

又曰く、十方刹土中、唯有一佛乘、如來之頂法、等持諸佛體、是故名智拳と。

注進一字金輪御修法支度の事

合　蘇蜜、名香沈　五寶　金銀　瑠璃　琥珀　眞珠。　五香　沈　薫陸　白檀　丁

字　龍腦。　五藥　檳榔子　遠志　人參　桂心　甘草。　五穀　稻穀　胡麻　大麥
小麥　菉豆　壇一面。附爐桶　脇机二前　燈臺四本　禮盤一脚並に半疊　壇敷布一段　大幕一帖　壇供並に御明。
自餘の雜具等常の如し。阿闍梨　伴僧　承仕　駈仕　見丁　淨衣白衣
右注進件の如し。　長承三年七月一日阿闍梨權少僧都寛信　一七日五月二日より始め行じ同九日結願、白川泉殿の御所に於て之を修す。

一字金輪御修法所

奉供　大壇供六十三箇度　護摩供六十三箇度　諸神供九箇度
奉念　佛眼眞言二萬五千返、孔雀明王眞言六萬三千返、本尊眞言一百二十萬返、白
傘蓋佛頂眞言六千三百返、光聚佛頂眞言六千三百返、高佛頂眞言六千三百返、勝佛
頂眞言六千三百返、不動眞言六千三百返、大日眞言一萬九千返。
右　太上天皇御息災安穩增長寶壽御願圓滿の奉爲に今月四日より今日に至る並に三七
箇日夜の間十六口の伴僧を率ゐ殊に精誠を致して右の如く修し奉る。
長承三年七月二十五日　阿闍梨權少僧都法眼和尚位寛信

(一)圓宗寺一字金輪御修法所

(一)圓宗寺云云、今の妙心寺の地、半分は掛り半分は仁和寺なり妙心寺近所に舊跡あり。

奉供　大壇供二十一箇度　護摩供二十一箇度　諸神供三箇度
奉念　佛眼眞言三千九百返、大日眞言一萬八千九百返、一字金輪眞言一十八萬九千
返、藥師眞言一萬八千九百返、延命眞言一萬八千九百返、不動眞言一萬八千九百
返、(一)護摩眞言二千一百返。
右　聖朝安穩增長寶壽兼ねては天下安樂萬民豐樂の奉爲に始め今月二十一日より同二
十八日に至る七箇日の間八口の僧侶を率ゐ殊に精誠を致して修し奉ること件の如し。
永保二年十二月二十八日行事威儀師、傳燈大法師恩紹、阿闍梨僧正法印大和尚位、
或る傳に曰く。大佛頂の法には、(二)トロバ香を煎じて鉢に入れて、壇の中央に置て之
を修し、結願の後之を服す。或は沐浴す。是れ遍知院の傳なり。文　私に曰く、大佛
頂經第七に委說あり、見るべし、此の事彼の說に見えたり。集經第一に曰く、佛頂法
には佛の左邊に(三)淨箱子を安じて金剛般若經を盛れて日日之を讀め文。　或る傳に曰
く、大内鈔に、爐壇第二(異には二を一に作れり)重の緣に(四)八輪を書すべし文　熾盛佛頂經威德光
明儀軌、熾盛光儀軌、熾盛光法要此等を委しく見るべし。此の外具さには秘錄攝眼毒
女、御作次第、小野攝轉鈔に見えたり。

(一)薄摩眞言火天の呪と加持物の呪と兩說あれども先は火天の呪宜し卷數小野方は大日の眞言了りに出す醍醐は佛眼の次に出す。

(二)トロバ香是の至て難得のものなり、名義集に鬼神國より出づと、此の方には之れ無き故に翻せず、或は香草といふ、舊課に白茅草といふ。

(三)淨箱子　經箱のこと。

(四)八輪　輪を八つ置くなり。

(一)遍知院義範は故に息災に修す。義範は調伏に修す。

(二)道場觀　此の法は本尊に智拳二印にあり、一字金輪にして一法界定印にして一切佛頂輪王とする一切佛頂を以て攝一切佛頂を以て秘傳となす。

(三)印の上云云　經に云く、法界定印に住す、其の上に右の八輻の花輪を持す、其の上に右に旋らして八色の相を現ず、第一の赤色の輪に光聚佛頂あり、左の手に蓮花を持し第二の上に佛頂あり、第二の蓮の輪等云云と、經は八佛頂を觀ずる樣に說く。

(四)如來頂の印　此の幟盛光佛頂に頂よりして幟盛の光を放つ故なり。

○攝一切佛頂輪王法

敬愛本說　調伏小野　息災(一)遍知院　時に隨て之を行せよ。

○(二)道場觀「虛空法界の中に大金剛峰寶樓閣あり、高ふして中邊なし、諸の妙寶を以て、莊嚴校飾す、無量百千の光明照耀せり、其の中央に大蓮花王あり、花臺の上に心阿阿の三字あり、七大師子王と作る、その上に阿字あり、大月輪と成る、輪變じて八輻の金剛焰輪と作る。輪の形廣大にして三千大千世界に遍ず。輪臍の中に於て白蓮花王あり、その上に惡字あり、變じて八輻の金剛輪寶と成る、其の輪變じて攝一切佛頂輪王の身と成る。(即ち大日なり)是れ如來形紫摩金色にして大丈夫の相なり、法界定印に住せり。その(三)印の上に於て八輻の輪を持す。其の攝佛頂輪の身より八色の光を放つ。大輪の一一の輪輻の間に八方八色の金輪を出生す、其の八方の輪臍に於て八種の蓮花を出生す、その蓮花に於て八佛頂輪王を出生す。即ち前の赤色花輪の中に恒嚕唵字あり。變じて(四)如來頂の印となる。印變じて光聚佛頂と成る。前への右隅み黃色花輪の中に吒嚕唵字あり、變じて黃色の蓮花と成る。蓮花變じて發生佛頂と成る。右邊白色花輪の中に陀嚕唵字あり。字變じて白傘蓋と成る。傘蓋變じて白傘蓋佛頂と成る、右後隅雜色花輪の中に訥嚕唵字あり、變じて利劍と成る、利劍變じて勝佛頂と成る、後邊紅蓮花輪の中に忽嚕唵字あり、變じて(一)蓮花上の鉤と成る。鉤變じて除障佛頂と成る。左後隅花輪の中に輙嚕唵字あり、變じて五股杵と成る、杵變じて廣生佛頂と成る。左邊綠色花輪の中に勃嚕唵字あり、變じて八輻金輪と成る、輪變じて最勝佛頂と成る、前への左隅紫色花輪の中に素嚕唵字あり、變じて白螺と成る。白螺變じて無量聲佛頂と成る。次の大輪の外に七寶圍繞せり、佛前を始めとして次ての如く輪珠女馬象藏兵なり、(此七寶の次第は攝眼壽鈔に依れり)次虛空藏等の八大菩薩圍繞し、次大吠等の八大明王圍繞す」。

或る傳(裏書)に曰く、智拳印に、大勝金剛の眞言を用ふ」。(二)宗惠之を傳ふ。

○印　智拳印。(大師の御傳)先德の傳に曰く、此の印に陀羅尼を誦す。　○根本大印(又一字心密の印と名く。)

虛心合掌して、二頭指を屈して掌に入れ、二大指を以て之を押す。眞言に曰く、(秘密一字心と名く)

曩莫三滿多沒馱引喃、阿入　○攝一切(一)佛頂輪王本三昧耶の印。此の印、右に旋つて一たび旋すこと一佛一輪。九たび旋すこと九佛九輪なりと。云云　二手を以て十指を散し開て二掌の根を並ぶ。此の印指の上に十字の眞言を散じ安く。　○金剛熾盛光明

(一)蓮花の上の鉤　是れ尊勝佛頂となる。

(二)宗惠　安祥寺なり。

(三)佛頂輪王云云　此の印は二手開き散し小指の下の方を付くるなり、此の印の左の大指よりの右の大指に終るなり、左の大指の頭は殘指の終りなり、右の大指の端は道場觀の如く種子を觀ずなり、此の如く誦し勃駄に順へて各十反唱へ、百反唱へ、百十反唱へ、百反なり、是は一佛頂を具する意なり。

佛頂輪王自在十字眞言に曰く　　曩謨引尾微閉の切、引嚕引左曩野、曩謨引婆去誐縛覩引瑟尼二合灑野、婀入引怛嚕帢、三合吒嚕帢、三合咄嚕帢、三合訥嚕帢、三合忽嚕帢、三合室嚕帢、三合勃嚕帢、三合素嚕帢、三合沒馱沒馱沒馱沒馱沒馱沒馱沒馱沒馱　○正念誦眞言（攝眼毒女に之を出す私に曰く、次上の眞言の要を取るか。）婀、怛嚕帢、吒嚕帢、咄嚕帢、訥嚕帢、忽嚕帢、室嚕帢、勃嚕帢、素嚕帢、吽。私に曰く、或は秘密一字心を用ひ、或は大佛頂の小呪を用ゆることを又は得。

○八大佛頂印言、（一）胎藏の如し。又一字頂輪念誦の軌に在り。二說の中、用否は任意。光聚を始となす。

△虛空藏印言（虛心合掌して、空を以て水の中の文を押し、二風を以て空の上を押す。）唵一阿迦去引捨二揭婆耶三唵阿利迦入摩利五慕利、娑縛賀　△普賢印言（二羽外縛して二中指を立て合はす。）三昧耶薩怛鑁　△金剛手印言（內縛して五股の印風を屈して空の甲を捻す。）唵阿羅曩莫三滿多縛曰羅敕、戰拏摩賀嚕灑拏吽　△文殊印言（虛心合掌して、火水を押し中を持す。風火輪並べ合はせ摩尼珠を持するが如し。）曩莫三曼多沒縛左那　△除蓋障印言（福智虛心合して地水甲を合はせ月に入れ、空を以て水の駄引南、阿、去引種子薩怛縛二合係多弊弩誐多怛藍二合怛藍二合藍藍、娑婆賀　△地藏印言（二定惠拳に爲て二中指を開き立つ。）唵訶訶訶、微三摩曳、娑婆賀　△觀音印（二羽外縛して二頭、指蓮形の如し。）唵阿嚕力迦、娑婆賀　△慈氏印言（合掌して二風を屈して甲を逐はせ二空を以て上に覆ふ。）曩莫三滿多沒馱南、唵梅怛隷野阿、娑婆賀　○八大明王印言　△(三)大唉（右の空地の甲を押し、肘を立て左拳空風捻す。）（異）持花の印なり。唵縛曰羅

（一）胎藏白傘蓋を始となし一字頂輪王軌は光聚を始めとなす。
（二）定惠云云　內縛拳のこと。
（三）大唉　左の拳地水火の三指開き散ずるなり。

吒賀沙耶、吽發吒。　△步擲（右の手三股の印にして外に向ふ。左の拳肘を上ぐ。注に曰く、大指小指の甲を押す。左右同印相ひ對ふ。）唵引賀嚕吽、二合矩嚕吽、二合部嚕吽、二合素嚕吽、二合惹嚕吽、二合虐　△降三世（二羽臂を交へ金剛拳にして惠相ひ鉤して進力を立つ。）瑟瑟儞遜婆、吽縛曰羅吽泮吒　△大威德（內縛して二中指を立て合はす。）唵吽惡吽　△不動（劍印常の如し。（異）順逆加持。）阿左羅羯拏、戰拏娑駄耶、吽發吒　△馬頭（二手三補吒に作くり、二風指を屈して甲を合せ空指の根の本を去ること稍々一麥許りにして相著けず、二空並べ立て稍々其の甲の頭を仰ぐ即ち是れなり。）唵賀耶紇里縛、吽吽吽發吒　△(二)無能勝（右の手空風を捻して心に安き、左の手肘を立て、五輪を外に向へ立つ。）唵戶嚕戶嚕、戰拏里摩登擬、娑婆賀、　△(三)大輪（定惠の手各々金剛拳に作り、進力檀惠相ひ鉤す是れなり）唵縛曰羅二合斫紇羅二合吽引　○(三)普通佛頂印言（虛心合掌して左右の五指稍々深く交へて中節に至せ花の掌中に在るが如し。）娜莫三去滿多母駄引南、摩鼻音鉢羅二合底賀多舍引娑上曩引南唵斫訖羅二合韈轉舌底唵吽引　金輪佛頂略念誦法（不空羂大師御請來）に曰く、行者若し事緣の爲めに急速に遍く十佛頂の印を結ぶこと能はずんば、但し此の印を結び、諸佛頂の眞言を誦すれば、普く通じて修行に於て亦過失なし（文）星宿等難を爲す時用ふべき眞言。私に曰く、熾盛光儀軌に、熾盛光佛頂の眞言と名く。　攝一切佛頂輪王經に曰く、爾時に佛頂輪王復眞言を說て曰く、曩莫三曼多重沒駄喃、阿鉢羅二合底賀多、上捨娑曩南、引唵引佉佉佉吽、佉吽吽吽入縛二合羅、入縛二合羅、鉢羅二合入縛二合羅、鉢羅二合入縛二合羅、底瑟妃二合底瑟吒二合瑟置吒二合娑頗二合吒娑頗

（一）無能勝　右の手空風火を捻し掌內屈するなり、左の手は大を掌に入れて一度垂れ下すなり。
（二）大輪　常の小金剛輪の印なり、眞言は小呪なり。
（三）普通　諸佛頂に通ずる故にいふ

(一)大佛頂小呪此の次下に曼荼羅の圖あり今之を略す。

二合吒娑縛二合賀。此の眞言又大日劔印。咸德光明の軌等に出たり、各の少小異あり。大旨は同じ、除災敎令輪之に同じ。 若し此眞言を誦すれば、所有の執曜惡星、本命胎業の宿等を凌逼するとも、皆悉く變じて吉祥と爲る。速に生死流轉を離れて、疾く無上菩提を成ず。印は三股の印なり、曰く、被甲護身の印の如し、熾盛光法用に出たり、(異)に曰く、二大各の中指の第二節を押す。」文

○部主　阿彌陀　私に曰く、攝經の說に任せば、敬愛に之を行すべし。仍て爾云ふか。小野僧正は調伏に行せらる。部主は降三世か。(異本)　○諸尊　八大佛頂

○勸請　金輪佛頂轉輪王、八大佛頂諸轉輪　○禮佛尊勝の法の如し伴僧八人なり。時の間伴僧は陀羅尼を誦す。大陀羅尼。別に在り。　○御加持には小呪を用ふ。　○(一)大佛頂小呪(朱)智拳印之を用ゆ」異になし　怛儺也二合他引唵引阿囉麗引尾捨娜尾捨娜滿駄滿駄滿駄儺滿駄儺吠引羅縛曰羅二合幡引捉泮吒吽、引敍林二合泮吒、娑婆二合引訶

闍後に曰く。一切佛頂輪王經の說に依て之を圖す。各種子は攝眼毒女に依る。　○小野の略頌　最勝觀音馬頭尊　無邊慈氏大輪尊　光聚虛空大吠尊　廣大普賢步擲尊　白傘金剛降三世　勝佛文殊大威德　尊勝除蓋不動尊　極廣地藏無能勝

口に曰く、廿餘軍荼利とは卽ち智惠の瓶にして是れ灌頂の瓶なり、此法を行ずる人諸佛頂の位に至て、卽身成佛する義なり、故に經文に曰く、只だ此生に於て肉身を轉ぜずして、能く大佛事を成ず故に一切有情を利益して佛身を獲。

○八大佛頂異名。　最勝金輪攝諸輪王　無量聲無邊聲。遍照妙響　光聚神通放光　發生廣大大轉輪破魔高佛頂　白傘

(一)今曰く　以下元海の云ふことなり。

(二)靈巖寺　圓行なり。

蓋異相奇特　勝佛無比　尊勝除障捨除摧除摧毀　廣生極廣、最高、雜觀、黃色　辨事、　或る本曼荼羅の圖の中央は鍐字なり。」私に曰く、攝經に中央の尊を說て、曰く、「爾の時、世尊の身一切佛頂輪王の相を現作す。手に八輻の金輪を持して七寶師子の座に處す。文　內供の大佛頂圖に曰く、中央の攝一切佛頂輪王は、手に八輻の輪を持す。種子惡字。　本說に相ひ叶ふ。本經に敬愛に行ずべしと見えたる事。　攝經に曰く、即ち東方如來の面前に於て、赤色の輪の中に、光聚佛頂輪王等を現ず。文　或る先德の曰く、此の法は增益或は息災に之を行ず文　(一)今曰く、尊勝の法に相ひ濫するか。之を思ふべし、但し此の法は又調伏にも之を行すべし。

或る說に曰く、八佛頂を、又は大佛頂と曰ふ。文　小野秘密鈔に眞雅の傳を引いて曰く、五佛頂を大佛頂となす文　(二)靈巖の傳に曰く、白傘蓋を以て摩訶頂となす。壇に十六の鏡を置く。文　或る人は光聚佛頂を以て本尊となす」此の說異本に出づ。　用鏡の事は大佛頂經の說なり。私に曰く、十六とは、九佛頂と並に七寶か、大理趣房の曰く、金輪を以て摩訶頂と爲す文　此の傳の意は種子は部嚕吽、三形は金輪なり。人多く此の說を用ふ、大數院も亦此の說を用ふ。　師說に曰く、大佛頂は是れ諸佛頂の惣名なり。攝一切佛頂輪王を本と爲

す秘事なり。文　○三佛頂胎藏の軌、大日經に出づ。發生　廣生　無邊　○五佛頂五佛頂經並に胎の軌に出づ。輪、蓋、光、高、勝。要略軌には五指の名となす。大指を始となす。

○八大佛頂常の如し、裏書に曰く、大佛頂經第一に曰く、（五卷の經）大佛頂、白傘蓋、高佛頂、勝佛頂、光聚佛頂なり、是の如くの大佛頂眞言王、一切如來三摩地勤勇力等殊勝三摩地に入て、一字頂輪王を成就す」云云。

○十佛頂八佛頂に攝一切佛頂、及び普通佛頂を加ふるか、普通佛頂の事、重て審かに之を決すべし。五佛頂を以て大佛頂となす、此の意か、

○注進大佛頂御修法一七箇日支度の事

合　五色糸各の三丈五尺兩境の料各一筋　蘇　蜜　名香　白檀、沈水、薫陸、鬱金、甘松　五寶黄金、白銀、眞珠、瑠璃、琥珀　五藥　赤箭　人參　茯苓　石菖蒲　天門冬。五香　蘇合　零陵　青木　白脇　鷄舌。五穀　大麥　小麥　小豆　胡麻　粉。大壇一面　護摩壇一面　壇敷布二端、兩境の料　燈臺八本　脇机四脚　禮盤二脚　半疊二枚　經机三前　燈臺三本　油一斗五升五合但し五升は大檀の料、一斗五合は護摩の料、　米十五石五斗兩壇供料各の七石雜器等の値一石五升　芥子袋一口　布四丈兩壇供養料各の二丈　阿闍梨一口　伴僧　承仕三人大壇一人、護摩壇二人　淨衣白色　駈仕六人　見丁二人各淨衣　日食　右注進件の如し。　應德二年二月十九日　行事法師　阿闍梨權律師義範

○○(一)文殊一字、五字、六字、八字。　八字の軌に曰く、若し能く陀羅尼一返を念誦すれば、即ち自ら護ることを得。兩返すれば能く同伴を護る。若し三返を誦すれば、即ち大いに住處を

(一)文殊は ḍ字なり。種子は

護る、乃至七返すれば卽ち能く一切衆生の諸の苦難等を摧く、若し著衣せんと欲はん時は、當に七返を加持すべし。能く惡毒諸の災難を除くと。」以上は異本曼荼羅の事の奥に之れあり。此れ尤も吉し。

○○八字文殊息災　○種子ḍ　○三摩耶形劍大理趣房厚に曰く、青蓮の上に三股、或は師子頭　○尊形　師子王の座に乘じて　智惠の劍を操持し　左に青蓮花を執る　花臺に智杵を立つ　首髻に八智の尊あり　暉光十方に遍ず。　○道場觀「壇場の上に五峯八柱の寶樓閣あり、樓閣の內に七寶莊嚴の壇あり、壇の上に大圓明の月輪あり。月輪の中心に心字あり、字變じて師子王と成る、其の背上に頞哩字あり、字變じて蓮花と成る、蓮花の上に紇字變じて八字文殊師利菩薩と成る、首べに八髻あり、前に五髻、中に一髻、後に二髻　八髻の上に各〻佛在ます、右の手に智惠の劍を操持し、左の手に青蓮花を執る、其の上に智杵を立つ、光明十方を照す。　○印言內縛して二大指を並べ立て、屈して師子口の如し、師曰く、秘印なり。　唵阿尾羅吽欠左洛寶藏陀羅尼經に出づ。或は如意寶の印明同く之を用ゆ。謂く合掌二頭寶形、口傳迦、悉地耶二合悉地也、二合眞多摩捉、囉多那二合吽　師說に曰く、八字の眞言は八大童子の種子に充つ。仍て中尊の種子を加へて之を誦すべし、眞言の末に常に紇字を加ふ。又事に隨て用る等加誦すべきか。增益若し福慶祿位吉祥の事を求めは心中に室利二合字を書す。云云、ḍ息災若し息災除難の事等を求めは心中に

當て滿字を書せ。　敬愛 ओ 若し降伏怨人を求めば心中に淡字を書せ、此注意かならず、又降伏怨人よりは敬愛貴きか、云云　敬愛 ह्रीः 外道の因果を信ぜざる等の者の惡心をして摧滅せしむる爲には心中に懸置利三合字を書せ。軌　の意委しく之を見るべし。

阿利也曼殊子利　○密號　般若金剛、又は吉祥金剛　○勸請　八大文殊大聖尊、

蓮花部中諸聖衆　○八大童子或る傳に曰く、八大童子の惣印には、八葉の印を用ゆ。　召請童子　計設尼童子　救

護惠童子　鳥波計設尼童子　光網童子　地惠幢童子　無垢光童子　不思議惠童子。

八字文殊の法には　妙吉祥破諸宿曜障の印言尤も用ふべし、(一)相應の故に。云云

○(二)妙吉祥破諸宿曜障の印　內縛、指節を痛て並べ過めて二空を立つ。　唵薩縛(サラバ)囉(ナ)乞(キ)叉(シヤ)怛(タ)羅(ラ)二合三摩曳、室利

曳、娑婆賀

注進　八字文殊御修法支度の事　合

五寶　金　銀　眞珠　瑠璃　水精。五香　沈　丁子　薫陸　白檀　龍腦。五藥　檳榔

子　訶梨勒　遠志　甘草　石菖蒲。五穀　稻穀　大麥　小麥　大豆　胡麻。御明油

一斗五合　壇供米八石三斗　壇一面　脇机二前　燈臺四本　禮盤一脚　半疊一枚　壇敷布一端　佛供覆布二丈　大

幔一帖　麻子袋　阿闍梨　伴僧六口　承仕二人　駈仕四人　見丁二人　淨衣白色　右注進件の如し

天永二年二月二十七日　阿闍梨少僧都法眼和尙位

(一)相應の故に云云　此の印獅子口の印なる故に師子口と又頭と觀ず。

(二)妙吉祥云云　此の眞言下に異本には曼荼羅の圖あり。今は之を略す

八字文殊御修法所

奉供　大壇供冊異本は三十二箇度　護摩供冊異本は三十二箇度　諸神供六箇度。

奉念　佛眼眞言一萬三百返、大日眞言四千二百返、本尊眞言五千九百返、降三世

眞言四千二百返、大威德眞言四千二百返、無能勝眞言四千二百返、馬頭眞言四千二

百返、破宿曜眞言四千二百返、一字金輪眞言二萬九千返。

右　太上天皇御息災安穩增長實壽恒受快樂御願圓滿、彖ては天變怪異消除解脫の奉爲

に、今月五日より始め今日に至る並に二七箇日夜の間六口の伴僧を率ゐ殊に精誠を致

して修し奉ること右の如し。

長承三年八月十九日　阿闍梨權少僧都法眼和尙位

內院九尊の種子は儀軌に見えたり。自餘の種子は異本不同なり。今は且く一本の圖に

依て万太羅を畫く。

○曼荼羅の事　儀軌に曰く、其の曼荼羅の法は、先づ心に當てゝ一の圓輪を作せ、由

し滿月の如し、中心に當て滿字を書け、次に字の後ろより北面に唵字を書け、次に右

に旋て東北の角に阿(アク)入字、東方に味(ヒ)字、東南の角に羅字、南方に餅字、西南の角に佉(キヤ)

字、西方に左字、西北の隅に洛字、此の九字を以て内院と爲す。中尊は或は院中に於て妙吉祥童子を畫け、其の頂に八髻あり、前に五髻、頂上に一髻、頂後に兩髻あり、一一の髻の上に皆佛身あり、次に第一院に八文殊を安布する布位の法を說く。尊の前へ南面に請召童子を畫け、次に西南の隅に計設尼童子を畫け、次に西南の右邊に救護惠童子を畫け、次に西北の隅に烏波計設尼童子を畫け、次に後ろ面の北方に光網童子を畫け、次に東北の隅に地惠童子を畫け、次に東方の左邊に無垢光童子を畫け、次に東南の隅に不思議惠童子なり。此の如く八方の妙吉祥童子菩薩、皆面を中尊に向つて奉敎勢の如くして皆蓮花の上に坐して、一一各〻師子に乘る、二手各〻執持標幟印契有り、畫くこと須く如法にすべし、右の（一本には右を左に作くる）圓輪の外四角の中に於て四忿怒明王を畫け、東南の角に降三世金剛を畫け、西北の角に無能勝明王、西南の角に閻曼德迦金剛、東北の角に馬頭明王を畫け。

○次に第三院の十六大天の外護を說く、尊の前に當つて鉤菩薩、次の西に焰魔后、次の西に羅刹主を、角に當つて燒香菩薩、次の角北に羅刹后、次の北に水天、西門に索菩薩、次の北に龍天后、次の北（異には北の字無し）に風天王、西北の角に花菩薩、次の東に風天后、次の東に毗沙門天、尊の後の北方に鎖菩薩、次の東に毘沙門后、次の東に伊舍那天、東北に燈菩薩、次の南に伊舍那后、次の南に帝釋天、左方の東門に鈴菩薩、次の南に帝釋后、次の南に火天、東南の角に塗香菩薩、角の西に火天后、次の西に焰魔天なり。」（以上三院）

○(一)文殊師利菩薩法

「壇上に阿字有り、淨月輪と成る、月輪の中に暗字有り、變じて書篋と成る、篋變じて文殊師利菩薩と成る、首に五智の冠を著す、後に圓明の月輪有り、師子王の背に乘つて蓮花臺の鞍に坐す、熙怡微咲して衆生を愍念し給ふの形なり、左に那羅延有り(二)四種の標幟を持す、右に金翅鳥王有り、可恐怖の形を作す、及び無盡惠菩薩、善哉童子、須菩提等恭敬して立てり。」

○根本印（虛心合掌して火、水を押す、風を屈して空の甲を捻す。）

大聖尊、蓮花部中諸聖衆

陀曼殊室利二合縛曰羅二合儼鼻引哩耶二合縛曰羅沒弟曩謨引蘇都二合諦　○五字眞言　唵阿羅縛左那　○勸請　文殊師利

殊師利　○讚　縛曰羅二合底乞儞孥二合摩訶也那縛曰羅二合句賒摩訶庾　○密號　般若金剛　又は吉祥金剛　金剛界次第（內供）に曰く、文殊師利菩薩の

(一) 文殊云云　諸文殊通用の法なり

(二) 四種の標幟　文殊經五に云く、那羅延天は四辟なり、寶棒と螺と劍を執る金翅鳥に乘ると。

(一)左の掌云云　梵篋の印。
(二)禪林寺　宗叡
(三)一字文殊　此は一髻文殊といふと同じ、此の法は産生等に用ひて智慧を祈るには用ゐず。
(四)八葉　此の印の上に寶を觀ずるなり。
(五)劍印　大日劍印なり。
(六)妙童子　此の深惡を表すを以て人法の戲論を離る。玄法の軌に云く、妙吉祥其の身の臂金色にして五髻の冠ありと。
(七)二羽外に云云　縛をいふ。
(八)超勝云云　八家の錄に金剛超勝三界經文殊師利菩薩秘密眞言といふ此經は文殊の內證を說く。

印は、(一)左の掌を仰けて右の掌を以つて之を覆ふ文　(二)禪林寺の本に曰く、梵篋の印、眞言に曰く　波羅底婆多俱吒耶尾、娑婆賀

○○(三)一字文殊法

○種子、𑖀𑖽　○三形、蓮花上に如意寶珠　○尊形　左の手に青蓮花を執り上に如意寶珠有り、右の手外に向ふて五輪を垂れ下して滿願の印に作る。○印　(四)八葉　○心眞言　唵娑摩那始哩吽、娑縛賀　○隨心眞言　唵阿捨摩顚吽、娑縛賀　○小呪正念誦に之を用ふ。叱洛叱焰　(五)劍印に曰く、大聖文殊師利一字の眞言　唵地哩四闍、四合　娑縛賀

○○五字文殊法

○種子　𑖀　○三形　劍以上五字陀羅尼儀軌に見えたり。　○尊像　身色紫金の如くして　(六)妙童子の相を作す　五髻あり首の飾りを被むり　寶五方の冠を冠ぶる　右に金剛劍を持す　上に發つて焰光を爲す　左の手に青蓮を持す　般若の梵篋有り　諸の妙色の相に住して　身淨月輪に處す。　○根本印(七)二羽外に相ひ叉へて忍願俱に申べて直くす、二度を屈して上の節猶劍の峰の狀の如くす、心額喉と頂と各々此の一返を誦す。　○眞言　唵縛佉泚娜淡　○五字眞言五字の名は(八)超勝三界經に出づ、印前の如し。　阿羅跛左那　○五髻の印秘印　二手金剛掌にして、右の無名指を以つて左小指の面に拄へ、左の無名を以つて

(一)瑜伽の記　智證の作。
(二)左を用云云　持花の印。
(三)法の契　金剛界三十七尊中西方の法菩薩の印、即ち左の風空相捻して餘の五指は散ず是れ持花の印なり、但し右は劍印なり。
(四)寂圓傳云云　青蓮花上五股の事なり、故に五股の印といふ、手を以て結ぶ印はあらず、此印は寂圓の傳受集第一に出たり
(五)青蓮花の契云云　八葉の印、七反念誦すとは明七度誦して三度召くなり。

右の小に拄へ左の中、右の頭に拄へ、左の頭右の中に拄へ、大指を並べ立つ、是れを五字文殊師利の印と名づく。(一)瑜伽軌の文なり、軌の文解し難し依つて之を鈔す。　○眞言文上の如し　軌には大呪を用ふ。四卷略出經三に曰く、利菩薩の印言を出す。　又(二)左を用つて心に置く煩惱障の如し、右を以つて劍と爲して以つて之を殺すと想へ、此の密語を誦す。　唵跛折羅帝乞瑟那淡引」

金剛界次第內供に曰く、金剛利の印眞言、文に曰く、左は心に花を持すと想へ、右の手に劍を把るが如し文　謂く左の手は(三)法の契と同じ、右の手又金剛拳に作つて覆ひ振るへ劍を把ると想へ、眞言に曰く、唵跛折羅帝乞瑟那淡。又曰く、金剛利菩薩印眞言、文に曰く、縛に由つて惡願を堅て上の節を屈して劍の如くす。文　謂く二手金剛縛して二中指を堅て急に初文を曲げて劍峰の如くす是れなり、眞言に曰く　唵縛佉泚娜澹」　(四)寂圓傳に曰く、種●阿、三●青蓮の上に五股、印●智惠の手を以つて拳とし、其の風火輪相ひ合せて一として之を舒ぶ、是れ繼室尼の印なり、尊像。文

○○六字文殊法大師の口傳に依つて之を錄す、極秘法なり。

○種子𑖀　○三昧耶形、青蓮花の上に智杵を立つ。　○根本印(五)青蓮花の契を以つて七度念して三度之を召く。惠の風度師子王に乘ずと想へ。道場に來臨して願を與へて滿足せしむ。

(一)文殊院　胎藏文殊院の文殊の眞言なり。
(二)嗽口　嗽口の呪は此尊の呪なり

○眞言　唵縛髻曩娜莫（バクイダナウマク）　師曰く、唵字を除いて終りに淡字を加ふべきか。　右の呪は文殊師利菩薩六千の頌を以つて釋す、此の呪を誦すれば一切の罪を滅して一切の善を生ず。云云　大呪は胎藏(一)文殊院の眞言を用ふ、眞言の功力は種種雜呪に出たり言に謂く、唵縛平聲（バ）鷄淡納莫（ケイタナウマク）或る秘書に曰く、唵縛計娜曩莫（バケイダナウマク）　或は又六字の眞言有り、(二)漱口香水加持の眞言に用ふ、秘事なり。○羯磨身　首（こうべ）に五智の髻（ケ）を戴き左に青蓮花を執り、花の上に智杵を立つ、右は惠劍なり、蓮花に半跏坐して師子王の上に乘ず。」以上文殊院除災敎令輪法の文なり。

師曰く、一字●五字●八字文殊に準せば、此の尊は六髻有るべきか、但し法寶藏經の意は、八字文殊尙（ホ）五髻を說く、上の形像又彼の說に同じきか。

○梵號○密號文殊法の如し。　經に曰く、若し人毎日七返を誦すれば、決定して罪業悉く除滅することを得ん、若し毎日一百返を誦すれば、其の人臨命終の時現前に文殊師利菩薩を見ると。文　平治元年七月十一日之を鈔し畢る。

一曼殊師利五字陀羅尼瑜伽儀軌又は五字陀羅尼頌と名づく、不空譯。　一文殊師利菩薩儀軌供養法不空　一金剛頂超勝三界經說文殊師利菩薩秘密心眞言不空　一曼殊室利童子菩薩五字瑜伽法不空　一金剛頂瑜伽文殊師利菩薩經不空　一大聖文殊師利菩薩佛刹功德莊嚴經三卷不空　以上

(一)五大虛空藏云　此の法の如きは眞實の極秘法なり、瑜祇經金剛吉祥大成就品より出たり、又五部肝心記を以て本書と爲す。
(二)天變怪異云云　天變怪異を止んが爲めには息災を修す、是れは明星天子の本身なる災天が故に諸の星宿の王と爲す、仍て此の功用あり、增益に修すること五佛共に寶部の三摩地に入る、故に尤も其の謂れあり。
(三)辨事　軍荼利は結界なり。

○先づ入堂○著座○普禮○塗香○護身○加持香水等○啓白○神分○五悔○四無量觀○勝願○大金剛輪○地結○四方結

○道場觀如來拳印(裏)或口傳に曰く、道場觀、一股・三股・羯磨を皆立つ、其の上に寶を觀ず、畫像にも杵を立て上に寶を畫く、但し東方は横へたる杵の上に寶を置く。文　「想へ、妙高山の頂に寶樓閣あり、中に大圓明の月輪有り、一圓の中に於て更に分つて五とす、中の圓明に於て鑁字、東に吽字、南に怛洛字、西に頡哩字、北に惡字あり、字變じて寶珠と成る、寶珠變じて五佛と成る、五佛轉じて五大虛空藏菩薩と成る。」色相執物等經說の如し。

異本裏書に出づ。字義は無盡莊嚴の次第に依る

或は曰く、法界の圓明を轉して明星の圓明と成る、諸の星宿を以つて眷屬とす。」云云　如來拳印加持七處。」　○次に大虛空藏○小金剛輪○送車輅○請車輅○鉤召○拍掌○(三)辨事軍荼利印明　○虛空網○火院○大三摩耶○閼伽○花

(一)字輪觀　此に出すにあらずして正念誦の次に出るる所なり、此の處にあることは元と三部鈔共卷本たりしを綴帖にする時に裏書を表に出すべき爲め誤りて此に出せしか。前頁に圖あり。

(二)大日云云　此の處に大日印言、本尊印言を出す可からず、振鈴の次にほ卅七尊を出すことはあるなり。

(三)香隆寺　寛空なり。

(四)內縛云云　五大虛空藏の惣印なり。

(五)又の印　此の外五股は眞言を出さず。

(六)佛　佛眼、大日と、本尊五大虛空藏の惣呪別呪との二つなり、軍荼利、大金剛輪、一字金輪なり。

(七)五部肝心記　高雄の眞濟の記、大師の御口決を記し玉ふ。

座○振鈴　○(一)字輪觀　○次に(二)大日印言○次に本尊印言○次に八供養若くは五供養印言、事供　○四智讃(三)香隆寺次第に曰く、次に實部の讃之を用ゆ。　○摩尼供○三力○禮佛○次に佛眼印言○次に大日印言○次に本尊秘印(四)內縛して二大指並べ立て、鉤の如くす。　眞言　曩莫三曼多沒馱喃、鑁吽怛洛二合入枳哩二合入惡、入娑縛賀師說に曰く、五十萬返を滿すべし。云云　眞言前に同じ　○次に

○(五)又の印　蓮華僧正の傳　五股印外二中指實形に作る五峰皆寶有りと想へ。

金剛吉祥印言　○次に破宿曜障印言○次に加持念誦並に正念誦○次に本尊印○次に散念誦能滿諸願虛空藏印言、金剛吉祥破宿曜障、七曜惣呪、二十八宿惣呪。(異本裏書に曰く、散念師。(六)佛、大、惣別、軍、大、一、香隆寺傳に曰く佛大本破軍一。」　○次に後供養○後鈴○普供○三力○禮佛○廻向○解界○撥遣　唵縛曰羅囉怛那、鑁吽怛洛乞里惡、蘖車蘖車穆　○惣呪又の樣異裏師說之を用ふ。　唵縛曰羅囉怛曩、鑁、娑婆訶。　同印二頭指二中指に加して寶金剛の如くして頂上に印言(七)五部肝心記に出づ(異)　兩手外縛して、中指寶形の如くす、四處を加持す、曰く心額喉頂。唵縛曰羅囉怛曩、鑁、娑婆訶。　同印二頭二大三辨寶の如くして頂の右置く。　唵縛曰羅囉怛那、吽、娑縛賀。　同印二頭(八)寶蓮花の如くして頂の後に置く。　唵縛曰羅囉怛曩、怛洛、入娑縛賀。　同印二無名二頭指立て交へて、寶三股の置く。　唵縛曰羅囉怛那、紇里、二合入娑婆賀。　同印二無名二頭指立て交へて、寶三股の

如くして頂の左に置く。唵縛曰羅囉怛曩、惡、娑縛賀

○部主(金輪、或は佛眼。師說之を用ふ。異)或說は增益の部主は寶生。　○諸尊段三十七尊　天段には七曜星宿等殊に加杓して祈り供すべし。」範俊の說なり。　○勸請本尊の句。天變等を祈るには是の如く言ふべし。本尊五大虛空藏、七曜星宿諸眷屬。增益の時には本尊の次に三十七尊諸薩埵と言ふべし。

○發願　本尊五大虛空藏尊。蓮臺僧正の說は、伴僧には胎藏虛空藏院の眞言之を誦せしむ文　但し歸命の句を除いて唵字を加ふるなり、御加持にも同じく此の呪を用ふ、小野の門流には、伴僧にも本尊の眞言を誦せしむ。私に曰く、蓮臺僧正の說之を用ふべし。　先德の口傳に曰く、此の法を修せば必ず佛舍利五粒、若くは一粒壇中に安置して之を行ず文　口授に曰く、藥種は眞珠、若しくは五寶合して以つて藥とす」五部肝心に出づ至極秘事なり。　(異裏)安祥寺請來の曼荼羅、寶光虛空藏の三形證文とすべきか。

寶は、馬蹄の形の如し。(異裏)口傳に曰く、二頭二小開き立て、二中二無名二大寶形の如くす、但し二名を密み屬けて中指の下を透すなり。　(一)圖後に曰く、靈巖行和尙曰く、三辨或る鈔に(二)三果の玉を下に二果、上に一果を置く、三十七尊の眞言の歸命の句は、皆唵縛曰羅囉怛曩にして、印は皆金剛合掌を用ふ。師說に曰く、三十七尊皆寶部の三摩地に入つて、各〻虛空藏の印を持す、振鈴の後、必ず三十七尊の印言之を用ふべし。　一切義成就輪五部富貴吉

(八)寶蓮花　此の時は二大は外縛にするなり。

(一)圖後　此の文の前に增益の壇の圖あるも之を略し圖後の文を擧ぐ。

(二)三果　三顆の誤りか。

祥の法なり」云云

○禮佛梵號　曩謨達摩馱都、法界　阿迦賒葉婆、虛空藏　冒地薩怛縛耶、菩薩摩訶薩　摩訶薩怛縛。　曩謨囉怛曩提惹、光寶　曩謨縛曰羅、金剛　阿迦賒葉婆、同前　冒地薩怛縛耶、摩訶薩怛縛。　曩謨跋納麼蓮花　阿迦賒葉婆、同前　冒地薩怛縛耶、摩訶薩怛縛。　曩謨羯磨提縛、業用　阿迦賒葉婆同前　冒地薩怛縛耶、摩訶薩怛縛。

或人曰く、經に(一)毗首羯磨三摩耶とは、此れは北方業菩薩と虛空藏と同像の故に云云。或曰く外縛を毘首羯磨の三摩耶と言ふ、外五股の印。師曰く、秘秘中の深、千金傳ふる莫れ。云云　唵縛曰羅囉怛曩、阿阿暗惡惡　肝心に出づ。

○五大虛空藏の曼荼羅之を懸くべし。圖像、經の如し。　此の像の前に對して五字の明一千萬返を誦すれば、即ち富貴成就を得て速かに大悉地を獲。小野僧正辛酉の年、此の法を修して五十箇日を滿する夜御夢想有り、仍つて勸賞を行せらる、醍醐の座主(二)覺源、法眼に叙する是れ其讓なり。遍知院僧都、堀河院の御祈に此の法を修す、天養二年小僧都元海、三寶院の廊に於て長星の祈に此の法を修せらる、兩壇の伴僧八口なり、惣じて八七箇日之を修す、第四七日に及んで(三)長星現せず。久安三年又長星の祈に、(四)前大僧正同院護摩堂に於て此の法を修せらる、第二七日にして長星現せず、三七日に結願

(一)毘首羯磨功巧と翻して事業成辨の義なり、北方業菩薩は虛空庫なれば庫は藏と通ずる故に同體なり。

(二)覺源　小野仁海の弟子なり、勸賞は褒美なり、天子より官位を賜る時に仁海弟子の覺源に位を讓り玉ふことを云ふなり。

(三)長星　世に箒星にして計都星の精なり。

(四)前大僧正　定海なり。

す。保元元年十一月の比、美福門院の御願に、權律師實運此の法を勤修す、兩壇伴僧八口三七箇日なり、匡房の日記に曰く、金門烏敏の法。文　是れ作り文字なり、謂く、カノトのトリのトシと云ふ事なり。」　小野僧正件の年に此の法を修する故か

(裏)眞言の句に三說あり。法三御子の說は瑜祇經の印明には、種子の上に鬱命を加ふ。範俊の說は種子の上に唵を加ふ。神護寺の五部肝心記の說は、種子の上に唵縛曰羅囉怛曩を加ふ。香隆寺之に同じ」或は曰く、五股の上に皆寶を安す、此れは五相成身の三摩耶に之を用ふ。尤も秘すべし。諸佛加持の後惣印呪を用ふ」文

○注進五大虛空藏御修法一七箇日支度の事。

合　蘇　蜜　名香白檀」　五寶　金　銀　瑠璃　水精　眞珠」　五香　沈　白檀　龍腦　薰陸　安息」五藥　白朮　人參　甘草　遠志　苟杞」五穀　稻　大麥　小麥　菉豆　胡麻」　大壇一面、護摩壇一面、燈臺八本　脇机四前　禮盤二脚　半疊二枚　壇敷布二段　供覆料布一段　大幔一帖　閼伽桶二口有り　長櫃二合　桶三口の內足桶一口杓有り　檀供米十五石　御明油一斗八升　阿闍梨　伴僧八口　承仕二人　駈仕四人　見丁二人　淨衣白色

右注進件の如し。　保元元年十二月十三日　行事如眞　阿闍梨權律師實運

五大虛空藏　御修法所

奉供　大壇供一百六十八箇度　護摩供一百六十八箇度　諸神供